

**土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書**

**奈良**

5万分の1

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

# 土地分類基本調査（土地履歴調査）説明書「奈良」

## 目 次

はじめに

1	調査の概要	1
1.1	調査の目的	1
1.2	調査方法及び成果の概要	1
1.3	調査実施体制	2
2	調査地域の概要	3
2.1	地域の位置	3
2.2	地域の行政概要	3
2.3	地域の特性	6
3	調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係	8
3.1	地形概説	8
3.2	地形細説	10
3.3	地形と土地の開発、保全及び利用との関係	13
3.4	地形と災害及び保全との関係	16
4	土地利用の変遷の概要	17
4.1	過去の土地利用状況の概要	17
4.2	土地利用変遷の概要	24
5	調査地域の災害履歴概要	30
5.1	災害履歴概説	30
5.2	災害履歴詳説	31
6	調査成果図の見方・使い方	34
6.1	地形分類図	34
6.2	土地利用分類図	37
6.3	災害履歴図	37
6.4	成果図面の使い方	38
7	引用資料及び参考文献	40
7.1	引用資料	40
7.2	参考文献	42

資料

災害年表

はじめに

国土交通省国土政策局では、国土調査の一環として、全国の都道府県と協力して「土地分類基本調査」を実施し、5万分の1地形図を単位に、土地の自然的条件（地形、表層地質、土壌）等について調査した結果を、調査図及び調査簿として整備・提供してきました。

近年、集中豪雨や大地震の多発により、毎年のように水害や地盤災害が発生していますが、これらの災害の中には、土地本来の自然条件を無視した開発や利用に起因するものもあり、土地の安全性に対する関心が高まっています。

このため、平成22年度から新たな土地分類基本調査として、地域ごとの土地の改変履歴や本来の自然地形、過去からの土地利用変遷状況、自然災害の履歴等に関する情報を総合的に整備し、土地の安全性に関連する自然条件等の情報を、誰もが容易に把握・利用できる土地分類基本調査（土地履歴調査）に着手しました。

この「奈良」図幅の調査成果は、近畿圏地区の土地分類基本調査（土地履歴調査）の1年目の成果として、平成24年度に実施した調査の結果をとりまとめたものです。本調査成果については、行政関係者や研究者等の専門家だけでなく、学校教育・生涯学習・地域の活動等に取り組む団体や住民の方々、居住地域の地形状況を知りたい方、新たに土地の取引をされようとする方々、不動産の仲介・開発等に関係する企業の方々、その他地域の自然環境、土地利用、災害等に関心を持つ方々等に、幅広く利用していただきたいと考えています。

最後に、調査の実施にあたり終始ご指導をいただいた地区調査委員会の皆様をはじめ、ご協力をいただいた関係行政機関等の方々に深く感謝申し上げます。

平成25年3月

国土交通省 国土政策局 国土情報課

# 1 調査の概要

## 1.1 調査の目的

本調査は、自然災害等に対する土地の安全性に関連して、土地本来の自然条件等の情報を誰もが容易に把握・活用できるように、過去からの土地の状況の変遷に関する情報を整備するとともに、各行政機関が保有する災害履歴情報等を幅広く集約し、総合的な地図情報として分かりやすく提供することにより、災害等にも配慮した土地取引、災害時の被害軽減、被災しにくい土地利用への転換を促すなど、安全・安心な生活環境の実現を図ることを目的とする。

## 1.2 調査方法及び成果の概要

これまでの土地分類基本調査の調査項目に加え、土地の開発等により不明となった土地本来の自然地形や改変履歴等を明らかにするとともに、過去からの土地利用変遷情報を整備し、災害履歴情報を編集するため、主に次の方法により以下の土地状況変遷及び災害履歴情報からなる調査成果を作成した。

調査成果図は、概ね縮尺5万分1の精度で編集し、同縮尺の地形図を背景図として地図画像（PDF ファイル）を作成した。

### (1) 調査方法

土地状況変遷情報は、5万分の1都道府県土地分類基本調査成果や国土地理院作成の土地条件図等既存の地形分類図、明治以降に作成された旧版地図、昭和20年頃の米軍撮影空中写真、最新の空中写真等を活用して作成した。

災害履歴情報は、地方公共団体や関係行政機関等が調査した水害、地震災害等の現地調査図等の資料より編集した。

### (2) 本調査による調査成果

#### ① 土地状況変遷情報

##### i. 自然地形分類図

土地本来の自然地形である山地・丘陵地、台地、氾濫原低地、自然堤防、旧河道、湿地、三角州・海岸低地等に分類した図である。なお、現況の人工改変地にあつては改変前の自然地形を復元し分類している。

##### ii. 人工地形分類図

人工改変地を埋立地、盛土地、切り盛り造成地等に分類した図である。なお、本調査成果図では、人工地形及び自然地形を重ねて「人工地形及び自然地形分類図」にまとめて作成している。

##### iii. 土地利用分類図（2時期分）

明治・大正期（現在から概ね120年前）と昭和40年代（同概ね50年前）の2時期の土地利用状況を復元し分類した図である。

#### ② 災害履歴情報

##### i. 災害履歴図

浸水状況、地震被害等の既存資料図を基に、被害分布等の図にとりまとめて編集し

たものである。

ii. 災害年表・災害関連情報

年表形式の災害記録、災害に関する文献情報等を取りまとめたものである。

③ 調査説明書

調査成果図等の利用の参考とするため、本説明書を作成している。

④ 調査成果図 GIS データ

各調査成果図の GIS データを作成している。

### 1.3 調査実施体制

#### (1) 地区調査委員会(敬称略、順不同)

委員長

海津 正倫 奈良大学 文学部 教授 (名古屋大学 名誉教授)

委員

(学識経験者)

加藤 茂弘 兵庫県立人と自然の博物館 主任研究員

高田 将志 奈良女子大学大学院 人文科学系 教授

三田村 宗樹 大阪市立大学大学院 理学研究科 教授

(関係府県・政令市)

奈良県 地域振興部 地域政策課

京都府 農林水産部 農村振興課

大阪府 都市整備部 総合計画課

兵庫県 県土整備部 まちづくり局 都市政策課

大阪市 計画調整局 開発調整部

堺市 危機管理室

神戸市 危機管理室

#### (2) 実施機関

① 計画機関

国土交通省 国土政策局 国土情報課

② 受託機関

地形分類調査・土地利用履歴分類調査

アジア航測株式会社

災害履歴調査

北海道地図株式会社

実施管理

株式会社 パスコ

## 2 調査地域の概要

### 2.1 地域の位置

本調査の対象地域（以下「本図幅」という。）は、国土交通省国土地理院発行5万分の1地形図の「奈良」（北緯  $34^{\circ} 40' \sim 50'$ 、東経  $135^{\circ} 45' \sim 136^{\circ} 00'$ （座標は日本測地系<sup>\*</sup>））の西側半分、京都府南部と奈良県北部にまたがる面積約  $21.165\text{km}^2$  の範囲である。図 2-1 に本図幅の位置図を示す。

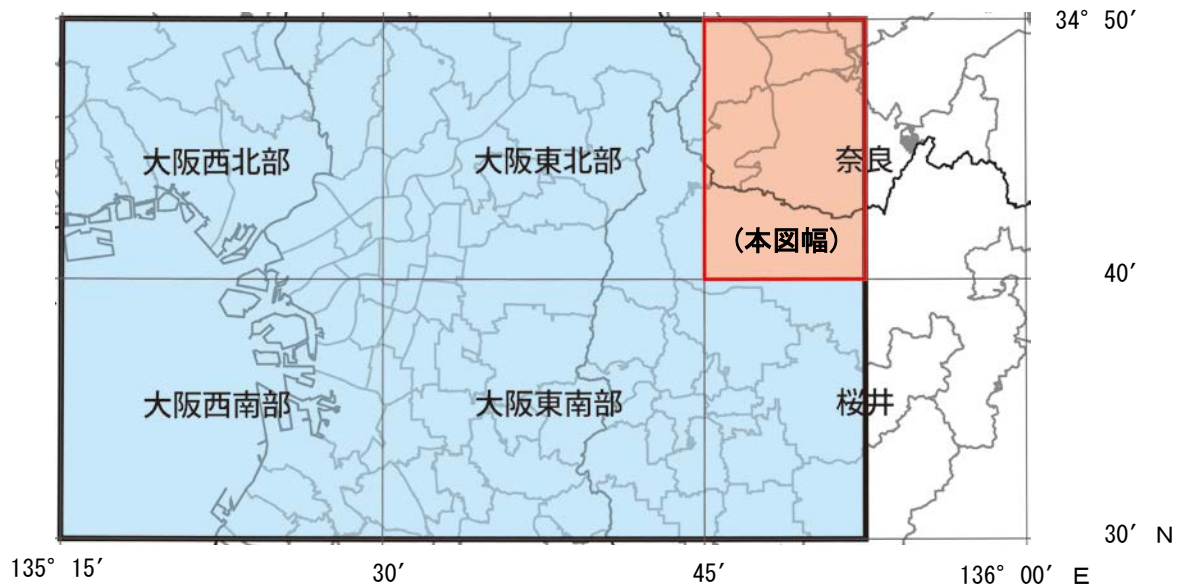


図 2-1 調査位置図

### 2.2 地域の行政概要

本図幅に関係する市区町村は、京都府の3市4町（城陽市、京田辺市、木津川市、綴喜郡井手町、綴喜郡宇治田原町、相楽郡和束町、相楽郡精華町）、奈良県の2市（奈良市、生駒市）である（図 2-2、表 2-1）。

<sup>\*</sup>世界測地系（日本測地系 2000）では、 $34^{\circ} 40' 11.7'' \sim 34^{\circ} 50' 11.7''$  N、 $135^{\circ} 44' 49.8'' \sim 135^{\circ} 59' 49.7''$  E の範囲。

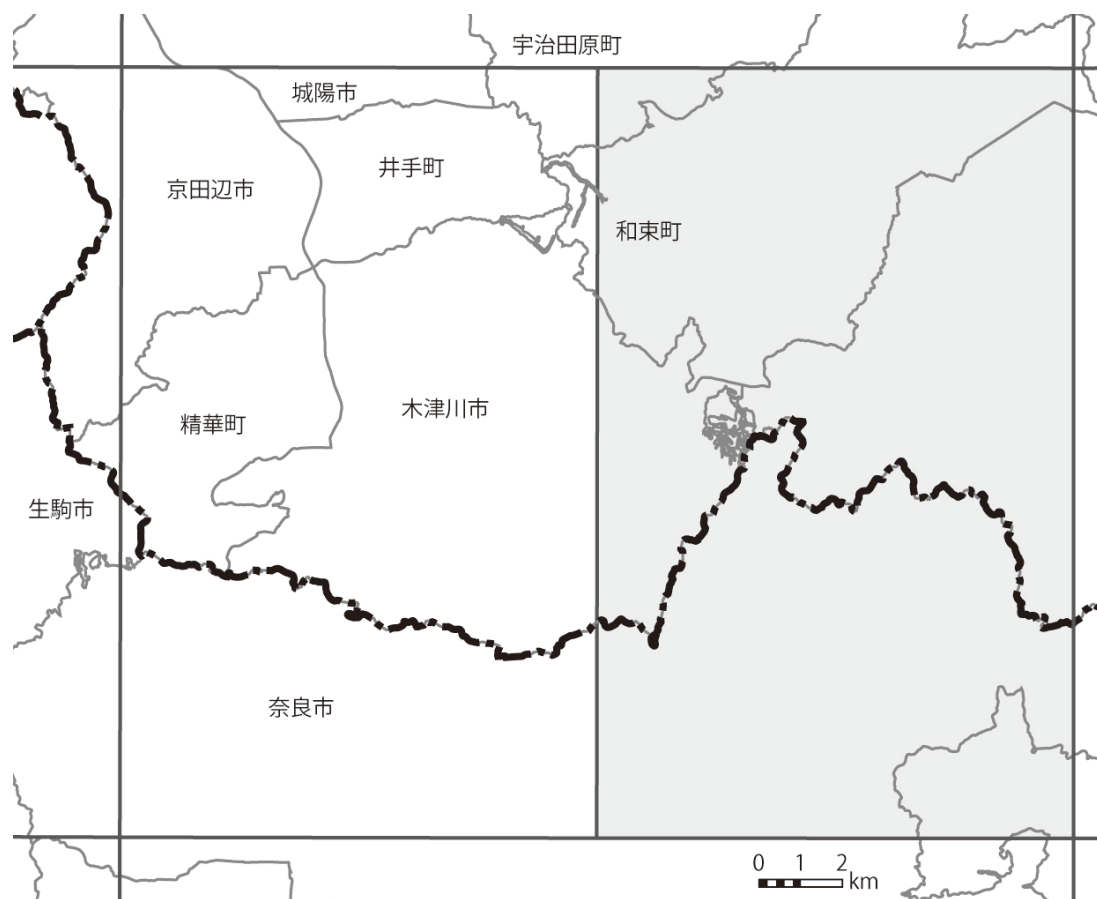


图 2-2 関係市区町村

表 2-1 関係市町村（面積、人口、世帯数）

	図幅内面積	行政面積	行政区域内世帯数	同 人口総数
京都府	ha 15,016	ha 32761	世帯 104,850	人 277,838
城陽市	860	3,274	30,233	78,888
京田辺市	2,767	4,294	28,868	69,607
木津川市	6,505	8,512	25,414	71,194
綴喜郡井手町	1,799	1,802	3,127	8,252
綴喜郡宇治田原町	443	5,826	3,160	9,564
相楽郡和束町	148	6,487	1,520	4,306
相楽郡精華町	2,494	2,566	12,528	36,027
奈良県	6,150	33,002	203,824	483,953
奈良市	6,025	27,684	156,058	364,498
生駒市	125	5,318	47,766	119,455
計	21,165	65,763	308,674	761,791

1. 図幅内面積は、本調査における図上計測値。

2. 行政面積は国土地理院「平成 24 年全国都道府県市区町村面積調」（平成 24 年 10 月 1 日現在）による。

3. 人口、世帯数は平成 22 年国勢調査人口集計結果を元に各県で算出された推計値（平成 24 年 10 月 1 日現在）である。



## 2.3 地域特性

### (1) 沿革

本図幅は、北部がかつての山城国、南部がかつての大和国に属しており、明治4(1871)年廃藩置県により、京都府、奈良県がそれぞれ設置された。京都府は、当初は山城と丹波の一部のみであったが、明治9(1876)年に丹後等を併合してほぼ現在の京都府となった。奈良県は、明治9(1876)年に堺県に編入され、その後、堺県が明治14(1881)年に大阪府に編入されたことにより大阪府の大和地域とされたが、明治20(1887)年大阪府より分割され、再び現在の奈良県となった。

本図幅内には、旧平城京跡が含まれ、古くから複数の街道が整備されており、京都とは伏見を経て奈良に至る街道が、大阪とは生駒山地の峠を越える街道が複数存在した。明治以降は鉄道整備が進み、明治25(1892)年には大阪と奈良の間が大阪鉄道(現JR関西本線)で、明治29(1896)年には京都と奈良の間が奈良鉄道(現JR奈良線)で結ばれ、神社・仏閣の多い奈良県が観光地として大きく栄える一因となった。また、大正から昭和にかけては現在の近鉄奈良線、京都線の整備も進み、より大阪、京都とのアクセスが向上した。

昭和期に入ってから、奈良市街や奈良と大阪を結ぶ鉄道沿線での宅地開発が進み、大阪のベッドタウンとして発展した。さらに、昭和末期以降、京都府、大阪府、奈良県にまたがる京阪奈丘陵に関西文化学術研究都市(けいはんな学研都市)の開発が始まり、新産業・新文化の発信拠点として現在も整備が進められている。

### (2) 気候

奈良の気候を奈良地方気象台の平年値(表2-2)からみると、年降水量は1,316.0mmで、月降水量は3月と5~10月にかけて100mm/月を超え、梅雨期の6、7月と秋霖期の9月にはそれぞれ160mm/月を超えている。月降水量の極小は12月の47.3mm/月で、12月~2月の降雨は40~70mm/月で推移している。年平均気温は14.9℃、最寒月(1月)の日最低気温の月平均は-0.2℃、最暖月(8月)の日最高気温の月平均は32.6℃となり、盆地特有の寒暖差の大きな気候となっている。

風速は3月に極大となるが、月ごとの変動は大きくない。風向は、1月、12月を除き北寄りの風が卓越し、年間では北北東の頻度が最も高い。また、年間日照時間は1,823.0時間で、1~2月に少なく120h/月以下となっているが、夏季の8月に極大(205.4h/月)となり、200h/時を超えている。

表 2-2 奈良の気候表 (1981~2010 年の平年値)

要素	降水量	気温			風向・風速		日照時間
	(mm)	(°C)			(m/s)		(時間)
	合計	平均	最高	最低	平均	最多風向	合計
統計期間	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1981 ~2010	1990 ~2010	1981 ~2010
資料年数	30	30	30	30	30	21	30
1 月	49.6	3.9	8.7	-0.2	1.7	南	116.7
2 月	63.3	4.4	9.6	-0.1	1.7	北北西	115.5
3 月	103.2	7.6	13.4	2.3	1.8	北北西	147.4
4 月	97.7	13.4	19.8	7.4	1.7	北北西	180.3
5 月	143.5	18.0	24.1	12.5	1.4	北北東	184.8
6 月	188.8	21.9	27.2	17.5	1.4	北北東	143.5
7 月	165.1	25.8	30.8	21.8	1.4	北北東	162.7
8 月	111.8	26.9	32.6	22.6	1.4	北東	205.4
9 月	163.3	22.9	28.2	18.8	1.3	北北東	150.3
10 月	111.1	16.6	22.2	12.1	1.2	北北東	154.5
11 月	71.4	11.1	16.5	6.4	1.2	北北東	134.5
12 月	47.3	6.2	11.4	1.9	1.4	南	127.3
年	1,316.0	14.9	20.4	10.3	1.5	北北東	1,823.0

「日本気候表 (気象庁, 2011)」による奈良地方気象台の平年値。

統計期間は 1981~2010 年の 30 年間。但し最多風向は、1990~2010 年の 21 年間。

### (3) 地形及び地質の概要

本図幅の地域は、中央構造線を底辺とし、大阪湾・琵琶湖・伊勢湾を含む三角形の地域 (近畿三角帯) の中央南寄りに位置し、南北方向に延びる地塊運動の軸が平行に配列している。「奈良」図幅全体では、東から信楽山地-大和高原、京都盆地-奈良盆地、生駒山地の順に配列しており、本調査地域の「奈良」図幅西側では京都盆地の南端にあたり、低地帯が広い面積を占めている。この低地帯を流れる木津川は、「奈良」図幅東側では信楽山地-大和高原に対して東西方向の峡谷を形成し、信楽山地の南縁を限る伊賀上野断層崖とほぼ一致している。その後、木津で北に転じて、京都盆地-奈良盆地の低地を京都盆地最低点に向かって北流し、淀川に合流している。木津川沿いの低地の両側には丘陵地形が形成され、浅い谷が樹枝状に発達している。

地質的にみると、木津川右岸の信楽山地では中・古生代のチャート・左岸を含む泥岩及び花崗岩質岩石といった固結の岩石が広く分布しているのに対し、木津川左岸の生駒山地では砂や砂泥互層の半固結堆積物で丘陵地が構成されている。また、木津川沿いの沖積層と、信楽山地や生駒山地沿いに発達する扇状地・低位段丘では、未固結堆積物により形成されている。木津川沿いの沖積層は多くが砂により構成され、低湿地では泥質の土地となる。扇状地や低位段丘では、礫の堆積物が多い。

(5 万分の 1 土地分類基本調査「奈良」説明書による)。

### 3 調査地域の地形及び土地の開発、保全及び利用との関係

本調査では土地条件図などの既存資料や空中写真判読などに基づき、自然地形分類図と人工地形分類図を作成した。

自然地形分類図については、現在、改変済みの範囲についても、終戦直後の米軍写真(1/40,000)や明治・大正期の旧版地形図などからもととの地形を復元・図化した。古墳などの歴史的な地形改変地は人工地形とみなし、周囲の地形をもとに自然地形を復元した。人工地形については低地での宅地開発による盛土地・丘陵地などでの大規模改変地(人工平坦地)、人工平坦地での旧谷地点の位置、宅地開発などによる切土地といった改変された地点を、新旧の空中写真や地形図の比較判読の上、抽出・図化した。

#### 3.1 地形概説

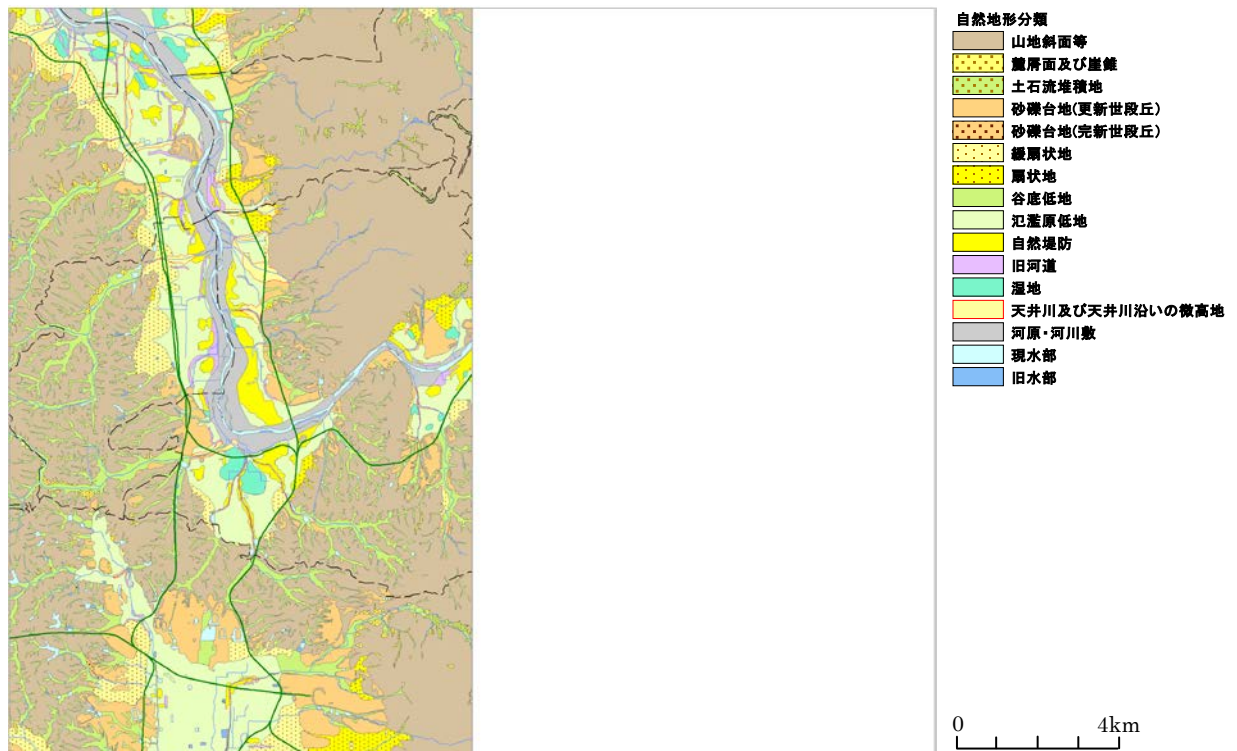


図 3-1 奈良図幅の自然地形分類図

本図幅の自然地形は山地、丘陵地、低地に分類され、山地、丘陵地が広い面積を占め、木津川周辺と南部の山地・丘陵地に囲まれた地域が低地となっている(図 3-1)。

本図幅の地形は、第三紀に生じたと考えられる南北方向の地塊運動の結果を反映しており、図幅東部及び西部に広がる山地・丘陵地の間を南北方向に低地(盆地)が分布している。木津川は木津川市山城町付近で西から北に直角に流れの向きを変える。南北方向の地質構造を持った山地・丘陵地と木津川の流下方向が直行する区間では地形的に木津川市加茂町と山城町の間で谷幅の狭い峡谷になる。峡谷の周辺は山地と盆地の間の大規模な撓曲、褶曲に伴う断層崖や撓曲によって生じた断層などといった地殻変動に伴う地形が多く見られる。

山地は本図幅東北部と東南部にあり、東北部の山地は主に中・古生界の堆積岩によって構成されて、地殻変動で変形している箇所が多く、東南部の山地は主に領家花崗岩で

構成されており、撓曲や断層が見られる。

丘陵地は本図幅中央部を東西方向にかけて広がり、図幅北部にも図幅北側（本図幅外）の山地から広がる丘陵地の一部分が見られる。図幅西部の丘陵地は大阪層群と呼ばれる第三紀末から第四紀はじめの堆積岩層からなっており、主に火山灰と湖沼成・河成の粘土・シルト・砂・礫で構成され、図幅北部の丘陵地も主に大阪層群由来の礫層で構成されているが、東部の丘陵地は領家花崗岩を基岩とし、花崗岩由来の砂礫が多く、大阪層群はあるものの堆積層は薄い。

低地をなす盆地は図幅北部の木津川沿いと図幅南部の盆地の2つに分けられる。北部の盆地は木津川上流部では東西方向に分布するが、木津川が北流するとともに南北方向に分布する方向を変える。盆地内の氾濫低地は排水能力が低く、水害が多発する地帯である。表層部は主に古生・中生界のチャートや粘土岩・砂岩で構成されている。

表 3-1 は、本図幅における市町村ごとに自然地形の面積を集計した結果である。

表 3-1 本図幅内の市町村別地形分類面積

区分		京都市								奈良県		総計
		城陽市	京田辺市	木津川市	綴喜郡井手町	綴喜郡宇治田原町	相模郡和束町	相模郡精華町	奈良市	生駒市		
丘山地・丘陵地	山地斜面等	3.80	11.09	35.51	12.50	3.70	1.48	12.06	27.35	0.95	108.42	
	麓面及び産錐	0.18	0.42	0.12	0.12	—	—	0.33	0.39	—	1.55	
	土石流堆積地	—	0.00	0.12	0.31	0.04	—	—	0.34	—	0.81	
	山地・丘陵地 計	3.98	11.51	35.74	12.93	3.74	1.48	12.38	28.08	0.95	110.78	
台地	砂礫台地(更新世段丘)	0.13	0.55	4.10	1.10	0.07	—	0.44	0.95	0.01	15.34	
	砂礫台地(完新世段丘)	—	0.01	0.00	—	—	—	0.01	0.08	—	0.09	
	台地 計	0.13	0.56	4.10	1.10	0.07	0.00	0.44	1.03	0.01	15.44	
低地	緩起伏地	0.35	2.23	0.83	0.15	0.09	—	1.77	3.46	0.01	8.89	
	扇状地	0.29	0.08	1.13	0.56	0.00	—	0.03	1.50	—	3.60	
	谷底低地	0.45	2.97	5.47	0.56	0.50	0.00	4.35	7.18	0.28	21.75	
	氾濫原低地	1.27	5.16	7.89	1.18	—	—	3.27	9.22	—	27.98	
	自然堤防	0.30	0.65	2.55	0.15	—	—	0.54	0.21	—	4.59	
	旧河運	—	0.49	0.21	0.20	—	—	0.38	0.12	—	1.40	
	澤地	0.33	0.51	0.93	0.03	—	—	—	—	—	1.80	
	天井川及び天井川沿いの敷高地	0.27	1.25	1.17	0.14	—	—	0.14	0.07	—	3.04	
	河原・河川敷	1.04	1.61	3.77	0.72	—	—	1.13	0.04	—	8.31	
	低地 計	4.28	15.15	23.95	3.69	0.59	0.00	11.61	21.80	0.29	81.35	
水部	堤水部	0.21	0.45	1.23	0.26	0.02	0.00	0.47	1.16	0.00	3.79	
	旧水部	0.00	0.01	0.04	0.02	—	—	0.05	0.17	—	0.29	
	水部 計	0.21	0.46	1.27	0.28	0.02	0.00	0.51	1.34	0.00	4.08	
合計		8.60	27.67	65.06	17.99	4.43	1.48	24.94	60.25	1.25	211.65	

資料：「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による

### 3.2 地形細説

本図幅における山地・丘陵地などの地形地域区分は 10 万分の 1 土地分類調査「大阪府」（国土庁、1976）および、20 万分の 1 土地分類調査「京都府」（国土庁、1976）や 5 万分の 1 土地分類基本調査（国土調査）「大阪東北部・奈良・上野」（京都府、1981）、5 万分の 1 土地分類基本調査（国土調査）「奈良 大阪東北部 大阪東南部（いずれも奈良県域）」（奈良県、1983）やその他の文献などを参考に、今回の調査結果を踏まえて区分した（図 3-2）。なお地域の呼称は既存資料に従った。

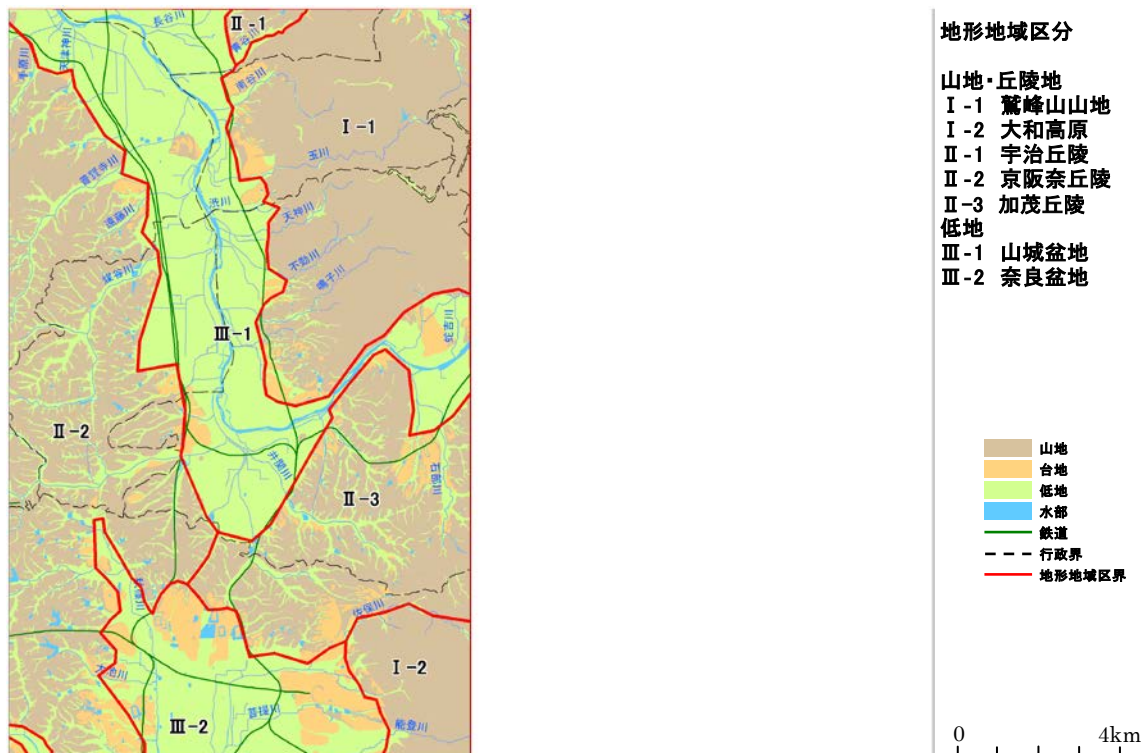


図 3-2 本地域の地形地域区分

#### (1) 山地

**鷲峰山（じゅうぶさん）山地**は鷲峰山（682m）を中心とする標高 300～600m の地塁山地で、北東から南西方向にかけての隆起軸を持つ山地であり、本図幅では 300～500m 程度の山地西部が含まれる。山地背面に小起伏面遺物が見られ、犬打谷には大阪層群の一部の礫層が見られる。東南縁に逆断層をなす傾動性地塁を持つが、本図幅には含まれない。本図幅では米軍写真の判読と 5 万分の 1 土地分類基本調査「大阪東北部・奈良・上野」（京都府、1981）に基づいて地形区分を作成し、木津川右岸に接する台地部までを鷲峰山山地とした。

**大和高原**は、大部分が花崗岩で構成され、第三紀火山岩で構成された標高 200～1000m 程度の山地で、中央部が斑糲（はんれい）岩で構成された山地であり、本図幅では 200～500m 程度の北部が含まれる。頂部は全般的になだらかで、浅いが比較的急な谷壁のある樹枝状の細谷を持つ特徴的な小起伏地形となっている。山地西縁は奈良盆地東縁断層（中央防災会議、2008）を挟んで、奈良盆地に接しているため、この部分には斜面が多く見られる。本図幅では米軍写真判読と 5 万分の 1 土地分類基本調査「奈良 大阪東北

部 大阪東南部（いずれも奈良県域）」（奈良県、1983）に基づいて地形区分を作成し、大和川支川佐保川沿いの谷底平野を北限とし、奈良盆地に接する台地部を西限とした。

## (2) 丘陵地

**宇治丘陵**は主に本図幅北部（図幅外）の低地部に向かって扇状地状に広がる緩やかに傾斜した丘陵地であり、本図幅では南側の一部分が含まれる。主に大阪層群から構成されており、粘土層と砂礫層が交互に積み重なる。地層は南北方向の軸により撓曲している。本図幅の宇治丘陵には学校や病院などの施設が見られる。本図幅では米軍写真判読と5万分の1土地分類基本調査「大阪東北部・奈良・上野」（京都府、1981）に基づいて地形区分を作成し、木津川支川青谷川を南限とし、山城盆地に接する台地部を西限とした。

**京阪奈丘陵**は京都、大阪、奈良にわたって広がる標高200～400m程度の丘陵地で、主に大阪層群によって形成されており、京阪奈丘陵に見られる大阪層群は北東から南西にかけて撓曲や断層によって複雑に変形している。礫・砂・シルト・粘土層から構成されており、層厚の厚い箇所もある。また生駒山地に近い部分では、領家花崗岩の黒雲母花崗岩などを主体とする。大部分が開発により人工改変地となっており、住宅地や道路などが多く確認できる。本図幅では米軍写真判読と5万分の1土地分類基本調査「奈良 大阪東北部 大阪東南部（いずれも奈良県域）」（奈良県、1983）に基づき、山城盆地、奈良盆地に接する台地部を境とし、奈良県市奈良市朱雀と同右京の間の谷底低地を加茂丘陵との境とした。

**加茂丘陵**は本図幅北側にある鷲峰山山地と低地部との断層崖の延長にあり、北西側の低地との間にはその影響を受けて崖部が見られる。領家花崗岩と大阪層群で構成され、比高は100m前後で北西に向けて低くなる。西部に古墳群が見られるほか、団地やゴルフ場といった人工改変が多く見られる。本図幅では米軍写真判読と5万分の1土地分類基本調査「奈良 大阪東北部 大阪東南部（いずれも奈良県域）」（奈良県、1983）に基づき、大和川支川佐保川を大和高原との境とし、山城盆地や奈良盆地と接する台地部までを境とした。

## (3) 低地・盆地

**山城盆地**は木津川が西から北に流れを転じる付近から北に向かって発達した幅約3.5kmの盆地である。東西は断層崖で区切られ幅が広く、東岸の井出付近では合成扇状地や段丘が発達している。両岸の支流の多くは天井川であり（図3-3）、木津川本川も連続的に高い堤防が築かれているため排水不良で、堤内では内水氾濫災害が発生しやすい。木津川両岸の沖積低地は条里制の人工改変が見られる。木津川は京都盆地で宇治川や桂川と合流し淀川となって排水するが、3河川の合流点付近では流下能力が低下するため、河川氾濫や江戸期以降の修築工事などにより流路変遷を繰り返した結果、自然堤防や河川沿いの微高地を残している。本図幅に見られる自然堤防は地形図やDEMから作成した1mコンターを用いて天井川との判別をしておき、天井川と自然堤防の区別が付きにくい場合は天井川沿いの微高地として自然堤防を取り込むこととした。また、木津川沿いに見られる旧河道には、過去に恒常的な流路であったものと洪水氾濫などで一時



的な流路であったものの2通りのものが含まれている。本図幅では米軍写真判読と5万分の1土地分類基本調査「大阪東北部・奈良・上野」（京都府、1981）に基づき、木津川沿いの氾濫原低地、扇状地を山城盆地とした。

**奈良盆地**は奈良県北西部に位置する標高100m以下の断層盆地である。盆地の東縁に奈良盆地東縁断層、西縁南部に金剛断層が南北方向に連なり（中央防災会議、2008）、南縁・北縁も地塊や丘陵で境を持つ。盆地の平面形は断層崖や地塊などの影響により菱形になっている。奈良盆地東縁断層や金剛断層に沿って山麓扇状地が開析を受けた台地段丘が発達している。本地域の地質は全般に扇状地礫層が薄く、部分的に基盤岩である花崗岩が露頭している箇所もあり、扇状地の一部は下部洪積層を切る浸食面となっている。盆地四周からの土砂流出により、山麓付近は大小の扇状地が形成され、それらが盆地付近に細粒の堆積物を運搬するため、中央部は三角州に近い性格の低地になっている。三角州性の低地には自然堤防の発達が見られ、自然堤防上を中心とした土地利用が見られる。盆地に流れ込む大和川の支川の一部区間は天井川になっている。本図幅では米軍写真判読と5万分の1土地分類基本調査「奈良 大阪東北部 大阪東南部（いずれも奈良県域）」（奈良県、1983）に基づき、図幅南部の辺縁台地、氾濫原低地、扇状地を奈良盆地とした。



図 3-3 山城盆地を走る天井川

写真左側に河川が走っているが、右側の宅地・道路の方が河道より低くなっている。

### 3.3 地形と土地の開発、保全及び利用との関係

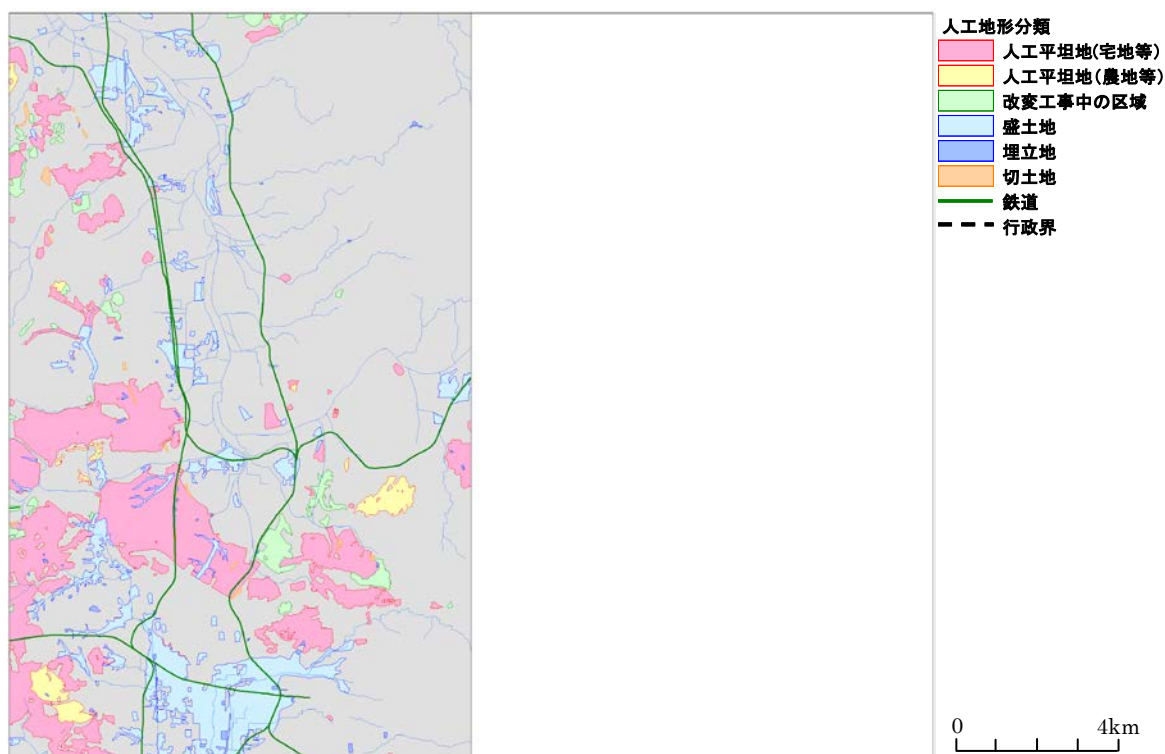


図 3-4 奈良地域の人工地形分類図

本図幅における人工地形を見ると、丘陵地上の人工平坦地と奈良盆地の北側の低平地を中心とした盛土地が目立っている（図 3-4）。また、木津川の周辺でも盛土が見られるが、JR 片町線沿いなど後背湿地上にも盛土がなされ、宅地開発がなされている。木津川流域は古くから本川や支流の氾濫、支川の土石流災害など多くの水害や土砂災害が発生しているとともに、冠水や湛水といった内水被害もたびたび発生している。山城町などは古くから対策がなされているため木津川による被害は少ないが、天井川となった支川からの被害を受けることが多い。（植村、2007）

丘陵地における人工地形は主に宅地開発のための大規模造成に伴う人工平坦地である。丘陵地では尾根部を切土し、その土砂を谷部に盛土して平坦化する造成（谷埋め盛土）が多い。緩斜面や谷部を平坦化した盛土地帯では、地震動による地盤の液状化や降雨による土砂災害などが起きる可能性がある。本図幅では京阪奈丘陵と加茂丘陵の境付近に平城・相楽ニュータウンがある。大規模な人工改変でかつての景観が大幅に変わり、右京、左京、朱雀、神功のような新しい地名や地域社会が生じているほか、新しく駅ができるなど大きく様相が変化している（図 3-5）。このような地域では新しい地域社会が構成されるが、地形によって受けやすい災害への記憶が薄れてしまうため、災害に対して脆弱な地域社会になりがちである。平城・相楽ニュータウンは 1970 年代から本格的な開発が始まり、現在でも開発が続けられている（奈良県立教育研究所 奈良県の暮らし、<http://www.nps.ed.jp/nara-c/multi/kyouzai/narakenchou/hattennsurumati/hattennsurumati.html>）。



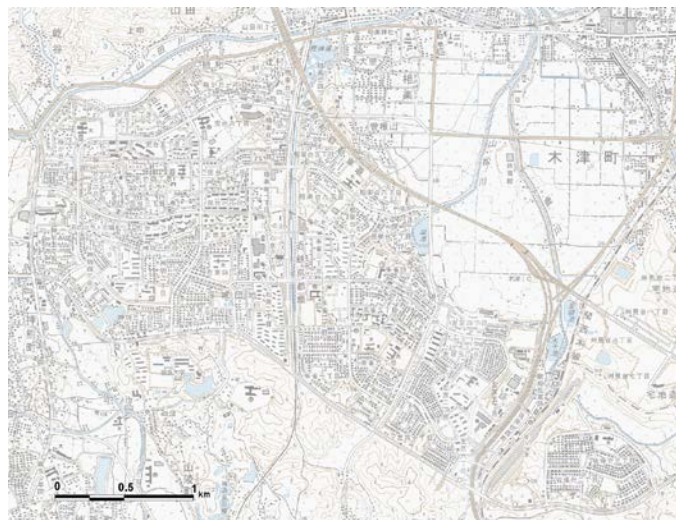
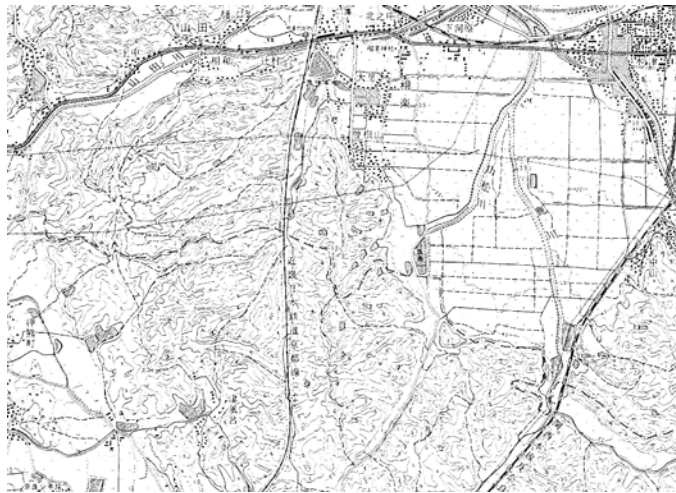


図 3-5 京阪奈丘陵東部地域の変遷

1 : 25000「奈良」(上から) 大正 11 年測図、昭和 42 年改測、平成 18 年更新

昭和 42 年時点までは近鉄京都線が走っている他はほとんど改変が行われておらず地名も記載されていないが、平成 18 年時点では平城ニュータウン計画に伴って平城団地が造成されるとともに兜台、左京、右京、朱雀、神功といった新しい居住地名が誕生しおり、近鉄京都線にも「たかのはら(高の原)駅」が建設されている。

表 3-2 本図幅内の人工地形面積

(単位: km<sup>2</sup>)

分類		人工平坦地		盛土地	埋立地	切土地	改変工事中の区域	人工地形計(a)	自然地形計(b)	(a/b)%
		宅地等	農地等							
丘陵地・山地	山地斜面等	19.49	1.58	0.02	0.00	0.27	2.30	23.67	108.42	21.8%
	麓斜面及び崖錐	0.25	0.01	0.01	—	0.01	0.05	0.32	1.55	20.6%
	土石流堆積地	0.01	—	—	—	—	—	0.01	0.81	0.6%
	山地・丘陵地 計	19.74	1.59	0.03	0.00	0.28	2.35	23.99	110.78	21.7%
台地	砂礫台地(更新世段丘)	0.84	0.17	0.15	—	0.00	0.05	1.21	15.34	7.9%
	砂礫台地(完新世段丘)	0.01	—	—	—	—	—	0.01	0.09	12.9%
	台地 計	0.86	0.17	0.15	—	0.00	0.05	1.23	15.44	7.9%
低地	緩扇状地	0.29	—	0.12	0.03	0.00	0.03	0.47	8.89	5.2%
	扇状地	0.02	—	0.00	—	—	—	0.02	3.60	0.6%
	谷底低地	4.26	0.31	2.37	0.01	0.07	0.30	7.33	21.75	33.7%
	氾濫原低地	0.08	—	10.35	—	—	0.03	10.46	27.98	37.4%
	自然堤防	0.17	—	0.00	—	—	—	0.17	4.59	3.8%
	旧河道	—	—	0.41	—	—	—	0.41	1.40	29.7%
	湿地	—	—	0.25	—	—	—	0.25	1.80	13.8%
	天井川及び因井川沿いの微高地	0.04	—	0.21	—	—	0.01	0.25	3.04	8.3%
	河原・河川敷	—	—	0.02	—	—	—	0.02	8.31	0.2%
	低地 計	4.86	0.31	13.73	0.04	0.07	0.37	19.38	81.35	23.8%
水部	現水部	0.02	0.00	0.00	0.00	—	0.01	0.04	3.79	1.0%
	旧水部	—	—	0.01	0.27	—	—	0.27	0.29	92.9%
	水部 計	0.02	0.00	0.01	0.27	—	0.01	0.31	4.08	7.6%
合計		25.47	2.08	13.92	0.31	0.34	2.78	44.90	211.65	21.2%

資料: 「自然地形及び人工地形分類図」の図上計測による

人工地形の面積を改変前の自然地形の分類別に集計したものを表 3-2 に示す。本図幅内の約 21% が人工改変地であることがわかる。自然地形の中地形分類毎に改変率を見ると、山地・丘陵地で約 22%、台地で約 8%、低地で 24%、水部が約 8% となっている。

山地・丘陵地では、改変の 8 割以上が宅地等の造成に伴う人工改変で、約 20km<sup>2</sup> に及ぶ。改変工事中の地点が 2.35 km<sup>2</sup> あるが、主に住宅造成中となっている地域であり、今後宅地として利用されると考えられる。台地はほとんど人工改変されていないが、工業用地としての平坦化による利用が主となっている。

低地では主に盛土地が多く、特に氾濫原低地では盛土による改変が改変地の 98% となっている。本図幅では住宅造成地などの平坦化によって出た土砂で谷部を盛土している地点(谷埋め盛土)が各所に見られるが、平坦化地において旧谷線が判断できるような箇所では、旧谷線を記入し旧谷が判断できるようにしている。

米軍写真上の河川の一部はその後の河川改修によって、また溜池などの水部、旧版地形図上の旧水部、旧河道などでは埋土や盛土がなされ人工改変されている地点が多い。そのような地点はいずれも地盤条件が悪い。

### 3.4 地形と災害及び保全との関係

本図幅における地形条件と密接な関係を持つ自然災害には、地震による低地部の建物被害（軟弱地盤地での建物倒壊、地盤の液状化による被害など）、地形の人工改変による地盤災害（地震による造成地の崩壊・地盤変形など）、扇状地や山麓谷底低地での崩壊や土石流・地すべりなどの土砂災害、低地部の住宅地での浸水被害（台風や梅雨前線による河川氾濫など）があげられる。特に浸水被害では、本図幅東部の山城盆地や南部の奈良盆地など被害が長期化する可能性のある箇所がある。

#### (1) 地震災害

本図幅を含む近畿地域はたびたび地震災害が発生しており、1891（明治24）年の濃尾地震、1944（昭和19）年の東南海地震、1952（昭和27）年の吉野地震などが本図幅を含む奈良県域で大きい被害を出した災害としてあげられる。近畿地方で近年もっとも大きい被害を出した兵庫県南部地震では本図幅周辺は比較的軽微な被害のみであった。本図幅は明治期以前にはマグニチュード6級の地震が発生したと記録されており（「奈良県耐震改修促進計画」 p3、奈良県、2007）、奈良盆地東縁断層などの断層が分布しているため、内陸性地震が発生する可能性がある。

本図幅には、平城・相楽ニュータウンなどの元の自然地形を改変した新興の住宅地があり、地震による建物の倒壊、盛土部分の地盤の液状化などが生じる可能性がある。そのための対策を考慮しなくてはならない。

#### (2) 降雨災害

本図幅では1953（昭和28）年の昭和28年災害、1961（昭和36）年の第2室戸台風、1982（昭和57）年の台風10号などの降雨災害がたびたび生じている。特に1953年には8月に降雨災害、9月に台風災害と続けて水害が発生し、本図幅内の京都府木津川市山城町などを中心とした京都府全域で死者・行方不明者500人以上、被災家屋7万棟に及ぶ大きな被害を受けている。8月の降雨災害では木津川市周辺の天井川とあわせて、短時間で増水したことが被害を拡大させた要因の一つとなっている（京都府 山城広域振興局、山城の災害記録（昭和28年）、<http://www.pref.kyoto.jp/yamashiro/no-nourin/saigai01.html>）。

本図幅内においては、木津川などの河川と鷲峰山山地、京阪奈丘陵、大和高原などの土砂の発生源となりうる山地・丘陵があるため、降雨による土砂崩れ、河川の氾濫などに対策を施す必要がある。

## 4 土地利用の変遷の概要

### 4.1 過去の土地利用状況の概要

#### (1) 明治 41 (1908) 年頃 (現在から概ね 100 年前) の土地利用

本図幅において発行日が最も古い地形図は、国土地理院の地形図図歴リストによると、明治 45 (1912) 年測図の 5 万分の 1 地形図「奈良」<sup>1</sup>である。この地域では、同時期に 2 万分の 1 地形図も作られていた (「奈良」図幅は明治 41 年測図、同 45 年発行)。2 万 5 千分の 1 地形図はそれより 10 年以上後の大正 11 (1922) 年頃に測図、同 14 (1925) 年頃に発行された。

明治期の土地利用分類図 (第 1 期) は、図歴リストの 5 万分の 1 地形図のうち図面状態が良好であり、鉄道の補描以外の基本的な内容は測図時点が反映されている明治 41 (1908) 年測図、大正 4 (1915) 年鉄道補描の 5 万分の 1 地形図「奈良」と、明治 41 年測図、大正 3 (1914) 年第 1 回部分修正測図の 5 万分の 1 地形図「大阪東北部」(明治期の地形図図郭のずれを補正するため<sup>2</sup>) を選定して、「奈良」図幅の西側半分の範囲について地形図判読により土地利用分類を行ったものである (図 4-1)。

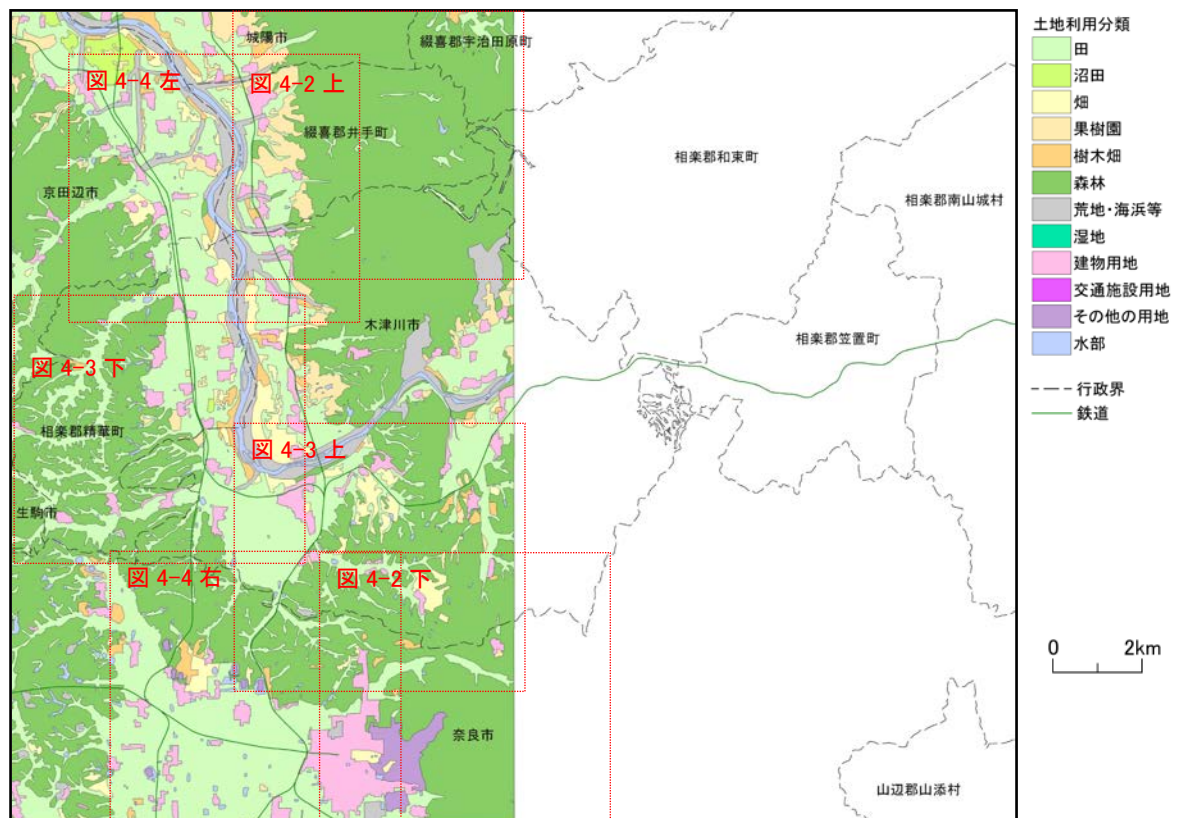


図 4-1 奈良における約 100 年前 (明治 41 (1908) 年頃) の土地利用

<sup>1</sup> 明治 45 年測図、大正 3 年発行の 5 万分 1 地形図「奈良」は、入手した謄本では、擦れた不鮮明な地図描画であったため、本調査には使用しなかった。

<sup>2</sup> 明治期の地形図図郭は測量原点の違いにより、現在の地形図図郭より 10 秒 4 東側にずれている。そのため明治期の地形図を現行図に一致させるには、このずれの補正 (該当範囲の隣接図からの拡充) が必要になる。



### ①山地における土地利用

本図幅の北東部の**鷲峰山山地**は、地域内の標高は500m未満と高くはないが、僅かに狭小な谷底低地に水田があるのみで、地形図には南端部を除いて集落の記載もなく、鬱蒼とした森林が続いている。本図幅南東部の**大和高原**も、奈良の市街地に面した部分（若草山）が公園として利用されている他は森林に覆われている（この森林（春日山、花山等）も県立奈良公園の一部である）。ただし明治期に開通した街道沿い（調査範囲の東側範囲外）に、少数の集落と水田がある（図 4-2）。

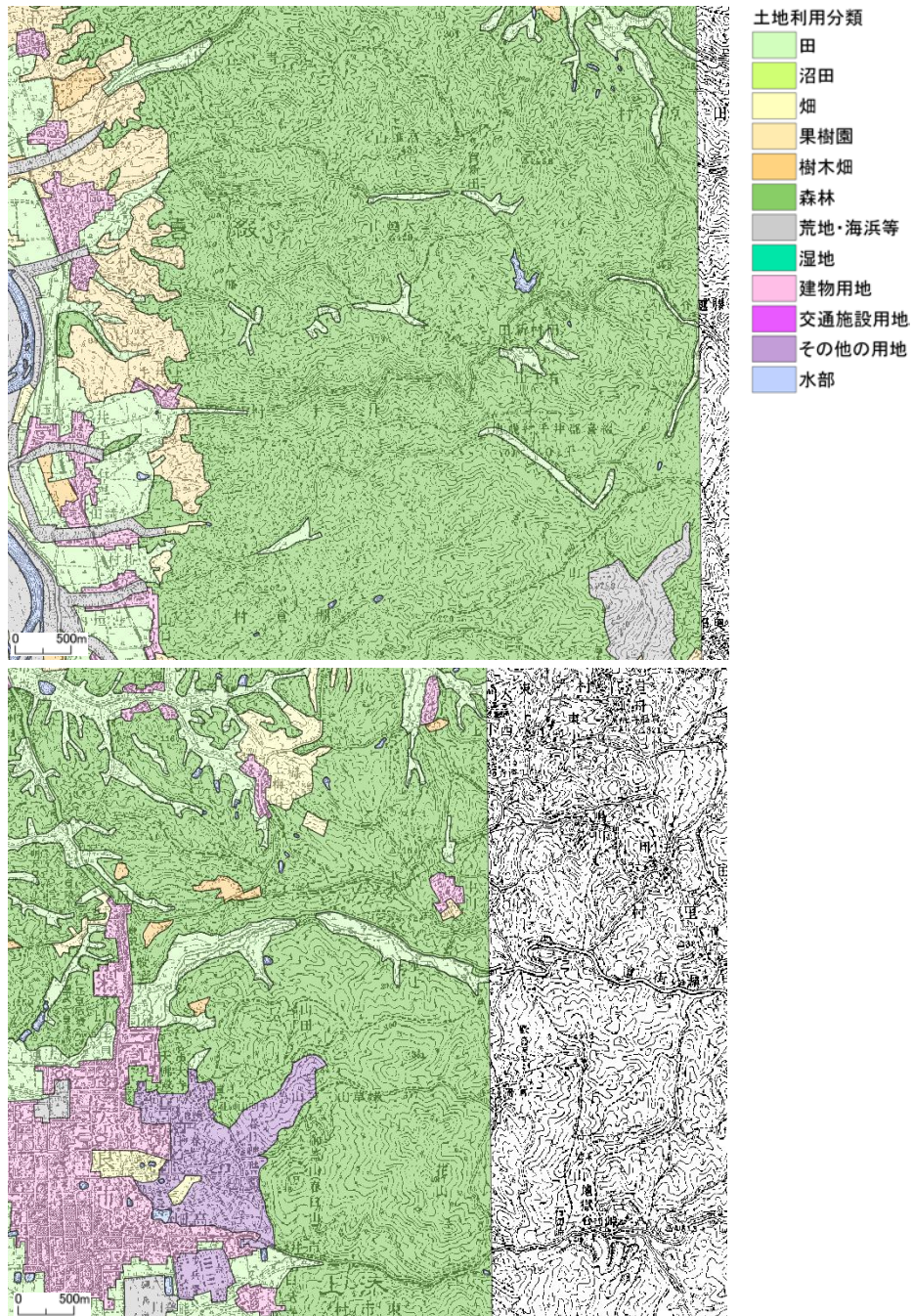


図 4-2 山地の土地利用

（上下とも）1:50000 地形図「奈良」明治 41 年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

上図の鷲峰山山地には森林が広がるのみで、農地や集落等の土地利用がほとんど見られない。下図の大和高原は、奈良の市街地に隣接する若草山が公園として利用されている。この東側には、街道沿いに集落が点在する（図



の右側調査範囲外)。

## ②丘陵地における土地利用

本図幅の丘陵地は、鷲峰山山地と大和高原に挟まれた位置に、木津川の低地を囲む**加茂丘陵**がある。ここでは、樹枝状に伸びる谷低部の水田、斜面を利用した茶畑・果樹園・畑が認められ、集落も点在する。本図幅の西部は、調査地域外西側の生駒山地に連なる**京阪奈丘陵**が続いている。加茂丘陵と同様に樹枝状の低地に水田・畑等があり、こちらの方が規模は大きい。集落は丘陵周縁部の低地との境にある。この地域は、大阪・京都に至近の場所であるが、明治期の山地・丘陵地の土地利用はその利点を活かした宅地開発というものほとんどなく、また木津川沿いの盆地・低地と比べて地形的に優位な点もないため、自然の地形を活かした農業的利用という古い時代の延長上の土地利用であったと考えられる(図 4-3)。

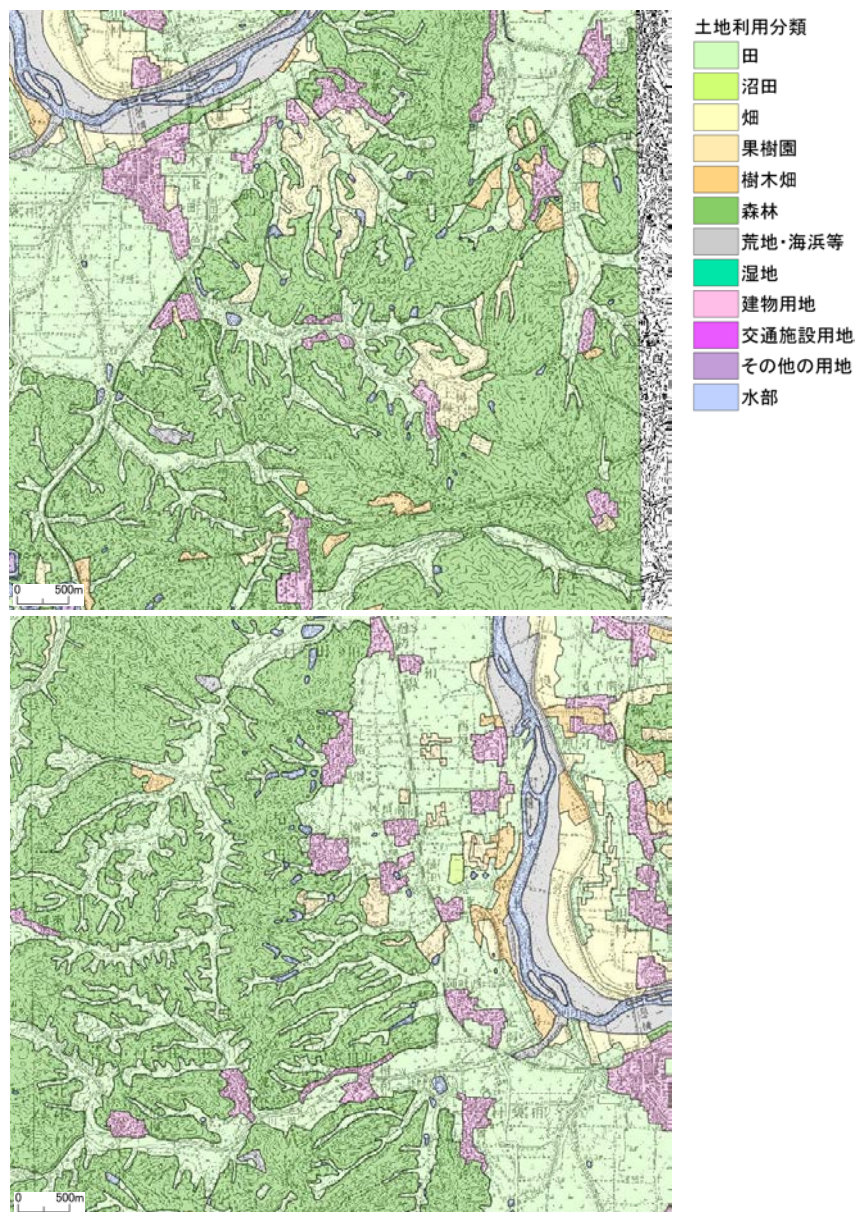


図 4-3 丘陵地の土地利用

(上下とも) 1:50000 地形図「奈良」明治 41 年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

上図の加茂丘陵、下図の京阪奈丘陵には、樹枝状の谷底低地に水田、山麓部に畑があり、丘陵周縁に集落が点在している。明治期のこれらの丘陵地の土地利用は、自然地形をそのまま活かした農業的利用が主である。

### ③低地における土地利用

本図幅の低地は、中央部を北流する木津川沿いに広がる**山城盆地**と、南部の**奈良盆地**である。山城盆地のこの地域は、古くは木津川が交通路として利用され、江戸時代には京都・奈良・伊勢を結ぶ街道の宿場町であったことから、明治期にすでにほぼ全域に集落が分布している。集落の宅地以外は農地として利用され、水田が大きく広がっている。水田の他は、果樹園、茶畑、桑畑、普通畑があり、分布としては盆地東部の鷲峰山山地山麓と木津川の河川敷や微高地に多い。なお、木津川沿いでは利用されていない河川敷（土地利用分類では「荒地・海浜等」）の面積も大きい。

奈良盆地は、奈良市の市街地が盆地北部に大きく広がり、その周辺部に集落が点在する。土地利用としては水田が主で、畑・果樹園は丘陵地の周縁にある位で少ない。この地域は大きな河川がないために、用水目的のため池が多く見られる。なお、この地は古い都であった（平城京、奈良時代、710年遷都）が、明治期の地形図に認められるその痕跡は、その中心であった平城宮に「大極殿跡」の注記があるだけで、史跡として整備されておらず、ただ水田が広がっているだけである（図 4-4）。

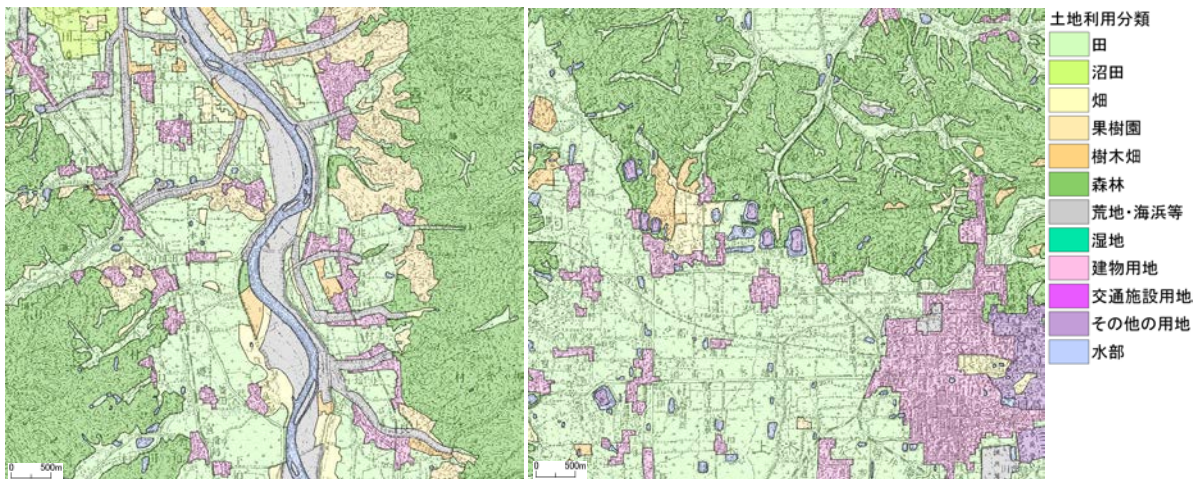


図 4-4 低地の土地利用

（左右とも）1:50000 地形図「奈良」明治 41 年測図を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

中央を木津川が流れる山城盆地（左図）は、水田を主とした農地が広がっている。広く点在する集落は、これらの農地の集落と、旧街道沿いの宿場町が混在している。奈良盆地北部（右図）は、の奈良市街地に宅地が集中して分布しているが、その周辺は大部分が水田で、都市（奈良市）に近い割には都市化が進んでいない。

本図幅内は古くから京都・大阪・三重・和歌山方面への交通の要衝であり、木津川沿いは水利・気候の面から農業に適した土地である。また奈良は、古都として栄えた場所である。明治期の土地利用を見ると、これらのことがよく示されている。平地の土地利用は、農業的利用が主であるが、同じ盆地でも山城盆地と奈良盆地では差異があるように見える。これは、大きな河川の有無が影響したものと考えられる。



## (2) 昭和 43 (1968) 年頃 (現在から概ね 40 年前) の土地利用

昭和期の土地利用分類図(第2期)は、昭和 43 (1968) 年に編集された 5 万分の 1 地形図「奈良」を使用して、「奈良」図幅の西側半分の範囲について地形図判読により土地利用分類を行った(図 4-5)。昭和 44 年発行の 5 万分の 1 地形図「奈良」は、同 42 年に空中写真測量により作成された 2 万 5 千分の 1 地形図を編集したものである。

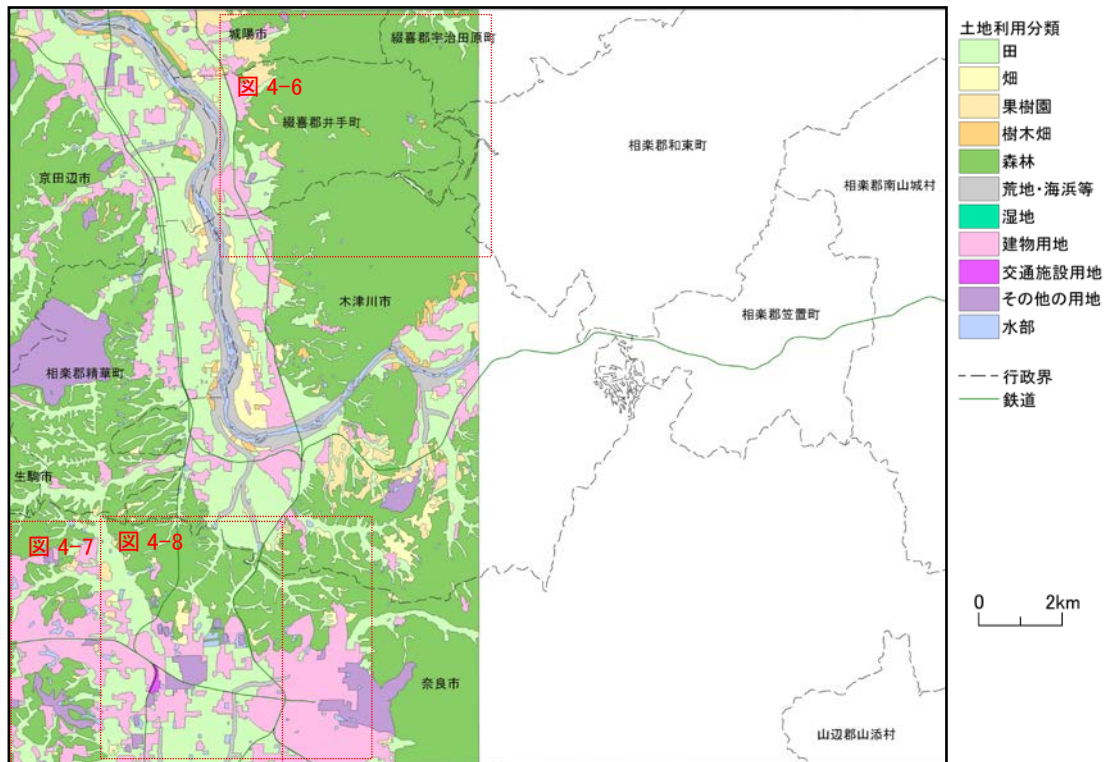


図 4-5 奈良における約 40 年前(昭和 43 (1968) 年頃)の土地利用

### ①山地における土地利用

鷲峰山山地、大和高原とも、昭和期においても森林が拡がり、土地利用は明治期と比べて大きな変化はない。鷲峰山山地東側山麓の果樹園の面積が少し小さくなっている(図 4-6)。

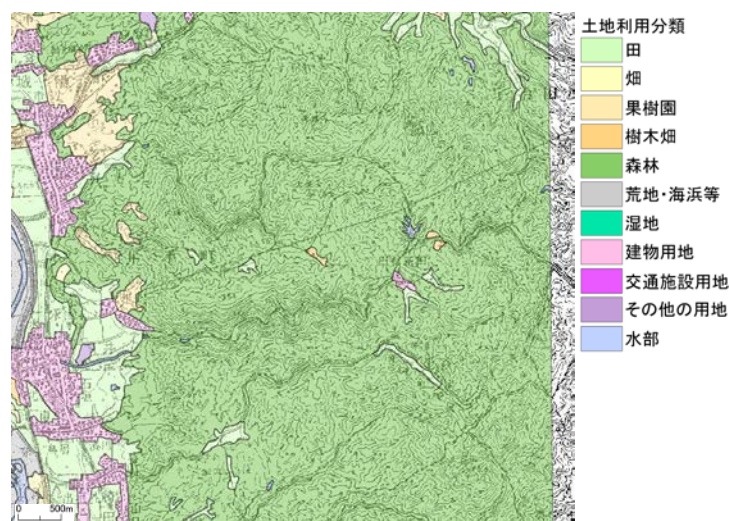


図 4-6 山地の土地利用



1:50000 地形図「奈良」昭和 43 年編集を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。  
 鷲峰山山地は昭和期も森林が拡がり、明治期（図 4-2 上図）から大きな変化は見られない。

## ②丘陵地における土地利用

昭和期の丘陵地の土地利用は、明治期と比較して変化が見られる。まず、宅地が各所で拡大している。顕著なものは、京阪奈丘陵の奈良市西部で、奈良市中心市街地も北側に**加茂丘陵**南部まで拡大している。他の変化としては、ゴルフ場の造成がある。なお、精華町にある広範囲な「その他の用地」は、第二次世界大戦直前に開設された旧陸軍の弾薬庫で、現在は陸上自衛隊の分屯地である（図 4-7）。

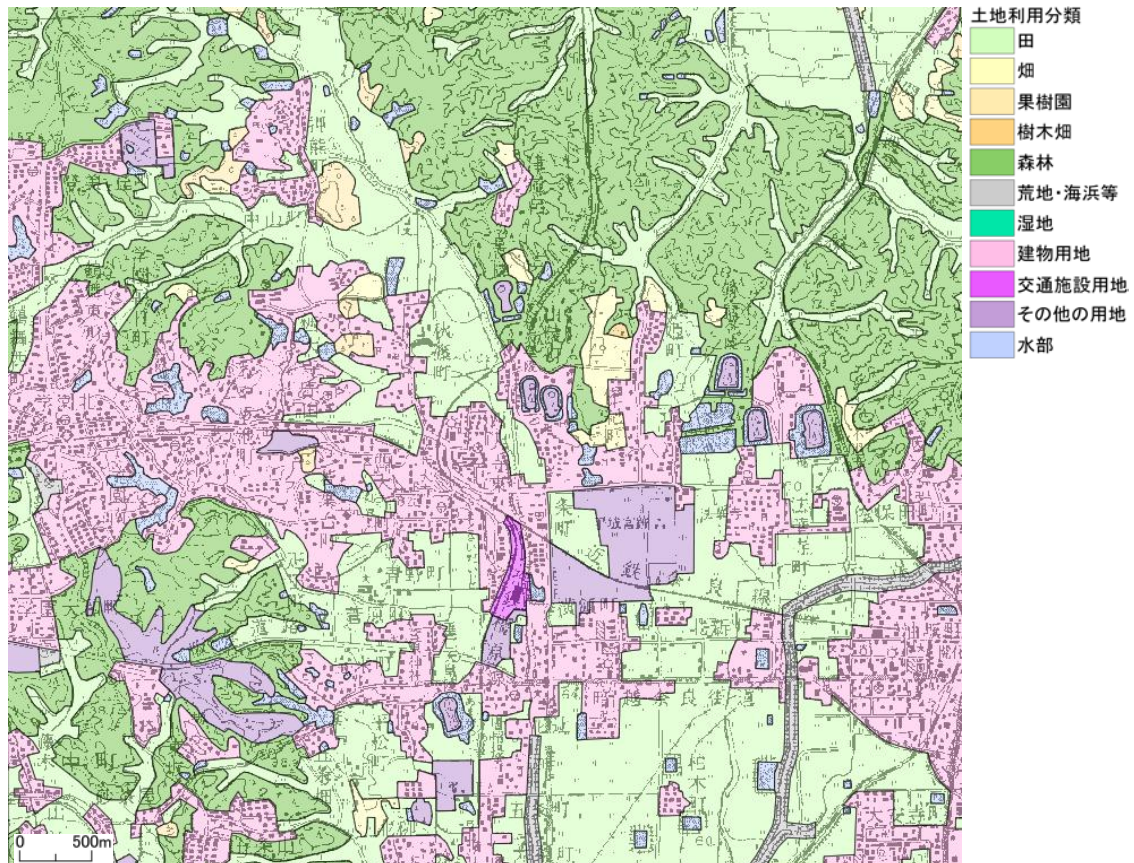


図 4-7 丘陵地の土地利用

1:50000 地形図「奈良」昭和 43 年編集を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。

丘陵地では昭和期には宅地開発が活発に行われている。上図は奈良市西部の京阪奈丘陵を切り開いて開発された住宅地で、誘致された大学を中心とした学園都市を形成している。

## ③低地における土地利用

本図幅の低地では、昭和期に丘陵地以上に住宅地化が進んだ。**奈良盆地**の奈良市中心市街地は大きく西側に拡大し、明治期には広大な面積を占めていた水田が大きく減少して、建物用地に転換している。**山城盆地**の木津川沿いの低地でも、水田や果樹園が宅地化されている。なお、平城宮跡は大正 11 年に国の史跡に指定された後も長く発掘調査が行われていたため、昭和期の地形図では荒地の記号が記されているが、平成に入って国による遺跡の整備と建造物の復元、国営公園化が進められているため、昭和期の土地利用分類図では「その他の用地」として取得した。（図 4-8）。



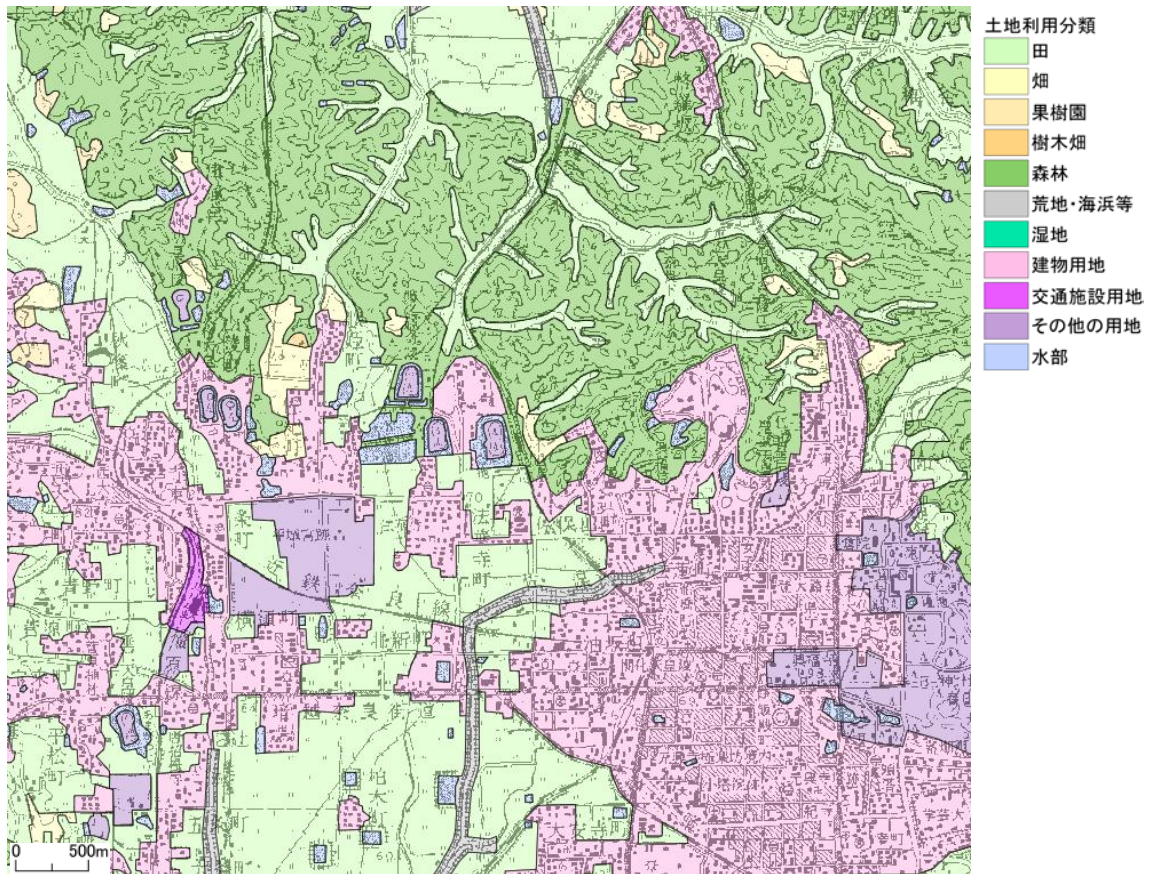


図 4-8 低地の土地利用

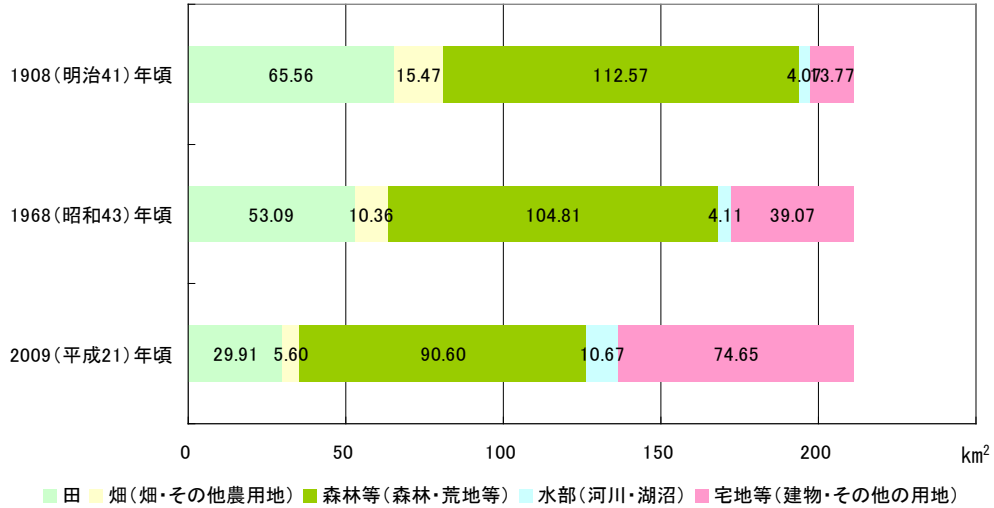
1:50000 地形図「奈良」昭和 43 年編集を背景に、この図から取得した明治期の土地利用分類図を表示。  
奈良市の市街地は西側に拡大し、明治期（図 4-4 右図）と比べて水田の面積は小さくなっている。

本図幅における昭和期の土地利用は、大阪、京都への通勤圏内という位置条件から、丘陵地・低地の農地において宅地開発が進められて変化した。しかし、山城盆地の木津川沿いの低地では、農地から宅地への変化は緩やかなものであった。次項の土地利用の変遷で述べるように、平成期には奈良市の市街地はさらに拡大し、近傍の低地・丘陵地はほとんどが宅地に変化した。昭和期の土地利用はこの都市化の動きの端緒を示しているが、木津川沿いの低地は農業に適した地形であり、そこでは農業を主とした生活が営まれていたことも示していると考えられる。

## 4.2 土地利用変遷の概要

### (1) 土地利用面積の推移

図 4-9 と表 4-1 は現在から概ね 100 年前及び 40 年前の 2 時期の土地利用分類図と、土地利用細分メッシュデータ（国土数値情報、2009）から、本図幅における田、畑（畑・その他の農用地）、森林等（森林・荒地等）、水部（河川・湖沼）、宅地等（建物・その他の用地）の主要な土地利用 5 項目についての面積集計結果である。



土地利用分類の内訳は次の通り。（〔 〕は国土数値情報土地利用細分メッシュデータの分類）  
 田：田、沼田 〔田〕 畑：畑、果樹園、樹木畑 〔その他の農用地〕  
 森林等：森林、荒地・海浜等、湿地 〔森林、荒地、海浜〕 水部：水部（ただし海水域は除く）〔河川地及び湖沼〕  
 宅地等：建物用地、交通施設用地、その他の用地 〔建物用地、道路、鉄道、その他の用地、ゴルフ場〕

図 4-9 土地利用別面積の推移（1908、1968、2009 年）

表 4-1 土地利用別面積の推移（1908、1968、2009 年）

単位：km<sup>2</sup>

区分	市区町村	京都市							奈良県			合計	
		城陽市	京田辺市	木津川市	綴喜郡井手町	綴喜郡宇治田原	相楽郡和束町	相楽郡精華町	県合計	奈良市	生駒市		県合計
1908 (明治41) 年頃	田	1.91	10.70	17.66	2.64	0.46	0.02	10.14	43.53	21.71	0.32	22.02	65.56
	畑(畑・その他農用地)	1.70	2.47	6.32	2.03	0.07	0.00	0.91	13.52	1.95	0.00	1.95	15.47
	森林等(森林・荒地等)	4.39	12.72	36.40	12.24	3.88	1.45	12.06	83.14	28.50	0.93	29.43	112.57
	水部(河川・湖沼)	0.24	0.50	1.27	0.40	0.01	0.00	0.55	2.98	1.09	0.00	1.09	4.07
	宅地等(建物・その他の用地)	0.35	1.25	3.34	0.66	0.00	0.00	1.26	6.87	6.90	0.00	6.90	13.77
1968 (昭和43) 年頃	田	1.57	9.81	15.75	2.17	0.47	0.00	8.68	38.46	14.20	0.43	14.63	53.09
	畑(畑・その他農用地)	△ 0.35	△ 0.89	△ 1.91	△ 0.47	0.01	△ 0.02	△ 1.45	△ 5.07	△ 7.51	0.12	△ 7.39	△ 12.46
	森林等(森林・荒地等)	1.33	1.04	5.69	0.68	0.04	0.00	0.47	9.24	1.11	0.00	1.11	10.36
	水部(河川・湖沼)	△ 0.37	△ 1.43	△ 0.64	△ 1.35	△ 0.03	0.00	△ 0.45	△ 4.27	△ 0.84	0.00	△ 0.84	△ 5.11
	宅地等(建物・その他の用地)	4.60	11.69	36.13	13.44	3.90	1.48	9.60	80.84	23.15	0.81	23.97	104.81
2009 (平成21) 年頃	田	0.21	△ 1.03	△ 0.27	1.20	0.02	0.02	△ 2.46	△ 2.30	△ 5.34	△ 0.12	△ 5.46	△ 7.76
	畑(畑・その他農用地)	0.19	0.44	1.29	0.31	0.02	0.00	0.68	2.93	1.18	0.00	1.18	4.11
	森林等(森林・荒地等)	△ 0.05	△ 0.06	0.02	△ 0.10	0.01	△ 0.00	0.13	△ 0.05	0.09	△ 0.00	0.09	0.04
	水部(河川・湖沼)	0.90	4.66	6.14	1.38	0.00	0.00	5.49	18.57	20.50	0.00	20.50	39.07
	宅地等(建物・その他の用地)	0.55	3.41	2.80	0.71	0.00	0.00	4.22	11.70	13.60	0.00	13.60	25.30
2009 (平成21) 年頃	田	1.18	6.82	10.80	1.33	0.43	0.00	5.20	25.75	4.06	0.10	4.17	29.91
	畑(畑・その他農用地)	△ 0.74	△ 3.88	△ 6.86	△ 1.31	△ 0.03	△ 0.02	△ 4.94	△ 17.79	△ 17.65	△ 0.21	△ 17.86	△ 35.65
	森林等(森林・荒地等)	0.54	0.59	3.07	0.45	0.22	0.01	0.24	5.14	0.46	0.00	0.46	5.60
	水部(河川・湖沼)	△ 1.15	△ 1.88	△ 3.26	△ 1.58	0.15	0.01	△ 0.67	△ 8.38	△ 1.49	0.00	△ 1.49	△ 9.87
	宅地等(建物・その他の用地)	3.55	9.55	31.39	13.05	3.78	1.46	9.70	72.48	17.92	0.20	18.12	90.60
2009 (平成21) 年頃	田	△ 0.84	△ 3.17	△ 5.01	0.81	△ 0.10	0.01	△ 2.36	△ 10.66	△ 10.57	△ 0.73	△ 11.31	△ 21.97
	畑(畑・その他農用地)	1.23	1.95	4.31	1.08	0.00	0.00	1.40	9.96	0.71	0.00	0.71	10.67
	森林等(森林・荒地等)	0.99	1.44	3.04	0.67	△ 0.01	△ 0.00	0.85	6.98	△ 0.38	△ 0.00	△ 0.38	6.60
	水部(河川・湖沼)	2.10	8.74	15.43	2.07	0.00	0.00	8.38	36.73	36.97	0.95	37.92	74.65
	宅地等(建物・その他の用地)	1.75	7.49	12.09	1.41	0.00	0.00	7.12	29.86	30.07	0.95	31.02	60.88

1. 1908 年及び 1968 年は土地利用分類図の図上計測値。2009 年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による集計値。
2. 1968 年及び 2009 年の下段は、1908 年からの増減量。
3. 行政区域は 2012（平成 24）年 4 月 1 日現在の区域を当てはめた。

1908 年には、森林が最も多く約 113km<sup>2</sup>あり、次いで田が約 66km<sup>2</sup>、畑は約 15km<sup>2</sup>と、

これらの農業的土地利用は全体の約 38%、**宅地等**は全体の約 7%の 14km<sup>2</sup>程であった。地域別では、**森林等**は、木津川市が約 36km<sup>2</sup>、奈良市が約 29km<sup>2</sup>と多く、京田辺市、井手町、精華町でも 10km<sup>2</sup>以上の面積があった。**田**は、奈良市が約 22km<sup>2</sup>、木津川市が約 18km<sup>2</sup>、京田辺市、精華町が約 10km<sup>2</sup>だった。**畑**は、木津川市が約 6km<sup>2</sup>と最も多く、京田辺市、井手町、奈良市、城陽市が 2km<sup>2</sup>前後であった。**宅地等**は、奈良市が約 7km<sup>2</sup>と最も多く、本図幅の宅地面積の 5 割を占めていた。次いで木津川沿いの集落を集めて木津川市が約 3km<sup>2</sup>と多かった。

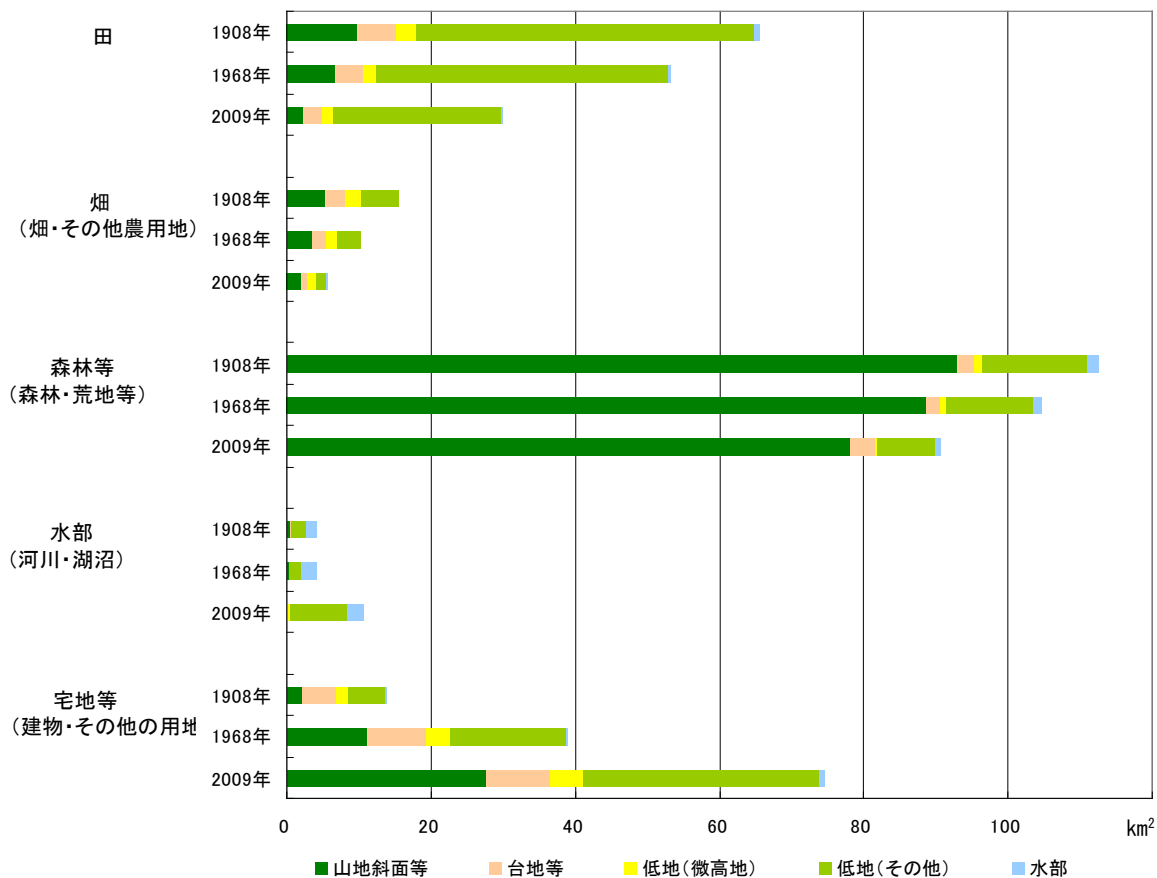
1968 年になると、**森林等**は約 105km<sup>2</sup>（明治期比 93.1%）、**田**は約 53km<sup>2</sup>（同 81.05%）、**畑**は約 10km<sup>2</sup>（同 67.0%）と減少した。一方で**宅地等**は約 39km<sup>2</sup>（同 283.7%）と大きく増加した。地域別では、**森林等**は、奈良市で明治期より 5km<sup>2</sup>以上失われ、精華町でも約 2km<sup>2</sup>減少した。昭和期に 10km<sup>2</sup>以上の**森林等**があったのは、木津川町、奈良市、井手町、京田辺市だった。**田**、**畑**はほぼ全市町で減少した。このうち最も減少幅の大きかった奈良市の**田**は、明治期から約 8km<sup>2</sup>減少して約 14km<sup>2</sup>となった。それでも、木津川市で約 16km<sup>2</sup>、京田辺市で約 10km<sup>2</sup>、精華町で約 9km<sup>2</sup>の**田**が、木津川市で約 6km<sup>2</sup>の**畑**が残っていた。これに対して**宅地等**は全市町で増加し、特に増加幅の大きかった奈良市は約 21km<sup>2</sup>、木津川市約 6km<sup>2</sup>、精華町と京田辺市が約 5km<sup>2</sup>となった。

昭和から平成にかけても、**森林等**が約 91km<sup>2</sup>、**田**が約 30km<sup>2</sup>、**畑**は約 6km<sup>2</sup>と減少し、その分**宅地等**は昭和期の 2 倍弱、明治期の約 5 倍の約 75km<sup>2</sup>に拡大して本図幅の 35%の面積を占めるようになった。地域別では、**森林等**、**田**、**畑**はほぼ全市町で減少し、**森林等**が 10km<sup>2</sup>以上残っているのは木津川市、奈良市、井手町、**田**が 10km<sup>2</sup>以上残っているのは木津川市のみとなった。**畑**も木津川市が約 3km<sup>2</sup>残っているものの、他の市町はすべて 1km<sup>2</sup>未満となった。**宅地等**は明治期と比較して全市町で大幅に増加し、奈良市約 37km<sup>2</sup>、木津川市約 15km<sup>2</sup>、京田辺市と精華町が 8~9km<sup>2</sup>となった。これは明治期比で、奈良市と木津川市は約 5 倍、京田辺市と精華町は約 7 倍になったということである。

以上より、明治期から昭和期、平成期と徐々に都市化（宅地化）が進行していることが分かる。本図幅のうち、木津川沿いの低地は農業に適した地形であることから、農地は今後も残っていくと思われるが、京都・大阪の通勤圏という位置条件から、**田**、**畑**、**森林等**から**宅地等**への転換が続くと考えられる。

## (2) 地形分類別土地利用面積の推移

図 4-10 と表 4-2 は、本図幅の明治期、昭和期、平成期の土地利用の面積を主要な自然地形分類項目ごとに集計した結果である。自然地形分類のうち**水部**は、現水部、旧水部であるが、水部以外の各土地利用においてこの自然地形を利用しているのは、造成によって陸地になった旧水部である。



- 区分ごとの面積は、本調査成果図の自然地形分類図及び土地利用分類図（1908年、1968年）、国土数値情報の土地利用細メッシュ（2009年）を2種類の分類で交差領域を作成し、各領域の面積を分類の組み合わせで積み上げ集計したもの。
- 地形分類の内訳は次の通り。  
 山地斜面等：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地  
 台地等：岩石台地、砂礫台地、ローム台地  
 低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地  
 低地（その他）：緩扇状地、扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜  
 水部：現水部、旧水部

図 4-10 地形分類別の土地利用面積の推移（1908、1968、2009年）

土地利用ごとにみると、**田**は山城盆地、奈良盆地の氾濫原低地などの低地（その他）にあるものがほとんどである。台地や山地斜面にみられるものは、京阪名丘陵や加茂丘陵の狭長な谷底低地にある場合と考えられる。**畑**は各地形分類にまんべんなく分布している。田畑とも面積が徐々に減少しているが、その減少が特にひとつの地形分類での減少によるものという関連性は見られない。この地域では、昭和期以降全体的に農業が縮小傾向であり、山地以外の利用しやすい土地では宅地等への転換が進んでいることを示していると考えられる。

**森林等**は、減少しているものの、明治期から平成期に至る減少の変化は緩やかなものであった。これは、この土地利用分類に属する範囲が明治期から余り変化していない（別の土地利用に変化することが少ない）ためと考えられる。具体的には、鷲峰山山地は平成期においても森林以外の土地利用はほとんど見られない。

宅地等は、山地斜面と低地（その他）での増加が目立つ。これは、山地斜面は京阪名古屋や加茂丘陵での、低地（その他）は奈良盆地の奈良市近傍での宅地開発や市街地拡大によるものである。特に前者は、これまで利用の少なかった丘陵地や斜面で平成期に大規模な住宅地開発が行われるなど、交通利便性のよい場所で宅地が新たに作られている。これらの場所に比べて、山城盆地の木津川沿いの低地では、農地が宅地に転換している割合は少ないようである。

表 4-2 地形分類別の土地利用面積の推移（1908、1968、2009 年）

単位：km<sup>2</sup>

年代	区分	地形分類	山地斜面等	台地等	低地(微高地)	低地(その他)	水部	合計
1908(明治41)年頃	田		9.66	5.55	2.63	46.96	0.76	65.56
	畑(畑・その他農用地)		5.36	2.80	2.18	5.04	0.09	15.47
	森林等(森林・荒地等)		92.81	2.58	1.09	14.46	1.64	112.59
	水部(河川・湖沼)		0.47	0.19	0.02	1.93	1.45	4.07
	宅地等(建物・その他の用地)		2.09	4.80	1.67	5.08	0.14	13.77
1968(昭和43)年頃	田		6.69	3.99	1.68	40.38	0.36	53.10
		△ 2.98	△ 1.56	△ 0.95	△ 6.57	△ 0.40	△ 12.45	
	畑(畑・その他農用地)		3.58	1.83	1.65	3.23	0.06	10.36
		△ 1.77	△ 0.97	△ 0.53	△ 1.81	△ 0.03	△ 5.11	
	森林等(森林・荒地等)		88.62	1.94	0.93	12.08	1.24	104.81
		△ 4.19	△ 0.63	△ 0.17	△ 2.38	△ 0.40	△ 7.77	
	水部(河川・湖沼)		0.27	0.10	0.01	1.61	2.12	4.11
		△ 0.21	△ 0.09	△ 0.01	△ 0.32	0.67	0.04	
	宅地等(建物・その他の用地)		11.24	8.05	3.32	16.17	0.29	39.08
		9.15	3.25	1.66	11.09	0.16	25.30	
2009(平成21)年頃	田		2.33	2.72	1.30	23.35	0.21	29.91
		△ 7.33	△ 2.82	△ 1.33	△ 23.60	△ 0.55	△ 35.65	
	畑(畑・その他農用地)		2.04	0.82	1.19	1.49	0.06	5.60
		△ 3.32	△ 1.98	△ 0.99	△ 3.55	△ 0.03	△ 9.87	
	森林等(森林・荒地・水面)		78.19	3.43	0.26	8.04	0.70	90.61
		△ 14.62	0.85	△ 0.84	△ 6.42	△ 0.94	△ 21.97	
	水部(河川・湖沼)		0.15	0.11	0.26	7.84	2.31	10.67
		△ 0.32	△ 0.08	0.23	5.90	0.86	6.60	
	宅地等(建物・その他の用地)		27.69	8.83	4.59	32.74	0.80	74.64
		25.59	4.03	2.92	27.66	0.67	60.87	

1. 表の区分ごとの面積は、調査結果の自然地形分類図及び土地利用分類図（1908年、1968年）、国土数値情報土地利用データ（2009年）から2種類の分類で交差領域を作成し、各領域の面積を分類の組み合わせ毎に積み上げて集計したもの。
2. 土地利用区分は、1908年、1968年は本調査の土地利用分類図、2009年は国土数値情報（土地利用細分メッシュ）による。
3. 地形分類の内訳は以下の通り。  
 山地斜面等：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地      台地等：砂礫台地、岩石台地、ローム台地  
 低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地      低地（その他）：扇状地、緩扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜      水部：現水部、旧水部
4. 1968年及び2009年の下段は、1908年からの増減量。

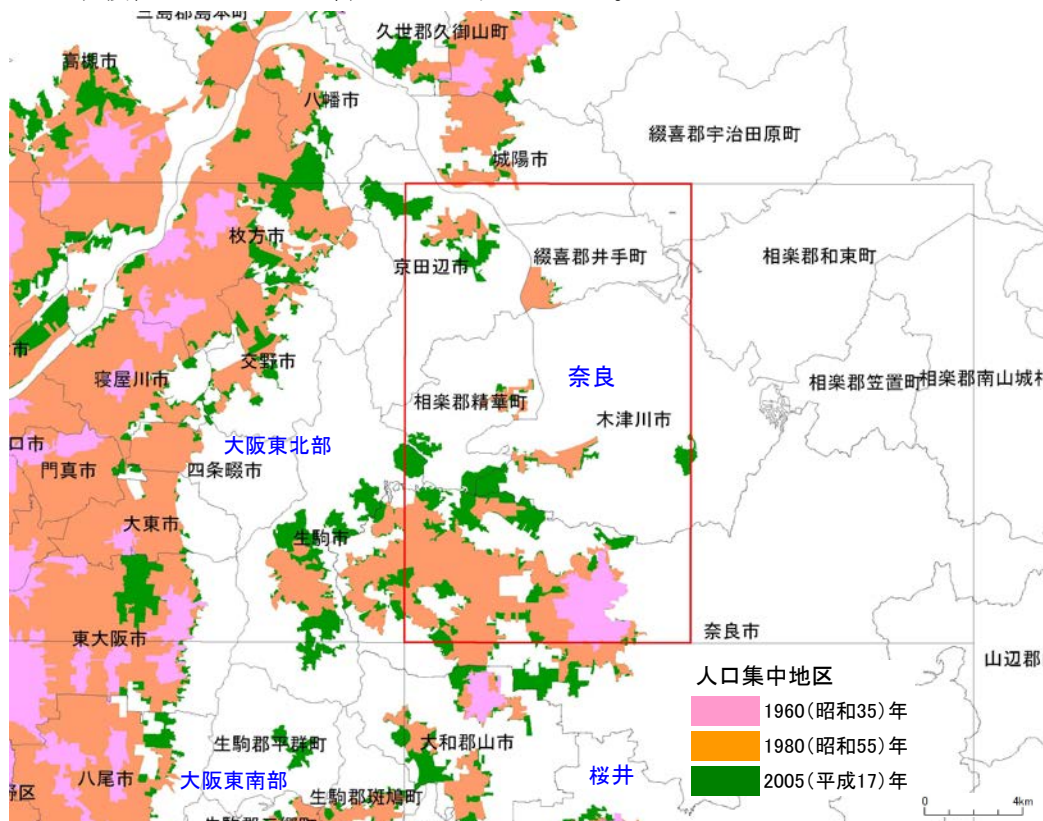
### (3) 人口集中地区の変遷

図 4-11 および表 4-3 は国勢調査の人口集中地区（DID<sup>3</sup>）データから作成した、本図幅の1960（昭和35）年、1980（昭和55）年、2005（平成17）年の3時期にわたる DID

<sup>3</sup> 人口集中地区（DID=densely inhabited district）：1960年国勢調査以降、新たに設定された統計表章地域。調査区（約50世帯）を単位として、原則として調査区の人口密度は1km<sup>2</sup>につき4000人以上あり、そのような調査区が互いに隣接して、その合計が5000人以上に達する場合に、これを一つの人口集中地区として区画する。実質的には市街地を形成する区域を表すといえる（浜、1989）。



の変遷を示したものである。1960年のDIDは奈良市の市街地に設定されている程度であったが、1980年、2005年と調査地域各所に徐々に広がり、2005年には丘陵地に開発された大規模住宅地もDIDに含まれるようになった。



国土数値情報（人口集中地区）1960、1980、2005年データから作成。図中の青字は、本調査のある1:50000地形図図幅名を表す。

図 4-11 調査地域周辺における人口集中地区の推移（1960、1980、2005年）

表 4-3 地形分類別人口集中地区面積の推移

単位：km<sup>2</sup>

区域	分類	山地	台地	低地 (微高地)	低地 (その他)	水部	合計
調査地域全域		110.40	15.91	7.60	73.47	4.08	211.45
1960年のDID		0.43	2.61	0.00	3.27	0.07	6.37
	割合(%)	6.69	41.00	0.00	51.29	1.02	100.00
1980年のDID		8.30	6.32	1.56	16.31	1.02	33.50
	割合(%)	24.77	18.86	4.66	48.67	3.03	100.00
2005年のDID		14.99	6.43	2.28	20.06	0.88	44.63
	割合(%)	33.59	14.41	5.10	44.94	1.96	100.00

1. 自然地形分類図、国土数値情報（人口集中地区）1960、1980、2005年データより集計。
2. 地形分類の内訳は次の通り。  
 山地：山地斜面等、火山地斜面等、麓斜面及び崖錐、土石流堆積地  
 台地：岩石台地、砂礫台地、ローム台地  
 低地（微高地）：自然堤防、砂州・砂堆、砂丘、天井川及び天井川沿いの微高地  
 低地（その他）：扇状地、緩扇状地、谷底低地、氾濫原低地、三角州・海岸低地、旧河道、湿地、河原・河川敷、浜  
 水部：現水部、旧水部

1960年当時、本図幅内で市であったのは奈良市のみで、DIDも奈良市中心部のみであ

ったが、その後、大阪・京都の通勤圏として住宅地が増加し、1980年のDIDは奈良市西部、木津川市（当時は木津町）、精華町、井手町、京田辺市（田辺町）、城陽市にも拡大した。平成に入ると、さらに宅地開発が進行し、2005年のDIDは1980年の範囲周辺の丘陵地に拡大すると共に、新たに生駒市に開発された大規模住宅地がDIDに含まれるようになって、面積は1960年の7倍となった。

表 4-3 の地形分類別の推移を見ると、各時期とも低地（その他）の面積が多いが、1980年以降、山地・丘陵地を開発して造られた住宅地がDIDに含まれるようになったのがこの地域の特徴である。



## 5 調査地域の災害履歴概要

### 5.1 災害履歴概説

#### (1) 地震

この地域に被害を及ぼす地震には、①陸域の浅いところで発生する地震、②沈み込んだフィリピン海プレート内で発生する地震の2タイプが存在する。

①のタイプの地震は陸域の活断層によってもたらされる地震で、1854年の伊賀上野地震（M7 1/4）や1936年の河内大和地震（M6.4）などが該当する。1854年の伊賀上野地震では伊賀上野から奈良・大和郡山にかけて大きな被害があり、奈良では280名の死者が発生している。1936年の河内大和地震では、地面の亀裂や噴砂・湧水現象なども報告されている。

②のタイプの地震は1899年の紀和地震（M7.0）や1952年の吉野地震（M6.7）などがある（地震調査研究推進本部、2009）。1995年に発生した兵庫県南部地震（M7.3）は1923年の関東地震（M7.9）以来都市部で最大の被害を及ぼした地震となった。西日本では、東南海・東海地震の前後に内陸部で地震活動が活発化する傾向があり、（昭和）東南海地震（1944年）、（昭和）南海地震（1946年）から70年以上経ており、西日本で地震活動が活発化する活動期に入ったとの指摘もある（内閣府ホームページより）。

#### (2) 風水害

調査図幅範囲は西側には京阪奈丘陵、東側は大和高原によって囲まれ、北側が山城盆地最奥部の木津川上流域、南側は奈良盆地の北部となる。

木津川は上流域では幅約2～3kmの狭い谷底平野を形成し、天井川化した支川が両岸から合流している。これらの支川の自然堤防の背後は氾濫・漏水による内水氾濫の常習地となっている（日下、1968、植村ほか、2007）。

特に1953年8月14日から15日集中豪雨（南山城水害）の際には、この地域では一晩に400mm以上の記録的な降雨が発生し、土石流や井出町での大正池の堤防決壊などにより死者・行方不明者336名、負傷者1,366名、住家全壊371棟、住家浸水床上1,649棟、床下2,721棟の被害を及ぼした（京都府地域防災計画）。

## 5.2 災害履歴詳説

### (1) 地震

#### ① 慶長伏見地震

慶長伏見地震は1596(慶長1)年9月5日午前0時ごろ発生した内陸型の地震である。地震の規模はM7 1/2で、有馬 - 高槻断層帯、および六甲・淡路島断層帯が活動したと考えられている。この地震によって近畿地方では京都、大阪、堺を中心として震度5～6の揺れが生じたと推定されており、堺では死者600余名、大阪では多数の家屋が倒壊し、京都では伏見城の天守閣が大破するなど600人近い圧死者が報告されている。全体では1,500人余りの死者が出たと推定されている。本図幅においては、奈良市の唐招提寺などで寺社の倒壊・破損が報告されている(宇佐美, 2003)。

#### ② 伊賀上野地震

伊賀上野地震は1854(安政1)年7月9日に発生した内陸型の地震である。地震の規模はM7 1/4で伊賀上野付近の木津川断層帯を震源として発生したと推定されている(地震調査研究推進本部, 2009)。この地震では三重県、奈良県で被害が大きく、奈良県では死者280名、住家損壊700～800棟の被害が生じている(奈良県ホームページより)。奈良県では、古市(現奈良市古市町)で堤が決壊し、濁流によって約60人が死亡している(宇佐美, 2003)。

本図幅においては、井出町玉水、木津川市加茂町などの木津川沿いの低地で液状化の発生が報告されている(若松, 2011)。

#### ③ 河内大和地震

河内大和地震は1936年(昭和11)2月21日10時7分に奈良県北西部を震源として発生した地震で、地震の規模はM6.4と推定されており、この地震により大阪府で死者8名、住家全壊18棟、半壊89棟(大阪府地域防災計画)、奈良県で死者1名、住家全壊148棟の被害を生じている(奈良県の気象百年, 1997)。近畿地方で震度4～5の揺れが生じており、奈良・大阪府県の県境付近で振動が強く、奈良盆地では住家損傷1,185棟、地鳴りが24日まで続き、余震本震合わせて102回を記録している(奈良市地域防災計画)。また法隆寺、唐招提寺、薬師寺で建物の損壊が生じている(奈良県の気象百年, 1997)。

#### ③ 平成7年(1995年)兵庫県南部地震

1995(平成7)年1月17日午前5時46分に発生した兵庫県南部地震は兵庫県南部から淡路島にかけて伸びる六甲・淡路島断層帯によって引き起こされた。この地震による震度は神戸海洋気象台と洲本測候所で震度6が記録されたが、地震後の現地調査で神戸市から宝塚市にかけて震度7の地域があったことが確認された(地震調査研究推進本部, 2009)。

この地震によって死者・行方不明者6,437名、負傷者43,792名、住家全壊104,906棟、半壊144,274棟(平成18年5月19日消防庁確定)の甚大な被害を生じ戦後50年で最大の被害となった。また地震の発生が早朝であり、都市部において非常に激しい揺

れに見舞われたため、建物の倒壊と火災による死者が多かった。

奈良市の震度は4、奈良県内での被害は、負傷者12名、住家一部損壊15棟など比較的軽微だった（奈良県の気象百年，1997）。

## (2) 水害

### ① 昭和28（1953）年8月14日降雨（大雨）

サハリンからオホーツク海に進んだ低気圧から伸びる寒冷前線が南下し、8月14日から15日にかけて本州に停滞した。この前線の影響で京都府南部、滋賀県南部、三重県、奈良県では14日夜から15日朝にかけて雷を伴う豪雨となった。木津川支川の和東川の上流部の京都府和東町湯船では428mmの降雨が観測されており、木津川流域では各地で洪水や土石流などが発生し、相楽、綴喜地方で死者・行方不明者336名、負傷者1,336名、住家全半壊1,306棟、住家浸水床上1,649棟、床下2,721棟の被害が発生した（気象庁ホームページより、京都府地域防災計画）。

本図幅においては、井出町で、木津川支川の玉川上流部に存在する農業用の溜め池「大正池」と「二ノ谷池」が決壊し、山麓から木津川低地にかけて天井川となっている玉川の下流部で溢流・破堤し、死者105名、住家全壊107棟、流出166棟、住家浸水床上168棟、床下189棟の被害が生じた（南山城水害誌）。このほか、木津川右岸支流での被害が大きく、和東川の増水によって、奥畑、井平尾地区では住家全壊・半壊・流失26棟、住家浸水床上43棟、床下189棟などの被害が発生している（木津川市地域防災計画）。

### ② 昭和57（1982）年8月降雨（台風10号）

7月24日に日本の南東海上で発生した台風10号は、8月1日に紀伊半島の南海上に北上。2日0時渥美半島に上陸し、翌早朝には富山湾から日本海に進んで温帯低気圧に変わった。この台風の影響で近畿地方では7月31日夜半から大雨となり、8月1日には奈良で日降水量160mmを記録している（気象庁ホームページより）。

本図幅に関連する被害としては、大和川流域では21,956戸の建物被害と3,127haの浸水被害を生じている（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

### ③ 平成11（1999）年8月降雨（豪雨）

東海沖に進んだ熱帯低気圧が、8月10日21時過ぎに紀伊半島に上陸し、近畿地方に大雨をもたらした（国土交通省近畿地方整備局，2009）。これにより11日には奈良で日降水量126.0mmの降雨を記録している（気象庁ホームページより）。

この降雨によって竜田川（生駒市）、曾我川（三宅町）、地藏院川（大和郡山市）などで内水による浸水被害が発生し、大和川流域では435戸の建物被害と、49haの浸水被害を受けている（国土交通省近畿地方整備局，2009）。

## (3) 地盤沈下

奈良県内では、県北部に第四系の軟弱な地層が分布しているが、平成23年度現在ま

でに地盤沈下は観測されてなく、地盤沈下測定のための水準測量は実施されていない。

また京都府内では京都市南部及び乙訓地区において、沈下の傾向が認められたが、近年その傾向は鈍化してきている（環境省ホームページより）。

## 6 調査成果図の見方・使い方

### 6.1 地形分類図

#### (1) 自然地形分類図

自然地形分類図は、既存の地形分類図等を参考に、空中写真、地形図等を利用して、宅地造成等により土地の人工改変が行われる前の自然地形を含め、地形の形態・形成時期・構成物質等により土地を分類した地図である（表 6-1）。

これまでの地形分類図では、現状の人工地形が優先して表示される場合があり、改変前の自然地形の詳細が把握できない等の問題を抱えていた。そのため、この調査で提供する自然地形分類図は、地形改変により不明瞭になった地形界線を明確に定めると同時に、かつて存在していた池沼や河川の状況、盛土される前の低地の地形等を分類・復元することで、現在は失われた過去の地形を読み取ることができるようにしている。土地をその成り立ちや、生い立ち、形態等により分類した地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を知ることができる。

表 6-1 自然地形分類区分

	分類	定義
山地・丘陵地	山地斜面等	山地・丘陵地の斜面や台地縁辺の斜面等をいう。海岸の磯や岩礁、離れ岩等を含む。
	麓斜面及び崖錐	斜面の下方に生じた岩層または風化土からなる堆積地形。
	土石流堆積地	岩塊、泥土等が水を含んで急速に移動、堆積して生じた地形で、溪床または谷の出口にあるもの。
台地	砂礫台地（更新世段丘）	更新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、表層が厚く、且つ未固結の砂礫層からなるもの。
	砂礫台地（完新世段丘）	完新世に形成された、地表の平坦な台状または段丘状の地域で、形成時期が新しく、未固結の砂礫層からなるもの。
低地	緩扇状地	山麓部から氾濫原低地へと広がる、主として砂や礫からなる、傾斜の緩やかな扇状の堆積地域。
	扇状地	山麓部にあつて、主として砂や礫からなる、やや傾斜の急な扇状の堆積地域。
	谷底低地	山地、丘陵地、台地を刻む河川の堆積作用が及ぶ狭長な平坦地。
	氾濫原低地	扇状地と三角洲・海岸低地の中間に位置し、河川の堆積作用により形成された広く開けた平坦地で、自然堤防、旧河道または湿地を除く低地。
	自然堤防	河川により運搬されたシルト～中粒砂が、河道及び旧河道沿いに細長く堆積して形成された微高地。
	旧河道	過去の河川流路で、周囲の低地より低い帯状の凹地。
	湿地	自然堤防や、砂州等の後背に位置するため、河川の堆積作用が比較的及ばない沼沢性起源の低湿地。現況の湿地を含む。
	天井川及び天井川沿いの微高地	堤防設置によって周囲の地形面より高くなった河床及びこれに沿って形成された微高地。
	河原・河川敷	現況の河原及び河川敷（低水敷・高水敷）をいい、堤内地の旧河原・旧河川敷を含む。
水部	現水部	現況が海、または河川、水路、湖沼等の水部。干潟を含む。
	旧水部	過去の海または湖沼等で、現存しないもの。
副分類	崖	長く延びる一連の急傾斜の自然斜面。
	凹地・浅い谷	細流や地下水の働きによって台地または扇状地等の表面に形成された凹地や浅い谷。

#### (2) 人工地形分類図

人工地形分類図は、宅地造成等に伴って地形が改変されている範囲を最近の空中写真や地形図等を利用して抽出し、土地の改変状況によって「人工平坦地」や「盛土地」等に分類した地図である（表 6-2）。

昨今、特に都市地域では、市街地の拡大に伴って、従来の地形の多くが大きく改変されるとともに、開発から年月が経過し、最近は土地本来の自然の状況（自然地形）がわ

からなくなっている地域が各地で見られるようになっている。

丘陵地等で住宅団地の開発のため、切り盛り造成等により宅地整備が行われた「人工平坦地」の中には、現在ほとんど平坦な土地であっても、開発前には尾根や谷が入り組んだ起伏のある土地だったところがある。この調査では、そうした人工平坦地内について、かつて谷があった場所を、開発前の状況がわかる地形図や空中写真から調査し、「旧谷線」として表示している。

また低地では、かつて水田等に利用されていた低湿地等に土を盛って造成した「盛土地」や、池沼を埋め立てた「埋立地」等の人工地形を分類している。こうした情報を自然地形分類と組み合わせて活用することにより、土地の安全性に関する情報を得ることができる。

表 6-2 人工地形分類区分

大分類	小分類	摘要
人工平坦地 (切り盛り造成地)	宅地等	山地・丘陵地や台地等の斜面を切土または盛土により造成した平坦地や緩傾斜地のうち、主として住宅や工業団地等の造成によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	農地等	上記のうち、主に農地整備、ゴルフ場造成等によるもの。造成に伴って生じた人工斜面を含む。
	旧谷線	人工平坦化地内の山地・丘陵地にかつて存在した谷線。
改変工事中の区域		人工的な地形改変が進行している区域及び採石・採土場、採鉱地等及びその跡地。
盛土地		低地等に0.5m以上盛土して造成された土地。台地上の凹地・浅い谷部分の盛土地を含む。
埋立地		水部等を埋め立てて造成された土地。
切土地		山地・丘陵地や台地等の斜面を人工的に切土して生じた平坦地及び急傾斜の人工斜面。

### (3) 地形分類図から見た土地の安全性

自然地形分類図及び人工地形分類図からは、災害に対するそれぞれの土地の潜在的可能性を判断することができる。特に人工地形が分布する地域では自然地形分類を合わせて参照し、その土地の元々の地形条件を把握することにより、土地の安全性に関する詳細な情報を得ることができる。

例えば低地の盛土地は、谷底低地、氾濫原低地、旧河道・三角州・海岸低地・湿地といった、盛土施工前の地形を自然地形分類図から判断することにより、表 6-3 に示すような地震の揺れの大きさや液状化の可能性、高潮や洪水氾濫による浸水の可能性等を知ることができる。

表 6-3 地形分類と潜在的な自然災害の可能性

分類		地震に際して予想される災害	大雨・洪水に対して予想される災害
自然地形が分布する地域	山地・丘陵地	山地斜面等	崖や急斜面の近くでは、斜面崩壊や落石の可能性はある。急斜面等では斜面崩壊の可能性があり、上流部の地質や崩壊の状況により、豪雨時には谷沿いや谷の出口付近で土石流発生の可能性はある。
		麓斜面及び崖錐	背後に崖や急斜面がある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。谷沿いや谷の出口付近では、上流部に崖錐や麓斜面が多数存在する場合、豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。
		土石流堆積地	傾斜のある場所では、斜面崩壊や落石の可能性はある。地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。豪雨時に土石流発生の可能性はある。また、地質や傾斜等の状況によっては地すべりが発生する可能性がある。
	低地	砂礫台地（更新世段丘）（完新世段丘）	台地の縁辺部の斜面では崩壊や地すべりの可能性がある。通常は洪水時に浸水することはないが、凹地などでは浸水することもある。また、低地や近くの水路との間に十分な高さが無い台地では、洪水時に冠水することもある。逆に低地との間に高さがある台地では、縁辺部での斜面崩壊や地すべりの可能性がある。こうした地域では過去の浸水実績や土砂災害実績を知ることが有効である。
		緩扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。
		扇状地	一般的に地盤は良好だが、末端部では液状化の可能性はある。豪雨時に砂礫の浸食・堆積の可能性はあるが、排水は良好である。上流部の状況により、洪水時には土石流発生の可能性はある。
		谷底低地	低地の中でも堆積物の状況により地震の揺れが増幅される可能性がある。また、斜面の近くでは、斜面崩壊の危険性がある。洪水時に冠水することもあるが、概ね排水は速やかである。斜面の近くでは、斜面崩壊の可能性はある。
		氾濫原低地	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
		自然堤防	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。異常の洪水時に浸水することもあるが、周囲の氾濫原低地と比べ高く、排水も速やかである。
		旧河道	低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性が特に高い地域である。明瞭な凹地では洪水の通り道となる場合があり、排水状況も悪いため、浸水時には長く湛水することもある。
人工地形が分布する地域	山地・台地等	人工平坦地（宅地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。
		人工平坦地（農地等）	特に谷埋め盛土地やその周辺では、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。背後に急傾斜面がある場合では、斜面崩壊の可能性はある。また、盛土地では崩落や地すべりの可能性がある。
	低地	改変工事中の区域	採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。採石・採土中の切土地周辺では、斜面崩壊の可能性はある。
		盛土地	谷底低地の盛土地
氾濫原低地の盛土地			低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、高い盛土地ではさらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
旧河道、湿地等の盛土地			低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく、液状化の可能性はある。高い盛土地では、さらに揺れが増幅される可能性がある。十分な盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫の可能性はある。
埋立地		低地の中でも地震の揺れが増幅されやすく液状化の可能性が特に高い土地である。周囲の水面に比べ十分に盛土の高さが無い土地では、河川洪水、内水氾濫等により浸水する可能性がある。	
切土地	切土斜面が半固結・未固結の場合、地震の揺れによる崩壊の可能性はある。切土斜面が半固結・未固結の急斜面の場合、斜面崩壊の可能性はある。		
旧谷線	旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、地震の揺れが増幅され、地盤が変形したり盛土部分が崩壊する可能性がある。旧谷線の周辺は厚い盛土の可能性があり、異常降雨時には地盤が緩み、盛土部分が崩壊する可能性がある。		

## 6.2 土地利用分類図

土地利用分類図は、現在から概ね 100 年前（明治期）及び概ね 40 年前（昭和 40 年代）の 2 時期の旧版地図を判読し、地形図作成当時の土地利用を分類し、その分布状況を表示した地図である。

（第 1 期） 現在から概ね 100 年前の明治期の地形図には、当時の市街地や集落、森林・農地・河川等が詳細に描かれている。土地利用分類図では、それらを判読し、主要な土地利用ごとに色分けして表示している。

（第 2 期） わが国では、1960 年代後半から空中写真を利用した精度の高い地形図の整備が全国的に開始された。その時代の地形図から作成した土地利用分類図では、現在から概ね 40 年前の土地利用の状況を読み取ることができる。

なお、明治期、昭和期の 2 時期の土地利用分類図は、共通の凡例で分類している。そのため、現在の地形図を背景に 2 時期の土地利用分類図を見比べることにより、その都市の現在の市街地で、かつてどのような土地利用がなされていたかを知ることができる。

表 6-4 土地利用分類区分

分類	定義
田	水稲、い草などを栽培している田。季節により畑作物を栽培するものを含む。
沼田	泥が深く、ひざまでぬかるような田（この分類は明治期だけに適用）。
畑	麦・陸稲・野菜などを栽培する土地をいい、牧草地、芝地を含む。
果樹園	りんご・梨・桃・ブドウなどの果樹を栽培する土地。
樹木畑	桑、茶を栽培している土地。桐・はぜ・こうぞ・しゅろ等を栽培している畑を含む。
森林	高さ 2 m 以上の多年生植物の密生している地域。植林地においては樹高が 2 m 未満であっても森林とする。高さ 2 m 以下の竹、笹の密生している土地。
荒地・海浜等	自然の草地からなる土地及び露岩地、崩壊地、砂礫地などで植物に覆われていない土地。万年雪で覆われた土地を含む。
湿地	干上がった湖沼の跡などの排水の悪い土地で、雨期には水をたたえるところ。
建物用地	住宅や建物類似の構築物、商業・業務・工業・公共・流通・通信・各種の処理施設等に利用されている土地。
交通施設用地	鉄道、道路、空港などに利用されている土地。
その他の用地	空地、公園緑地、墓地、採石地、採鉱地、自衛隊などの特別な用途に利用されている土地。
水部	河川、湖沼、ため池等の内水面および海面や干潟。

## 6.3 災害履歴図

災害履歴図は、国、地方公共団体、その他関係各機関等が調査した資料に基づき、地域に大きな影響を与えた災害の発生状況や、その被害の様子を示した地図で、災害の種類ごと分けて作成している。この図では、比較的信頼性の高い情報のうち、最低でも縮尺 1/50,000（図上の 1 cm が現地での 500 m に相当）レベル以上の精度を持つ資料を選定して表示している。なお、地図には災害状況等の情報とともに、対象とした資料で扱った調査範囲を示している。引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害があるほか、災害の種類や規模等の条件により、調査範囲外の地域でも被害が生じているような場合があり、この地図に全ての災害が表示されているわけではないことに留意する必要がある。

なお、災害履歴図の作成にあたり参照した資料の詳細や、被害の場所等を特定できない災害の状況等、その他参考になる事項を、この説明書に記述している。災害履歴図は、



地形分類図や土地利用図等と見比べたり、さらに詳しい文献を調べたりすることで、その土地の安全性について理解を深めることができる。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性があることにも留意する必要がある。

#### 6.4 成果図面の使い方

本図幅内で今後も想定される自然災害被害としては、本調査の災害履歴等からみて、異常降雨時の浸水被害・土砂災害と、大規模地震発生時の建物倒壊、液状化等の地震災害の、大きく2つが考えられる。これらの被害想定については、国や各自治体が作成している各種ハザードマップにより、現時点で災害が発生した場合の被害の規模について、ある程度予測することが可能である。

しかし、今後も地形改変をとまなう土地利用の変化が続くと仮定した場合、ハザードマップ等からでは、新たに地形改変が行われた場所でどのような災害被害が発生するかを予測することは困難である。また、すでに人工改変が行われているような場所でも、建築物の更新や再開発等が行われることも考えられる。

そのような場合において、その土地本来の地形や過去の災害履歴から、自然災害に対する危険度が高い地域なのかどうかを事前に知っておくことは非常に重要であり、災害が発生した場合でも被害を最小限に留めるための対策を取ることが可能となる。

本成果図面の使い方としては、一例として以下のような利用方法が考えられる。

- ・現在、本図幅内の土地に住む住民、あるいはこれから住まいを構える住民に対し、その土地の地形特性からみた災害に対する危険性をあらかじめ認識いただき、住民自ら、災害が発生した場合を想定した避難行動や被害を最小限にするための安全対策を考える機会を提供する。
- ・各地域における自治会や自主防災組織等が、自分たちが住む地域の自然災害に対する危険性や過去の被害状況を把握することにより、より具体的な災害状況を想定した避難訓練の実施や、防災物資等の備蓄に役立てることができる。
- ・学校教育や生涯学習等の場を通して、自分たちの住む地域の自然地誌を学ぶとともに、災害と地形との因果関係や過去の災害履歴等から、災害から身を守るための防災教育での資料として活用する。
- ・低地部で新たな開発等を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、軟弱地盤の土地においては、計画場所の変更や軟弱地盤対策工法の選択等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地における過去の被害程度の把握ができることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。
- ・緩斜面で切り盛り造成等により人工改変を行う場合、地形分類より地盤強度が想定できることから、麓屑面や崖錐などの落石や地すべり等土砂災害の危険性が高い場所では、計画場所の変更や砂防対策の施工等、事前に対策を講じることが可能となる。また、災害履歴から、その土地と似た地形条件の場所の土砂災害発生履歴が分

かることから、防災・減災に向けた対策の必要性についても事前に検討できる。

防災に関しては、これまでは行政の側から語られることが多かったが、近年の市町村合併による行政単位の拡大や、行政改革にともなう行政職員の減少や防災関連費用の削減等により、行政のみではきめ細やかな防災対策の実施が困難な状況となっている。

また、近年では集中豪雨などによる災害の局所化、都市部への人口集中などによる被害の甚大化が予測され、事前の防災対策の必要性・重要性がますます高まっている。

そのため、上記で述べたように、本成果図面を活用することにより、行政だけでなく、地域住民が主体となった防災・減災対策を立てるとともに、新たな土地利用を計画する際に、事前に自然災害に対する危険性を予測し、計画の変更や防災・減災対策の導入に役立てることが望まれる。

## 7 引用資料及び参考文献

### 7.1 引用資料

#### (1) 人工地形及び自然地形分類図

地形分類図は、土地の「成り立ち・生い立ち・形」で色分けした地図であり、災害を引き起こす自然現象に対する土地の潜在的な可能性を知ることができる。土地履歴調査では、自然状態の地形によって土地を区分した地図（自然地形分類図）の上に、人間が造成した土地の状況を示した地図（人工地形分類図）を重ね合わせ表示した地図を「人工地形及び自然地形分類図」と呼んでいる。

奈良地区の「人工地形及び自然地形分類図」は、以下の方法により作成した。

①「自然地形分類図」は、以下の既存資料を参考に、空中写真判読により作成を行った。

京都府(1981):5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)「大阪東北部・奈良・上野」。

奈良県(1983):5万分の1土地分類基本調査(地形分類図)「奈良・大阪東北部・大阪東南部」。

判読に使用した空中写真は、

M265 (昭22.4.26 米軍撮影)、M496 (昭22.9.23 米軍撮影)、

M527 (昭22.10.4 米軍撮影)、M540 (昭22.10.8 米軍撮影)。

②「人工地形分類図」は、2万5千分の1地形図「奈良」（平成18年更新）「田辺」（平成20年更新）の読図及び空中写真（MKK-2003-1X, 国土地理院撮影）の補足判読により作成したもので、おおむね平成15年時点の地形の状況を反映している。

③本図の東半分の範囲は、調査対象外である。

なお、本図の作成にあたっては、海津正倫（奈良大学教授（名古屋大学名誉教授））、加藤茂弘（兵庫県立人と自然の博物館主任研究員）、高田将志（奈良女子大学研究院教授）、三田村宗樹（大阪市立大学大学院教授）の各氏の指導をいただいた。

#### (2) 土地利用分類図

奈良地区の「土地利用分類図」は、現在から約100年前（1910年頃）及び約40年前（1970年頃）の2時期を対象に、それぞれの年代に測量された地形図を資料として、当時の土地利用の状況を、資料とした地形図から読み取れる情報の範囲内で分類し、その結果を5万分の1の縮尺精度に編集したものである。本地区の「土地利用分類図」の作成にあたっては、以下の地形図を利用した。

##### 【第1期（明治期、1910年頃）】

・5万分1地形図「奈良」明治41年測図、大正4年鉄道補描、大正5.12.28発行、図式は明治42年式地形図図式

・5万分1地形図「大阪東北部」明治41年測図、大正3年第1回部分修正、大正6.5.30発行、図式は明治42年式地形図図式

##### 【第2期（昭和期、1970年頃）】

・5万分1地形図「奈良」昭和43年編集（資料：昭和42年改測1:25,000地形図）、

昭和 44. 6. 30 発行、図式は昭和 40 年式 1:50,000 地形図図式  
なお、本図の背景に使用した地形図は、調査時点の最新図（平成 21 年修正）である。

### (3) 災害履歴図

災害履歴図は、地方公共団体や関係行政機関、研究機関、大学等が調査した水害、地震災害、土砂災害等の現地調査図等の資料より、調査地域内で過去に発生した災害による被害区域や被害箇所に関する情報を示した地図である。ここで提供する情報は、概ね 5 万分の 1 程度の縮尺レベルで作成されており、位置誤差を含むほか、地図上で表示をまとめたり省略したりしている場合がある。

また、引用する被害調査図等の資料が不十分なため、地図に掲載されていない災害もある。被害の場所等を特定できない災害等については、別途災害年表や調査説明書本文に記載しているものもある。

なお、災害発生後の堤防整備や下水道整備、地盤の改良等の防災対策が行われている場合などには、災害発生当時に比べて、現在は土地の安全性が向上している可能性がある。

災害履歴図の作成にあたっては、以下の資料を引用した。

#### 【水害・土砂災害】

##### ① 1953 年 8 月災害

・昭和 28 (1953) 年 8 月降雨 (大雨) による浸水区域を、井手町 (1983) 『昭和 28 年水害時の被災状況 (南山城水害史附図)』、井手町町史編集委員会 (1983) 『南山城災害略図 (8 月災) (南山城水害誌)』より編集。

##### ② 1982 年 8 月災害

・昭和 57 (1982) 年 8 月降雨 (台風 10 号) による浸水区域を、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』より編集。

##### ③ 1999 年 8 月災害

・平成 11 (1999) 年 8 月降雨 (豪雨) による浸水区域を、大和川流域総合治水対策協議会『大和川流域浸水実績図』より編集。

#### 【地震災害】

##### ① 1854 年地震被害

・液状化被害は、若松加寿江 (2011) 『日本の液状化履歴マップ 745-2008 (DVD-ROM 付き)』より転載。

なお、各地図の作成にあたっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の 5 万分の 1 地形図、空中写真、数値地図 50000 (地図画像)、数値地図 25000 (土地条件) 及び基盤地図情報を使用した。(承認番号 平 24 情使、第 534 号)

## 7.2 参考文献

- 本調査説明書の作成にあたっては、以下の資料、文献等を参考とした(50音順)。
- (地形分類・土地利用)
- 市原実(1984) 近畿の丘陵 - 大阪層群と古琵琶湖層群 -, アーバンクボタ, No. 23, 45~47.
- 植村善博 他(2007) 木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史, 京都歴史災害研究, 第7号(2007), 1~24.
- 太田陽子・成瀬敏郎・田中眞吾・岡田篤正 - 編(2004) 日本の地形 6 近畿・中国・四国, 東京大学出版会, 68-71, 76-82.
- 尾崎正紀・寒川旭・宮崎一博・西岡芳晴・宮地良典・竹内圭史・田口雄作(2000) 地域地質研究報告 1/50,000 図幅 奈良地域の地質, 地質調査所.
- 京都府(1981) 1/50,000 土地分類基本調査(国土調査)「大阪東北部・奈良・上野」, 京都府農林部耕地課.
- 経済企画庁(1973) 1/200,000 土地分類図(奈良県), 経済企画庁総合開発局.
- 建設省(1993) 淀川水害地形分類図(その3) 京都盆地水害地形分類図, 建設省近畿地方建設局淀川工事事務所.
- 国土庁(1976) 1/200,000 土地分類図(京都府), 国土庁土地局.
- 国土庁(1976) 1/100,000 土地分類基本調査「大阪府」, 国土庁土地局.
- 国土地理院(1983) 土地条件調査報告書(大阪地区), 国土地理院.
- 中央防災会議事務局(2006) 中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」(第26回) 中部圏・近畿圏の内陸地震の震度分布等の検討資料集, 中央防災会議事務局.
- 奈良県(1983) 1/50,000 土地分類基本調査(地形分類)「奈良 大阪東北部 大阪東南部(いずれも奈良県域)」, 奈良県企画部.
- 奈良県(2007) 奈良県耐震改修促進計画(平成20年修正), 奈良県, 3-5, 28.
- 奈良県(2008) 奈良県地域防災計画, 奈良県, 22-36.
- 三上禎次(2005) 京都府南東部鷲峰山北西方山腹の未固結堆積層露頭について、フォーラム理科教育, No.7 2005, 51~54.
- 三田村宗樹(1992) 京阪奈丘陵の大阪層群の層序と地質構造, 第四紀研究, 31(3), 159-177.
- 1/200,000 土地分類図(地形分類図) 「奈良県」(昭和48年発行), 経済企画庁
- 1/200,000 土地分類図(地形分類図) 「京都府」(昭和51年発行), 国土庁
- 1/100,000 土地分類図(地形分類図) 「大阪府」(昭和51年発行), 国土庁
- 1/50,000 土地分類基本調査「大阪東北部・奈良・上野」(表層地質図)(昭和58年発行), 京都府
- 1/50,000 土地分類基本調査「大阪東北部・奈良・上野」(地質分類図)(昭和58年発行), 京都府
- 1/50,000 土地分類基本調査「大阪東北部・奈良・上野」(土壌図)(昭和58年発行), 京都府
- 1/50,000 土地分類基本調査 「奈良 大阪東北部 大阪東南部(いずれも奈良県域)」(表層地質図)(昭和59年), 奈良県
- 1/50,000 土地分類基本調査 「奈良 大阪東北部 大阪東南部(いずれも奈良県域)」(地形分類図)(昭和59年), 奈良県
- 1/50,000 土地分類基本調査 「奈良 大阪東北部 大阪東南部(いずれも奈良県域)」(土壌図)(昭和59年), 奈良県
- 1/50,000 地形図「奈良」明治41年測量大正4鉄道補描(大正5.12.28発行), 国土地理院.



1/50,000 地形図 「奈良」 昭和 43 年編集 (昭和 44. 6. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「田辺」 大正 11 年測量 (大正 14. 10. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「田辺」 昭和 42 年改測 (昭和 43. 11. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「奈良」 大正 11 年測量 (大正 14. 10. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 地形図 「奈良」 昭和 42 年改測 (昭和 44. 2. 28 発行), 国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図 「田辺」 昭和 50 年修正測量 (昭和 51. 9. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図 「田辺」 平成 22 年更新, 国土地理院. \*

1/25,000 治水地形分類図 「奈良」 昭和 50 年修正測量 (昭和 51. 11. 30 発行), 国土地理院.

1/25,000 治水地形分類図 「奈良」 平成 22 年更新, 国土地理院.

奈良県立教育研究所 奈良県の暮らし  
<http://www.nps.ed.jp/nara-c/multi/kyouzai/narakenchou/hattenssurumati/hattenssurumati.html>

京都府山城広域振興局  
<http://www.pref.kyoto.jp/yamashiro/no-nourin/saigai01.html>

井出町史編集委員会 (1983) 井出町史シリーズ特別編 南山城水害誌. 259p.  
 (災害履歴調査)

植村善博・小林善仁・木村大輔・進藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史 (2007) 木津川・宇治川低地の地形と過去 400 年間の水害史. 京都歴史災害研究 Vol. 7, pp. 1-24.

宇佐美龍夫 (2003) 最新版日本地震被害総覧 416-2001. 東京大学出版会, 605p.

大阪府 (2012) 大阪府地域防災計画.

岡田義光 (2012) 日本の地震地図 東日本大震災後版. 東京書籍, 223p.

木津川市 (2012) 木津川市地域防災計画.

京都府 (2012) 京都府地域防災計画.

日下雅義 (1968) 山城盆地南部における内水災害. 地理学評論 41, 8, pp. 505-519.

国土交通省近畿地方整備局大和川河川事務所 (2009) 大和川水系河川整備基本方針.

国土交通省国土地理院 (1965) 土地条件調査報告書 (大阪平野). 99p.

国土交通省国土地理院 (1965) 土地条件調査報告書 (京都). 99p.

地震調査研究推進本部地震調査委員会 (2009) 日本の地震活動—被害地震から見た地域別の  
 特徴, 第 2 版, 496p.

内閣府 (2009) 中央防災会議「東南海、南海地震等に関する専門調査会」中部圏・近畿圏の  
 内陸地震に関する報告.

奈良地方気象台 (1997) 「奈良県の気象百年」. 211p.

若松加寿江 (2011) 日本の液状化履歴マップ 745-2007 (DVD+解説書). 東京大学出版会, 90p.

環境省ホームページ「全国地盤環境情報ディレクトリ (平成 23 年度版)」  
[http://www.env.go.jp/water/jiban/dir\\_h23/index.html](http://www.env.go.jp/water/jiban/dir_h23/index.html) (平成 24 年)

気象庁ホームページ「気象統計情報」  
<http://www.jma.go.jp/jma/menu/report.html>

気象庁ホームページ「災害をもたらした気象事例」  
<http://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/index.html> (平成 24 年)

# 資料

災害年表（地震災害）

災害年表（風水害）

# 災害年表(地震災害)

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	京都府		奈良県		記事	出典
		北緯	東経		京都府	奈良県				
827年8月11日 (天長4年7月12日)	京都	35	135 3/4	M6.5~7	家屋多くくずれ余震が翌年に及んだ。	京都気象100年				
868年8月3日 (貞観10年7月8日)	播磨・山城	34 4/5	134. 8	M≥7. 0	山城、播磨諸郡の官舎堂塔ことごとく破壊、京都で垣屋くずれ。	京都気象100年				
887年8月26日 (仁和3年7月30日)	五畿・七道	33. 0	135. 0	M8. 0~8. 5	庁舎転倒(京都東西両宗の虚舎)圧死者多数、余震は8月未まであった。	京都気象100年				
938年5月22日 (天慶1年4月15日)	京都・紀伊	35	135. 8	M≥7. 0	山城、大和、紀伊堂舎、倉屋倒壊死者あり、高野山伽藍破壊、8月6日にも強震、余震11月まで続く。	京都気象100年				
976年7月22日 (貞元1年6月18日)	山城・近江	34 8/9	135 4/5	M≥6. 7	屋舎仏寺転倒多く、死者少なくなかった。余震連月止まず。	京都気象100年				
1185年8月13日 (文治1年7月9日)	近江・山城・大和	35	135. 8	M≒7. 4	京都、特に白河辺の被害大。社寺家屋倒壊破壊損多く死者多数、宇治橋落ち余震。9月におよび230回を超える、近江の湖水激減す。	京都気象100年		京都、特に白河辺の被害大。社寺家屋倒壊破壊損多く、死者多数。比叡山・醍醐寺にも被害。唐招提寺では千手観音破損し、中門が倒れた。	奈良県の気象百年	
1317年2月24日 (文保1年1月5日)	京都	35. 0	135. 8	M6. 5~7. 0	白河辺の人家皆つぶれ死者5人、余震5月になっても止まなかった。	京都気象100年				
1361年6月3日 (正平16年6月24日)	畿内・土佐・阿波	33. 0	135. 0	M8 1/4~8. 5				諸国に堂塔の破壊破壊多く、奈良では薬師寺金堂の二階傾き、唐招提寺の九輪大破、廻廊倒れる。	奈良県の気象百年	
1449年5月13日 (宝徳1年4月12日)	山城・大和	35. 0	135 3/4	M5 3/4~6. 5	洛中堂塔被害多く、築地皆崩る。西山、東山で死な地裂ける。淀大橋、柱大橋落ちる、人馬の死んだものあり。	京都気象100年				
1510年9月21日 (永正7年8月8日)	摂津・河内	34. 6	135. 6	M6. 5~7. 0				奈良の被害は小さい。	奈良県の気象百年	
1596年9月5日 (慶長1年7月13日)	畿内 (慶長伏見地震)	34. 65	135. 6	M7 1/2	伏見大地震。三条より伏見の間被害最も多く、伏見城天守大破城中にて約600人圧死、東寺倒潰、天龍寺、二尊院、大覚寺倒れる。堺で死者600人余、余震翌年におよぶ。	京都気象100年		奈良では興福寺・唐招提寺・法華寺・海龍王寺など大被害、般若寺十三重塔上部落下。	奈良県の気象百年	
1662年6月16日 (寛文2年5月1日)	山城・大和・河内・和泉・摂津・丹波・若狹・近江・美濃・伊勢・駿河・三河・信濃	35. 2	135. 95	M7 1/4~7. 6	京都で町屋倒壊1000、死者200人余、諸所の城破壊。	京都気象100年		奈良では2日間に約40回の地震とある。	奈良県の気象百年	
1707年10月28日 (宝永4年10月4日)	五畿・七道 (宝永地震)	33. 2	135. 9	M8. 6	京都府の被害記述なし。	京都気象100年		大和国では死者63人、家屋損壊3219戸。興福寺・法華寺ほか多くの寺で被害。	奈良県の気象百年	
1830年8月19日 (天保1年7月2日)	京都および隣国	35. 1	135. 6	M6. 5	御所、二条城、諸寺破壊、京中の土蔵すべてこわれる、民家の倒壊0. 1%以下と云う、京都で死者280人、傷1300人、亀山、伏見、大津、伊丹などで被害、余震は翌年の1月までに600予回。	京都気象100年				
1854年7月9日 (安政1年6月15日)	伊賀・伊勢・大和及び隣国 (伊賀上野地震)	34. 75	136. 1	M7 1/4				奈良では死者280人、家屋損壊700~800戸、春日大社などの寺社の灯籠は残らず倒れたという。	奈良県地域防災計画	

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事		
		北緯	東経		京都府	奈良県	出典
1854年12月24日 (安政11年11月5日)	畿内・東海・東山・北陸・南海・山陰・山陽道 (安政南海地震)	33	135	M8.4		奈良では春日大社の石灯笼が多く倒れたほか、東大寺一部破壊、春日大社町家で破壊家屋あり。	奈良県の気象百年
1891年10月28日 (明治24)	岐阜県南西部 (濃尾地震)	35.6	136.6	M8	日本の地震活動一被害地震から見た地域別の特徴一	奈良県では死者1人、負傷者2人、全壊16戸。	奈良県の気象百年
1899年3月7日 (明治32)	三重県南部 (紀和地震)	34.1	136.1	M7		被害の中心は奈良県南東部と三重県南部。奈良県では北山筋、吉野郡方面で山崩れなど被害大。死者は三重県で7人だが奈良県は0人。春日大社石灯笼87基倒れる。	奈良県の気象百年
1909年8月14日 (明治42)	滋賀県東部 (江濃(姉川)地震)	35.4	136.3	M6.8		琵琶湖東北岸 虎姫付近で被害最大。滋賀・岐阜両県で死者41人。奈良県は軽微。	奈良県の気象百年
1925年5月23日 (大正14)	兵庫県北部 (但馬地震)	35.6	134.8	M6.8	日本の地震活動一被害地震から見た地域別の特徴一	円山川流域で被害多く、死者428人、家屋全壊1295戸、焼失2180戸。奈良県の被害は軽微。	奈良県の気象百年
1927年3月7日 (昭和2)	京都府北部 (北丹後地震)	35.6	134.9	M7.3	北但馬地震。北部(久美浜)で死者7人、負傷者30人、住家全壊20棟。	奈良県の被害は軽微。	奈良県の気象百年
1938年2月21日 (昭和11)	奈良県地方 (河内大和地震)	34.5	135.7	M6.4	峯山町全壊、死者1014人、負傷者1232人、地震割、瓦落下、電線切断等。被害合計 死者2925人、負傷者7806人、家屋全壊12584戸、同半壊10841戸、焼失3711戸、郷村断層、隆起、くい違ひ多く生ず。	大阪・奈良の府県境で振動が強かった。死者は大和府で8人。奈良県では死者1人、家屋の全半壊148戸、小さな崖崩れあり、法隆寺・唐招提寺・薬師寺で土塙の損壊などの被害あり。余震多数。余震分布から大和川断層の活動と考えられる。	奈良県の気象百年
1938年1月12日 (昭和3)	紀伊水道南部	33.35	135.04	M6.8		奈良県では十津川村などで小被害。紀伊水道沿岸部で地鳴り、井戸水位の増減有り。浅い地震。	奈良県の気象百年
1944年12月7日 (昭和19)	紀伊半島沖 (東南海地震)	33.6	136.2	M7.9		奈良県では死者3名、負傷者21名、全壊89戸。	奈良県の気象百年
1945年1月13日 (昭和20)	三河湾 (三河地震)	34.7	137.1	M6.8		奈良県の被害記録はなく、戦時中のため詳細不明。	奈良県の気象百年
1946年12月21日 (昭和21)	紀伊半島沖 (南海地震)	32.9	135.8	M8		奈良県では負傷者13人、全壊37戸、春日大社石灯笼約300基倒れる。	奈良県の気象百年
1948年6月15日 (昭和23)	紀伊水道 (日高川地震)	33.7	135.3	M6.7		和歌山県・奈良県南部で小被害。全体で死者2人(十津川署管内)、家屋倒壊60戸、地鳴り・崖崩れなど。奈良市では被害はなかったが、春日大社などの石灯笼3基倒れる。	奈良県の気象百年
1950年4月26日 (昭和25)	奈良県南部	33.55	135.4	M6.5		奈良県十津川村などでも民家半壊1戸などの小被害。春日大社の石灯笼10基倒れる。	奈良県の気象百年
1952年7月18日 (昭和27)	奈良県地方 (吉野地震)	34.5	135.8	M6.7		奈良県では死者3人、負傷者6人、半壊1戸、春日大社の石灯笼650基が倒れる。	奈良県の気象百年
1962年1月4日 (昭和37)	和歌山県南部 (紀伊水道地震)	33.38	135.13	M6.4		奈良県でも南部で崖崩れ1ヶ所、落石による電話線の被害あり。	奈良県の気象百年

西暦 (和暦)	地域 (地震名称)	震央位置(°)		規模 (M)	記事		
		北緯	東経		京都府	出典	出典
1995年1月17日 (平成7)	淡路島付近 (兵庫県南部地震)	34.6	135.0	M7.3	死者1名、負傷者49名、住宅全壊3戸、住宅半壊6戸。	奈良県内の被害は負傷者12人、建物の一部損壊19件など比較的軽微。	奈良県の気象百年
2000年10月31日 (平成12)	三重県中部	34.18	136.19	M5.7		奈良県でも南部で一部落石、崩土があった。	奈良県地域防災計画
2004年9月5日 (平成16)	紀伊半島南東沖 (紀伊半島南東沖地 震)	33.08	137.08	M7.4	負傷者1人。	日本の地震活動一被害地震から見た地域別の特徴一	奈良県では、一部で道路の落石及び小規模崩土があった。負傷者6人。
2004年9月7日 (平成16)	東海道沖	33.2	137.3	M6.4		人的物的被害無し。	奈良県地域防災計画

参照 ①国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」丸善出版  
 ②宇佐美龍夫(2003)「新編日本被害地震総覧[416]-2001」東京大学出版会  
 ※地震の緯度・経度、規模などは①、②の資料も参照した。



災害年表(風水害)

和暦年	西暦	月	日	終了日	気象概要	大阪府			京都府			奈良県						
						開始日	最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)	雨量(mm)	事象	出典	最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)	雨量(mm)	事象	出典		
明治 1	1868	5	22	7	19	霖雨洪水												
明治 1	1868	7			明治元年7月洪水													
明治 1	1868	9	3	9	4	風雨洪水												
明治 3	1870	10	1		大風雨													
明治 3	1870	10	12		大風雨洪水													
明治 4	1871	7	4		大風雨洪水													
明治 5	1872	10	3	10	30	洪水												
明治 6	1873	8	30		大風雨洪水													
明治 9	1876	10			暴風雨洪水													
明治 13	1880	10	3		大風雨													
明治 15	1882	8	5		暴風雨洪水													
明治 16	1883	9	10		暴風雨													
明治 16	1883	10	7		暴風雨													

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県									
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典					
							最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)									
明治	17	1884	7	1		大雨洪水				石津川の堤防破壊して湊村に浸入、大和川の堤防も亦危、橋上が浸水。地方への交通機関はほとんど絶たれた。	大阪の気象百年												
明治	18	1885	6	15	7	1				6月上旬より続いた降雨に加え、低気圧が相次いで大阪付近を襲い、6月15日夜半から豪雨となり、17日夜半までに淀川で183.3mmの雨量となった。さらに、6月25日頃から再び降り始め、7月1日には暴風も加わって、淀川は水位上昇。低気圧による洪水でも加わって、淀川(北河内郡)と講良郡7ヶ村、東成郡27ヶ村(城東区・旭区・都島区)に濁水が溢れ、計113ヶ町村、約9900戸、約4452.6haが水没。その後の暴風雨により、大阪市の東区28、南区46、西区174、北区92の計340町と、大阪城～天王寺間の一部高台を除くほとんどの低地部が水害を受け、被災人口は276,049人に達した。また、30奈橋が流出。	淀川洪水の記録												
明治	18	1885	7	1		台風				5月下旬からの大雨と7月1日の台風により、大洪水が発生。大和川の水位は丈8尺5寸。大阪府下では水害後のコレラ・チフスの流行による死者が多数。淀川では枚方の堤防が決壊。	河川整備基本方針(大和川水系)		214	6月26日から雨が降り続いていていたところへ7月1日に台風が襲来、京都府一体は大風水害に見舞われた。桂川、鴨川、宇治川、木津川などはことごとく反乱。京田辺市においても旧三山木村山本の堤防が決壊、旧大住村も決壊に瀕した。	京田辺市地域防災計画								河川整備基本方針(大和川水系)
明治	22	1889	8	20		洪水				淀川洪水、淀御牧、横島、八幡、大山崎地にて決壊。	大阪の気象百年												
明治	29	1896	7	21	7	23				島本水位3.9m、三ヶ枚、大冠堤防決壊。	大阪の気象百年												
明治	29	1896	9			大雨				前月末よりの雨で大和川の枯木・富田・住道堤防、石川堤防決壊。	大和川の洪水・過去の水害												
明治	29	1896	9	6		大雨				前線降雨で淀川大洪水、唐島外島堤、大塚外島堤、三矢堤、広瀬堤決壊、右岸一帯浸水。	大阪の気象百年												
明治	36	1903	4	11		雷雨				死傷者3名。	大阪の気象百年												
明治	36	1903	7	7	9	大雨		264		梅雨前線により四国東部から近畿一体に強い降雨。大和川の水位は5.3mとなり、流域全体で田畑、家屋の浸水、道路、堤防等の被害が多数。建物被害11,696軒。	河川整備基本方針(大和川水系)												
明治	43	1910	9	6	9	9				京阪以西で多量の降雨により河川暴溢。堤防決壊、橋梁流失、鉄道線路の破壊による交通一時断絶、家屋の浸水等の被害有り。	大阪の気象百年												
明治	44	1911	6	14	6	16					大阪の気象百年												
明治	44	1911	8	15	8	17				近畿地方かなりの被害あり。	大阪の気象百年												
大正	1	1912	9	22	9	23	37.0		158	大阪湾高潮。死者3名、家屋全半壊203棟、床上浸水2300戸、船舶破損沈没41隻。	大阪の気象百年									奈良県の気象百年			
大正	4	1915	8	5		台風	20.0				大阪の気象百年												

開始日		終了日		大阪府				京都府				奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	日	月	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
大正	6	1917	9	29	10	1	台風					淀川洪水の記録	淀川洪水の記録	八木 19.7		洞川454.7 菅野434.5 小森390.6 奈良(油 阪) 218.1 八木311.7	奈良県は、関東に比べて被害は僅少であるが、近府に比べて桁はずれの大被害を受けた。雨量は県内平均的に降り、台風の来襲を受けた。雨量は県内平均していたため、被害が拡大した。県内の主な被害は、死者25名、行方不明5名、負傷者24名、家屋全壊53戸、半壊117戸、流失58戸、床上浸水3341戸、床下浸水6360戸等となっている。	奈良県の気象百年	
大正	7	1918	7	11	7	13	台風		大阪 18.9	大阪 24.2		大阪の気象百年							
大正	7	1918	8	29	8	30	台風		19.1	71		大阪の気象百年							
大正	9	1920	8	4			台風		24.0	82		大阪の気象百年							
大正	9	1920	8	20	8	21	台風		20.0			大阪の気象百年							
大正	10	1921	9	25	9	26	台風	25.0				大阪府地域防災計画 画関連資料集	大阪府地域防災計画 画	八木 19.7	大台ヶ原 600.1 前掛537.0 奈良(油 阪) 82.1 八木76.7	平担郡は特に風勢が猛烈で、山間部は雨勢の方が激烈であった。県内の主な被害は、死者5名、負傷者23名、建物被害21142戸(家屋全壊342戸を含む)等。その他、樹木、稲、果実などに多大の被害を受けた。	奈良県の気象百年		
大正	12	1923	6	15	6	23	大雨					阪神方面決壊難破船数十隻行方不明10余名。							
大正	14	1925	8	16	8	17	台風	16.0		56		大阪の気象百年							
昭和	3	1928	7	18			大雨					大阪の気象百年	京都府地域防災計画						
昭和	4	1929	7	27			大雨					家屋焼失・人畜の死傷があった又浸水家屋多し	京都府地域防災計画						
昭和	4	1929	8	15			台風					床上、床下浸水約2080戸 住吉区で建築中の校舎倒壊。農作物の浸水。船舶沈没2隻 行方不明13名。							
昭和	5	1930	7	31	8	1	台風					台風。死者2名、家屋全半壊・床上・床下浸水13328棟。	大阪の気象百年	八木 16.4	洞川559.5 榛原522.0 奈良(登 大路町) 147.6 八木219.9	奈良県に及ぼす風力の影響は余りなかったが、豪雨となつて河川が氾濫し、主として平担郡大和川流域で被害を受けた。県内の主な被害は、死者5名、行方不明2名、負傷者14名、全壊22戸、半壊81戸、流出42戸、浸水6149戸、堤防決壊205ヶ所、道路損壊9229間、橋梁流出135ヶ所、田畑浸水・流失3688町歩、山林崩壊344ヶ所、鉄軌道被害9ヶ所等によつた。	奈良県の気象百年		
昭和	5	1930	8	15			大雨	9.3		135		死者2名、住家全半壊・浸水13328棟。	大阪府地域防災計画 画関連資料集						
昭和	6	1931	10	12	10	13	大雨	12.7				大阪府地域防災計画 画関連資料集	京都府地域防災計画						
昭和	7	1932	7	1	7	2	大雨					梅雨前線。三島郡で田畑浸水約千町。大阪市内の床上・床下浸水3800棟。	大阪の気象百年						
昭和	7	1932	7	5			竜の瀬地すべり					梅雨前線。被害不明。	河川整備基本方針 (大和川水系)						
昭和	7	1932	7	7	7	9	大雨					床上・床下浸水27000棟、浸漬船4隻沈没、煙突倒壊。	大阪の気象百年						
昭和	8	1933	9	4	9	5	台風					行方不明1名、負傷4名、船舶被害27隻。	大阪の気象百年						
昭和	8	1933	10	20			台風					死者1名、私鉄一時不通。	大阪の気象百年						
昭和	9	1934	6	20	6	21	大雨					床上・床下浸水4230棟、焼失家屋1戸。	大阪の気象百年						
昭和	9	1934	8	1			雷雨						大阪の気象百年						

開始日			大阪府			京都府			奈良県					
和暦	年	西暦	月	日	気象概要	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	
						最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)			雨量(mm)	最大風速(m/s)			最大瞬間風速(m/s)
昭和9	1934	9	20	9	21	室戸台風	48.4	60.0	223	死者1812名、行方不明者76名、負傷者8932名、家屋全壊・流失14368棟、半壊15674棟、床上浸水142910棟、床下浸水40830棟。	死者1812名、行方不明者76名、負傷者8932名、家屋全壊・流失14368棟、半壊15674棟、床上浸水142910棟、床下浸水40830棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集	死者1812名、行方不明者76名、負傷者8932名、家屋全壊・流失14368棟、半壊15674棟、床上浸水142910棟、床下浸水40830棟。	京都府地域防災計画
昭和10	1935	6	29		大雨					水無瀬川、芥川等に大災害。8月の豪雨と合わせて死者160名、全半壊、流出家屋約600戸、浸水家屋50,000戸。	淀川洪水の記録		京都府地域防災計画	
昭和10	1935	8	9	8	11	台風				台風。負傷20名、家屋倒壊・流失117棟、床上浸水3633棟、床下浸水43752棟。	大阪の気象百年			
昭和10	1935	8	10	8	11	大雨							京都府地域防災計画	
昭和10	1935	8	11		風雨		42.0	183	183	負傷者10名、家屋全壊・流失116棟、半壊74棟、床上浸水3632棟、床下浸水43669棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集			
昭和10	1935	8	27	8	30	台風	13.8	21.6	74	床上浸水1304棟、床下浸水12994棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集			
昭和10	1935	8	31	9	2	大雨				低気圧。中河内郡死者9名、負傷26名、家屋流失6戸、大阪市内浸水家屋35312戸。	大阪の気象百年			
昭和11	1936	2	4	2	5	強風				日本海低気圧。死者・不明者21名、負傷5名、住家全半壊30棟。	大阪の気象百年			
昭和11	1936	4	25		強風					低気圧。床上・床下浸水300余戸、漁船転覆1隻。	大阪の気象百年			
昭和11	1936	9	1		大雨								京都府地域防災計画	
昭和11	1936	9	11		大雨					京都府地域防災計画			京都府地域防災計画	
昭和11	1936	10	2	10	4	台風				家屋浸水4300余戸、市電運休。	大阪の気象百年			
昭和12	1937	9	10	9	11	台風				負傷2名、住家全半壊流失21戸、床上浸水824戸、床下浸水4351戸。	大阪の気象百年			
昭和13	1938	7	3	7	6	大雨				前線。死者・不明者19名、負傷2名、住家全半壊流失183棟、床上浸水456棟、床下浸水25106棟。	大阪の気象百年	死者6・家屋全半壊流出44・床上浸水2488。	京都府地域防災計画	
昭和13	1938	8	1	8	2	大雨							京都府地域防災計画	
昭和13	1938	9	5		台風		13.2	19.0	19	床上浸水1919棟、床下浸水13870棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集			
昭和14	1939	6	16	6	17	大雨				前線、熱帯低気圧。床上・床下浸水5500棟。	大阪の気象百年			
昭和15	1940	7	9	7	10	雷雨				1時間降水量の最大63.8mm、死者7人、家屋倒壊7戸、同浸水11万7千戸、堤防決壊3ヶ所。	大阪の気象百年			
昭和15	1940	7	15		集中豪雨					雨量120mmの集中豪雨、生駒山グラウンドで山崩れ。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集			
昭和16	1941	6	25	6	29	大雨				梅雨前線。住家全壊2棟、床下浸水9130棟、がけ崩れ4ヶ所。	大阪の気象百年	死者1・家屋全半壊20・床上浸水130・堤防決壊60。	京都府地域防災計画	
昭和17	1942	8	27	8	28	台風				床上・床下浸水400棟。	大阪の気象百年	家屋全半壊25。	京都府地域防災計画	
昭和17	1942	9	21	9	22	台風				床上浸水70棟、床下浸水7025棟。	大阪の気象百年	死者2・床上浸水130・堤防決壊11。	京都府地域防災計画	
昭和19	1944	9	7	9	8	台風				大阪市内浸水3600戸、堤防決壊3カ所、船舶沈没3隻。	大阪の気象百年			
昭和19	1944	9	17		台風16号		18.6	21.8	53	各地に豪雨被害大。床上浸水8591棟、床下浸水266棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集			
昭和19	1944	10	7	10	8	台風20号		18.6	21.8	52	死者59名、行方不明者45名、負傷者37名、家屋全壊・流失1132棟、半壊863棟、床上浸水5359棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集	詳細不明	京都府地域防災計画
昭和20	1945	9	17	9	18	枕崎台風		19.0	22.5	3	死者・不明者4名、床上浸水28234棟、床下浸水10800棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集	死者8・家屋全半壊127。	京都府地域防災計画

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県			
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	20	1945	10	9	10	13	阿久根台風	19.0	15.5	3	死者1名、行方不明者3名、家屋全壊・流失603棟、床上浸水10034棟、床下浸水19550棟。台風。家屋半壊4戸、床下浸水200戸、堤防決壊1カ所。	大阪府地域防災計画関連資料集	-	-	園部319.0	死者12、家屋全半壊84、床上浸水5822、堤防決壊74	京都気象100年
昭和	21	1946	7	29	7	30	台風										
昭和	22	1947	7	9			大雨										
昭和	22	1947	9	14	9	15	カスリーン台風										
昭和	23	1948	7	23	7	24	大雨										
昭和	23	1948	8	24	8	26	大雨										
昭和	23	1948	9	11	9	12	大雨										
昭和	23	1948	10	4	10	5	リビー台風										
昭和	23	1948	11	5	11	6	大雨										
昭和	24	1949	6	20	6	23	テラ台風										
昭和	24	1949	7	28	7	29	ヘスター台風										
昭和	24	1949	9	22	9	24	大雨										
昭和	25	1950	1	6			強風										
昭和	25	1950	1	30	1	31	強風										
昭和	25	1950	2	10			強風										
昭和	25	1950	3	6	3	7	大雨										
昭和	25	1950	5	19	5	20	大雨										
昭和	25	1950	6	20	6	21	大雨										
昭和	25	1950	6	27	6	29	大雨										
昭和	25	1950	9	2	9	4	ジェーン台風	28.1	44.7	65	死者240名、行方不明者16名、負傷者21215名、家屋全壊・流失10625棟、半壊60708棟、床上浸水54739棟、床下浸水40025棟。	大阪府地域防災計画関連資料集	舞鶴161.0 京都28.8 綾部126.0 京都50.0	死者7人、行方不明者4人、負傷者364人、住宅全壊684戸、住宅流失3戸、住宅半壊3328戸、床上浸水353戸、床下浸水3053戸。	京都府地域防災計画		
昭和	26	1951	7	1	7	2	ケイト台風										
昭和	26	1951	7	7	7	9	大雨										
昭和	26	1951	7	10	7	16	大雨										
昭和	26	1951	7	11			7月災害										
昭和	26	1951	7	15			大雨										



開始日			大阪府			京都府			奈良県			
和暦	西暦	日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典
昭和 26	1951	10 13				死者1名、負傷1名、床上浸水492棟、床下浸水2583棟。 季節風。床下浸水50棟、船舶被害1隻。	大阪の気象百年					
昭和 27	1952	1 25					大阪の気象百年					
昭和 27	1952	6 22				建物被害1棟、床下浸水3550棟、がけ崩れ2ヶ所、通信施設被害17回線。	大阪の気象百年					奈良県は、全域で暴風よりも豪雨に悩まされた。県内の主な被害は、家屋一部損壊1戸、床上浸水4戸、床上浸水66戸、田流し・埋没10町、田冠水270町、畑冠水20町、道路損壊18件、橋梁流失3件、堤防決壊6件、山・崖崩れ7件、電柱倒壊1件、鉄軌道被害1件、木材流失2030石等となっている。
昭和 27	1952	7 1 7 3				死者1名、床上浸水491棟、床下浸水8166棟。	大阪の気象百年					奈良県の気象百年
昭和 27	1952	7 9 7 11	389			死者・不明者41名、負傷者454名、家屋全壊・流失187棟、床上・床下浸水192238棟。	大阪府地域防災計画 画関連資料集					奈良県の気象百年
昭和 27	1952	11 4 11 5				床下浸水172棟。 大正池決壊により車近畿一帯で水害、死傷者1718名、住家全半壊流失1387棟、床上・床下浸水4208棟。	大阪の気象百年					
昭和 28	1953	3 11				季節風。大阪港機能麻痺。汽船沈没1隻。 寒冷前線通過。強風による架線切れにより、国鉄一時不通。 瀬戸内海低気圧。床下浸水20棟。	大阪の気象百年					
昭和 28	1953	5 29 5 30				負傷1名、住家全半壊86棟、床上浸水30棟、床下浸水3341棟、がけ崩れ8ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年					
昭和 28	1953	7 2 7 6				梅雨前線。死者1名、住家全半壊2棟、床下浸水1475棟。	大阪の気象百年					教時間内わたって雨量150ミリに達する豪雨があり、添上郡山間部や磯城郡の一部に被害があったが、柳生方面では河川氾らんし、橋が流され、家屋田畑が浸水した。
昭和 28	1953	7 17 7 20				梅雨前線。負傷1名、建物被害1棟、床下浸水3274棟。	大阪の気象百年					大塔、野迫川村では山崩れにより家屋が倒壊・埋没・流失して、死者27名(野迫川村20名、大塔村7名)を出すに至った。また、十津川は増水して木材・橋梁が流失し、至る所で崖崩れを生じた。一方、紀ノ川、大和川各支流も警戒水域を突破し、決壊寸前の状態になった。県内の主な被害は、死者31名、行方不明13名、負傷者30名、家屋全壊59戸、半壊117戸、流失169戸、一部破損1戸、床上浸水95戸、床下浸水1385戸、非住家被害79戸、田流し・埋没165町、水田冠水1483町、畑流失、埋没102町、畑冠水84町、道路損壊809ヶ所、橋梁流失231ヶ所、堤防決壊25ヶ所、山・崖崩れ530ヶ所、鉄軌道被害20ヶ所等に及んだ。
昭和 28	1953	7 20 7 21				京都82.0	床上浸水83。	京都82.0				京都気象100年



開始日			大阪府			京都府			奈良県				
和暦	西暦	日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和28	1953	8 14 8 15				国・私鉄一時不通。床下浸水60棟。	大阪の気象百年				相楽郡、綴喜郡の集中豪雨と井手町大正池の決壊、天井川のはらん。死者221人、行方不明者115人、負傷1366人、住宅全壊371戸、住宅流失381戸、住宅半壊554戸、床上浸水1649戸、床下浸水2721戸。	京都府地域防災計画	
昭和28	1953	9 1				前線により府北部に局地的豪雨。住家全半壊5棟、床上浸水41棟、床下浸水1510棟。	大阪の気象百年				堤防決壊10。	京都気象100年	
昭和28	1953	9 14 9 15				寒冷前線通過に伴い阪神地方に強雷雨。鉄道交通混乱。負傷4名。	大阪の気象百年						
昭和28	1953	9 24 9 26	22.0	28.9	176	中河内地区の山崩れで堰堤満砂し、荻原、植林地崩壊。死者26名、行方不明者1名、負傷者453名、家屋全壊・流失877棟、半壊3354棟、床上浸水13434棟、床下浸水150354棟。	大阪府地域防災計画 画関連資料集	奈良 21.4	奈良 29.7	大台ヶ原 1017.3	奈良 21.4	奈良 29.7	奈良県でも、台風の影響範囲に入り全域で被害が繰り出した。特筆すべきは、最大1時間降水量が吉野郡上北山村河台123.4mm、大台ヶ原山頂117.7mmの記録的な短時間豪雨で、吉野川や北山川が氾濫した。また、奈良市内を流れる佐保川、吉城川、菩提川が増水し、奈良市佐保、法蓮付近の民家1300戸が濁水にのまれた。県内の主な被害は、死者8名、行方不明4名、負傷者26名、家屋全壊137戸、半壊533戸、流失103戸、一部破損2341戸、床上浸水2265戸、床下浸水9536戸、非住家被害595戸、田流失・埋没619町、田冠水3941町、畑流失・埋没303町、畑冠水466町、道路損壊1669ヶ所、橋梁流失430ヶ所、堤防決壊303ヶ所、山・崖崩れ1373ヶ所、電柱倒壊448ヶ所、板崩倒壊1503ヶ所、鉄軌道被害2ヶ所、船舶流出13隻等によった。
昭和29	1954	6 5 6 7				日本海低気圧。床上浸水20棟、床下浸水1205棟。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	6 22 6 23				梅雨前線。死者1名、負傷者1名、建物全半壊2棟、床下浸水362棟。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	6 28 6 30				梅雨前線。府下の中小河川に大被害。死者2名、負傷者1名、建物被害35棟、床上浸水532棟、床下浸水34686棟。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	7 4 7 6				梅雨前線。府北部を中心に被害。死者1名、建物全半壊11棟、床上浸水344棟、床下浸水16894棟。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	7 29 7 30				負傷者9名、床下浸水53棟。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	8 17 8 20				建物被害30棟、床下浸水224棟。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	9 10 9 14				負傷4名、建物被害8棟、床下浸水129棟、がけ崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和29	1954	9 17 9 19				台風15号。死者2名、負傷者7名、建物全半壊87棟、床上浸水88棟、床下浸水239棟、鉄軌道被害4ヶ所。	大阪の気象百年	26.3					
昭和30	1955	4 14 4 18				前線停滞。建物被害5棟、床下浸水293棟。	大阪の気象百年						
昭和30	1955	6 18 6 19				梅雨前線。床下浸水1145棟、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年						
昭和30	1955	7 22 7 23				熱帯低気圧。床下浸水70棟。	大阪の気象百年						
昭和30	1955	8 31				日本海低気圧、前線。床下浸水230棟。	大阪の気象百年						
昭和30	1955	9 29 10 11				床下浸水150棟。	大阪の気象百年						
昭和30	1955	10 19 10 20				死者1名、床下浸水55棟、がけ崩れ3ヶ所、船舶被害3隻。	大阪の気象百年						

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県									
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典					
							最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)		最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)					
昭和	31	1956	2	27		強風				発達した低気圧が太平洋岸を通過。架線切れにより国・私鉄混雑。船舶被害1隻。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	3	18	3	19	大雨			低気圧が太平洋岸を通過。床下浸水650棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	6	7		大雨				梅雨前線。大阪市、堺市で床下浸水550棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	6	11	6	12	大雨			梅雨前線。低気圧。床下浸水2430棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	6	23		強風				日本海低気圧。船舶沈没1隻。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	7	23		大雨				寒冷前線通過。大阪の最大1時間降水量32.4mm。落雷により国・私鉄混雑。建物被害1棟、床下浸水1649棟。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	8	16	8	19	台風9号			死者1名、負傷者1名、建物被害7棟、床上浸水21棟、床下浸水109棟、船舶被害2隻。	大阪の気象百年												
昭和	31	1956	9	25	9	27	台風15号	106		台風自体の雨の他に寒冷前線の活動による降雨が重なり、最大雨量は石川流域で290mm、大和川上流域で210mm。三輪町で堤防が決壊、初瀬川流域では大輪町、大西領芝西地区で堤防が決壊、葛城川流域で広陵町藤之森、御所市南西部で柳田川が決壊し、大きな被害が発生。この洪水により大和川流域全体では建物被害が12435戸、浸水被害が1038ha。大阪府と奈良県合わせて死者・行方不明者4名、家屋全半壊18棟、床上浸水700棟、床下浸水11717棟。大阪府のみでは死者・行方不明者2名、家屋全半壊1棟、床上浸水141棟、床下浸水8075棟。	河川整備基本方針(大和川水系)												
昭和	32	1957	4	19	4	21	大雨			前線停滞。床下浸水300棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	6	27	6	28	台風5号	14.4	22.8	293.0	大阪府地域防災計画関連資料集												
昭和	32	1957	7	10		大雨				東大阪水害(6月水害)。雨量300mmの集中豪雨。生駒山系、枚岡市の山崩れにより水源産地の崩壊、溪流の荒廃。死者6名、負傷者4名、家屋全半壊流失20棟、床上・床下浸水121819棟。	大阪府地域防災計画												
昭和	32	1957	7	12		大雨				梅雨前線。大阪府を中心に被害。落雷により私鉄混雑。建物全半壊7棟、床上浸水938棟、床下浸水24096棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	7	12		大雨				梅雨前線。床上浸水42棟、床下浸水2878棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	7	16	7	17	大雨			梅雨前線。大阪の最大1時間降水量60.0mm。床上浸水866棟、床下浸水23687棟、停電約50000世帯。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	7	28		大雨				前線。鉄道一時不通。停電。床下浸水900棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	8	12		大雨				床上浸水15棟、床下浸水745棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	9	7		台風10号				床上浸水1棟、床下浸水568棟。	大阪の気象百年												
昭和	32	1957	9	9	9	11	大雨			前線停滞。床上浸水15棟、床下浸水745棟。	大阪の気象百年												
昭和	33	1958	4	21	4	23	大雨			前線停滞。床上浸水16棟、床下浸水3146棟。	大阪の気象百年												
昭和	33	1958	7	21		大雨				右京150 京都113 床上浸水78・床下浸水1082。	京都気象100年												

和暦	西暦	年月日	終日	気象概要		大阪府			京都府			奈良県					
				開始日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
昭和 33	1958	8 24	8 26	台風17号				大原137	家屋全半壊2・堤防決壊1。	京都気象100年	奈良 18.7	奈良 27.5	河合672.6 山上ヶ岳 636.0 奈良129.9	東南海域を中心に大雨が降った。被害は県全域で死者2名、行方不明6名、負傷者2名、家屋全壊5戸、半壊44戸、一部破損73戸、家屋流失5戸、非住家被害17戸、床上浸水95戸、床下浸水471戸、田流失・埋没6町歩、田冠水85町、畑流失・埋没4町歩、畑冠水75町歩、道路損壊118ヶ所、橋梁流失29ヶ所、堤防決壊5ヶ所、山・崖崩れ70ヶ所、通信施設被害44ヶ所等に及んだ。	奈良県の気象百年		
昭和 33	1958	8 27	8 28	大雨					寒冷前線通過、府北部に強雷雨。建物全半壊2棟、床上浸水279棟、床下浸水1541棟。	大阪の気象百年							
昭和 33	1958	9 15	9 18	台風21号						大阪の気象百年							
昭和 33	1958	9 26	9 28	狩野川台風						大阪の気象百年							
昭和 33	1958	10 15		大雨					前線通過。床下浸水3795棟。	大阪の気象百年							
昭和 34	1959	7 13	7 15	台風5号					大阪の日照水量34.2mm。建物被害2棟、床上浸水282棟、床下浸水26147棟。	大阪の気象百年							
昭和 34	1959	8 13	8 14	台風7号	199			花背503 周山330	台風7号の影響と前線の停滞による豪雨。死者14人、負傷者30人、住宅全壊42戸、住宅流失75戸、住宅半壊98戸、床上浸水5508戸、床下浸水26056戸。	京都府地域防災計画			日出岳 593.0 前鬼475.0 山上ヶ岳 451.0 奈良221.0	県南東郡を中心に大雨となり、被害は全域で死者1名、家屋半壊5棟、流失3棟、一部破損2棟、床上浸水257ha、畑流失・埋没9ha、畑冠水20ha、道路損壊38ヶ所、橋梁流失52ヶ所、堤防決壊37ヶ所、山・崖崩れ65ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通信施設被害42回線等の上った。	奈良県の気象百年		
昭和 34	1959	9 26	9 27	伊勢湾台風				舞鶴287 峰山226 宮津243	死者9人、負傷者169人、住宅全壊114戸、住宅流失65戸、住宅半壊1051戸、床上浸水8176戸、床下浸水14760戸。	京都府地域防災計画	奈良 23.3	奈良 32.6	河合881.0 前鬼867.0 日出岳 826.0 奈良221.0	奈良県でも被害は全域に及び、死者88名、行方不明25名、負傷者104名、家屋全壊795棟、半壊1598棟、流失558頭、一部破損1056棟、非住家被害653棟、床上浸水6171棟、床下浸水4054棟、田流失・埋没421ha、田冠水1309ha、畑流失・埋没124ha、畑冠水668ha、道路損壊863ヶ所、橋梁流失381ヶ所、堤防決壊118ヶ所、山・崖崩れ1967ヶ所、鉄軌道被害6ヶ所、通信施設被害118回線、罹災者概数30221名等の上った。	奈良県の気象百年		
昭和 34	1959	11 2		大雨					日本海低気圧。寒冷前線通過。大阪の最大1時間降水量38.5mm。死者1名、床上浸水43棟、床下浸水4672棟。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	4 19	4 20	大雨					低気圧が瀬戸内を東進。陸海空の交通混乱。建物被害4棟、汽船大破1隻。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	5 18	5 19	大雨					南岸低気圧。床上浸水10棟、床下浸水2593棟。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	5 27		大雨					二つ玉低気圧。床下浸水30棟。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	6 21	6 22	豪雨					梅雨前線、日本海低気圧。建物被害7棟、床下浸水566棟、山崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	7 7	7 8	大雨					梅雨前線。床下浸水200棟。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	8 12	8 13	台風12号					床上浸水168棟、床下浸水18658棟。	大阪の気象百年							
昭和 35	1960	8 28	8 30	台風16号					死者3名、負傷者3名、建物被害58棟、床上浸水478棟、床下浸水8934棟、がけ崩れ101ヶ所、船舶被害1隻。	大阪の気象百年							
昭和 36	1961	5 28	5 29	台風4号					建物全壊2棟、床上浸水2棟、床下浸水57棟。	大阪の気象百年							
昭和 36	1961	6 24	6 30	豪雨	9.8	12.0	296	花背478 京都414	死者1名、家屋の全壊・流失11棟、床上浸水2855棟、床下浸水32205棟。	大阪府地域防災計画 画関連資料集				県内一円に豪雨が降り、奈良の雨量145ミリ、富雄川は警戒水位を超え、一部で浸水するところも上った。	奈良市の災害史		

開始日			大阪府			京都府			奈良県					
和暦	西暦	終了日	気象概要		事象	気象値		事象	気象値		出典			
			最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)		最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)		最大風速(m/s)	最大瞬間風速(m/s)				
昭和36	1961	7月9日	大雨		寒冷前線通過、十三で強風により障害倒壊、落雷により国・私鉄混雑、東大阪一体で停電。6/24~7/10の全国にわたる大雨を「昭和36年梅雨前線豪雨」と名付けた。									
昭和36	1961	7月25日	大雨		日本海低気圧。床上浸水5棟、床下浸水25棟。									
昭和36	1961	9月15日	第2室戸台風	33.3	死者32名、負傷者2392名、家屋の全壊・流失3386棟、半壊2136棟、床上浸水61488棟、床下浸水59729棟。	44	50.6	舞鶴 京都 34.3	府南部を通過、死者12人、負傷者251人、住居全壊941戸、住宅半壊4545戸、床上浸水5戸、床下浸水645戸。	奈良 25.0	奈良 42.4	奈良県でも全域で死者6名、負傷者142名、家屋全壊362棟、半壊988棟、流失3棟、床上浸水91棟、床下浸水66棟、一部破損10963棟、非住家被害2470棟、田流失・埋没454ha、田冠水665ha、畑流失・埋没2ha、畑冠水124ha、道路損壊192ヶ所、橋梁流失34ヶ所、堤防決壊10ヶ所、山・崖崩れ141ヶ所、鉄軌道被害8ヶ所、通信施設被害864回線、木材流失1510m <sup>3</sup> に及んだ。	奈良県の気象百年	
昭和36	1961	10月10日	大雨		寒冷前線通過、府下10万戸停電。床上浸水282棟、床下浸水1025棟、通信回線被害55000回線。									
昭和36	1961	10月26日	大雨	151	低気圧が瀬戸内を通過。建物全半壊2棟、床上浸水187棟、床下浸水5923棟、がけ崩れ12ヶ所。			花背530 周山328	木津川、宇治川、桂川、由良川の増水と内水。死者3人、行方不明者1人、負傷者3人、住宅全壊3戸、住宅流失2戸、住宅半壊39戸、床上浸水2968戸、床下浸水3917戸。				県南東部を中心に大雨となった。県内の主な被害は、死者1名、負傷者1名、家屋全壊3棟、半壊2棟、一部破損12棟、非住家被害4棟、床上浸水17棟、床下浸水628棟、田流失・埋没31ha、田冠水771ha、畑冠水2ha、道路損壊89ヶ所、橋梁流失24ヶ所、堤防決壊6ヶ所、山・崖崩れ76ヶ所、通信施設被害3回線等となっている。	奈良県の気象百年
昭和37	1962	6月6日	大雨		梅雨前線。床下浸水150棟。									
昭和37	1962	6月9日	大雨		梅雨前線。死者1名、建物被害1棟、床下浸水1169棟。			綾部190 和知167 福知山164	床上浸水273戸、床下浸水451戸。					
昭和37	1962	6月12日	大雨		梅雨前線。死者1名、負傷者5名、建物被害4棟、床上浸水30棟、床下浸水649棟、がけ崩れ14ヶ所。									
昭和37	1962	6月26日	大雨		梅雨前線。床下浸水50棟。									
昭和37	1962	7月4日	大雨		梅雨前線。建物全壊6棟、床上浸水30棟、床下浸水649棟、がけ崩れ10ヶ所。									
昭和37	1962	7月26日	台風7号		死者1名、負傷者15名、建物被害34棟、床下浸水11棟、船舶被害16隻、鉄軌道被害11ヶ所、停電30万戸。					奈良 19.0	奈良 29.3	北部平坦部では、強風のため農作物・果樹類の被害、道畔に転落したバス・トラック等もあった。県全域で負傷者1名、家屋全壊2棟、流失1棟、床上浸水9棟、床下浸水41棟、田畑流失・埋没9ha、田畑冠水20ha、道路損壊38ヶ所、橋梁流失2ヶ所、山・崖崩れ8ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通信施設被害267回線等があった。	奈良県の気象百年	
昭和37	1962	10月14日	大雨		寒冷前線通過。床下浸水600棟、通信施設被害1300回線。									
昭和38	1963	5月14日	大雨		日本海低気圧、寒冷前線。床下浸水1574棟、鉄軌道被害1ヶ所。									
昭和38	1963	5月16日	大雨		梅雨前線。床下浸水177棟、船舶事故1件。									
昭和38	1963	5月21日	大雨		梅雨前線。床下浸水534棟、船舶事故1件(沈没)。									
昭和38	1963	5月27日	大雨		梅雨前線。床下浸水1124棟、通信回線不通3000回線。									
昭和38	1963	6月2日	台風2号		床下浸水1448棟、山崩れ1ヶ所。			宮津101	家屋全半壊3・床上浸水36・堤防決壊20。					
昭和38	1963	6月13日	台風3号		負傷1名、住家全半壊1棟。									
昭和38	1963	7月10日	大雨					細見101	堤防決壊1。					
昭和38	1963	7月22日	大雨											
昭和38	1963	8月16日	大雨		寒冷前線。床下浸水325棟。			比叡山127	床上浸水13・堤防決壊7。					



開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県				
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
昭和	38	1963	8	25		大雨				霪冷前線。大阪の時間降水量41.0mm、大阪市、布施市などで大規模な停電。床上浸水86棟、床下浸水2698棟。	大阪の気象百年							
昭和	38	1963	8	30	8	31	大雨			日本海低気圧。電線切断により9万戸停電。船舶沈没2隻。	大阪の気象百年				床上浸水5。	京都気象100年		
昭和	39	1964	4	7	4	8	大雨				大阪の気象百年				死者3・家屋全半壊1。	京都気象100年		
昭和	39	1964	6	19	6	20	大雨			梅雨前線、日本海低気圧。建物被害2棟、床下浸水79棟、がけ崩れ3ヶ所、通信施設被害6000回線。	大阪の気象百年				床上浸水	京都気象100年		
昭和	39	1964	6	25	6	27	大雨			梅雨前線。床上浸水3棟、床下浸水1760棟。	大阪の気象百年							
昭和	39	1964	7	14	7	16	昭和39年7月山陰北陸豪雨				大阪の気象百年				堤防決壊8。	京都気象100年		
昭和	39	1964	8	24						陸上・海上・航空交通混乱。床下浸水23棟。	大阪の気象百年							
昭和	39	1964	9	24	9	25	台風20号	19.0	31.7	41	負傷者17名、家屋全壊・流失104棟、半壊15棟、床上・床下浸水10563棟。	大阪府地域防災計画関連資料集	京都 29.2 舞鶴 22.5	118 108 久美浜79	負傷者7人、住宅全壊3戸住宅半壊11戸、床上浸水1戸、床下浸水165戸。	京都府地域防災計画		
昭和	40	1965	5	26	5	27	台風6号				死者2名、負傷者2名、床上浸水182棟、床下浸水13134棟、がけ崩れ14ヶ所、通信施設被害4回線。	大阪の気象百年				床上浸水1。	京都気象100年	
昭和	40	1965	6	19	6	21	大雨				梅雨前線。建物被害2棟、床下浸水79棟、がけ崩れ3ヶ所。	大阪の気象百年				家屋半壊1。	京都気象100年	
昭和	40	1965	7	6	7	7	大雨					大阪の気象百年				床上浸水1、堤防決壊1。	京都気象100年	
昭和	40	1965	7	22								大阪の気象百年				床上浸水2。	京都気象100年	
昭和	40	1965	7	23								大阪の気象百年				家屋全半壊1、床上浸水7。	京都気象100年	
昭和	40	1965	9	9	9	11	台風23号				死者1名、負傷者24名、建物全壊15棟、半壊28棟、床上浸水230棟、床下浸水566棟、建物一部破損137棟、非住家被害414棟、鉄道被害5ヶ所、通信施設被害1487回線、船舶沈没1隻。	大阪の気象百年	舞鶴 39.6 京都 25.8	273 25.8	死者3人、負傷者67人、住宅全壊75戸、住宅半壊355戸、床上浸水7戸、床下浸水1025戸。	京都府地域防災計画		
昭和	40	1965	9	13	9	18	台風24号				死者3名、行方不明1人、負傷者16名、建物全壊13棟、半壊34棟、流失1棟、床上浸水436棟、床下浸水12009棟、建物一部破損165棟、非住家被害99棟、がけ崩れ194ヶ所、鉄道被害3ヶ所、通信施設被害1929回線、木材流失180m。	大阪の気象百年	京都 36.7 舞鶴 33.1	知井518	死者1人、負傷者34人、住宅全壊29戸、住宅半壊167戸、床上浸水2088戸、床下浸水8682戸。	京都府地域防災計画		
昭和	40	1965	11	9						床下浸水270棟、国鉄嵯峨線一時不通。	大阪の気象百年							
昭和	41	1966	6	30	7	2	大雨			梅雨前線。床上浸水3600棟、床下浸水30000棟、非住家被害13棟、がけ崩れ43ヶ所、鉄道被害3ヶ所。	大阪の気象百年					北今西 230.0 荒神岳 136.0 王寺132.0 奈良120.0	大雨により主に大和川水系の各河川が増水した。県内の主な被害は、死者2名、住家一部破損1棟、非住家被害13棟、床上浸水26棟、床下浸水658棟、山・崖崩れ16ヶ所、道路損壊14ヶ所、橋梁流失4ヶ所、鉄道被害1ヶ所、農業被害3945ha等となっている。	奈良県の気象百年
昭和	41	1966	7	1	7	2	豪雨				大阪の気象百年							
昭和	41	1966	7	7	7	10	大雨			梅雨前線。道路浸水、堤防決壊、陸空の交通混乱。床上浸水3000棟、床下浸水4400棟。	大阪の気象百年				家屋全半壊1・床上浸水31・堤防決壊1。	京都気象100年		
昭和	41	1966	8	13	8	21	異常潮位			床下浸水、突堤水没、電車線路水没。	大阪の気象百年							
昭和	41	1966	9	16	9	19	大雨			南岸低気圧上筋線。水田冠水、道路損壊、山くずれ発生。床下浸水22000棟。	大阪の気象百年							
昭和	41	1966	9	17	9	19	大雨				大阪の気象百年					福知山105 床上浸水1・堤防決壊2。	京都気象100年	







開始日				大阪府				京都府				奈良県				
和暦	年	西暦	日	気象概要		事象	出典	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典	
				最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)			最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)			最大風速 (m/s)
昭和	47	1972	9 13	9 20	台風20号	死者3名、負傷者9名、家屋全壊・流出8棟、半壊90棟、床上浸水9283棟、床下浸水60146棟。	大阪府地域防災計画関連資料集		118	舞鶴 35.8 京都 22.8	上林297 田歌259 西別院229	由良川、中小河川はらんらん。死者8人、行方不明1人、負傷者32人、住宅全壊17戸、住宅半壊79戸、床上浸水2958戸、床下浸水15744戸。	京都府地域防災計画	この台風は風雨共に強く、特に台風の通過した県南部・東部に被害が多かった。県内の主な被害は、負傷者2名、家屋全壊9棟、半壊13棟、床上浸水3棟、床下浸水110棟、耕地流失・埋没188ha、耕地冠水539ha、山・崖崩れ84ヶ所、道路損壊121ヶ所、堤防決壊15ヶ所、橋梁流失3ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年	
昭和	48	1973	5 1	5 2	大雨	日本海低気圧。床上浸水67棟、床下浸水2528棟。	大阪の気象百年									
昭和	48	1973	7 14		豪雨											奈良市営史
昭和	48	1973	8 19		大雨											
昭和	48	1973	10 13		大雨	寒冷前線。床下浸水430棟。	大阪の気象百年									
昭和	49	1974	4 7	4 9	大雨	前線停滞。阪和線一時不通。床下浸水390棟。	大阪の気象百年									
昭和	49	1974	6 17	6 18	大雨	二つ玉低気圧。大阪、守口、東大阪で浸水被害。床上浸水23棟、床下浸水666棟。	大阪の気象百年				京都125.5	床上浸水1。				
昭和	49	1974	6 21		大雨											
昭和	49	1974	7 3	7 11	台風8号											奈良県の気象百年
昭和	49	1974	9 8	9 9	台風18号	貝塚市、泉佐野市で浸水被害。床下浸水10棟。	大阪の気象百年			物部224 夜久野220 宮津218	台風と前線による水害。住宅半壊7戸、床上浸水3戸、床下浸水496戸。	京都府地域防災計画				
昭和	50	1975	6 25		大雨	梅雨前線。東大阪市で床下浸水200棟。	大阪の気象百年									
昭和	50	1975	7 3	7 4	7月豪雨	梅雨前線による大雨。床上浸水1933棟、床下浸水22493棟。	大阪府地域防災計画関連資料集									
昭和	50	1975	7 24		大雨	寒冷前線。床上浸水135棟、床下浸水2479棟、がけ崩れ2ヶ所。	大阪の気象百年			和束247	花背峠1時間最大雨量11.0mm。床上浸水10。死者1・負傷者4・家屋半壊2・床上浸水12・堤防決壊8。	京都気象100年				
昭和	50	1975	8 6	8 7	大雨	負傷者2名、床上浸水182棟、床下浸水3777棟、非住宅被害3棟、がけ崩れ2ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通信施設被害1ヶ所。	大阪の気象百年			京都229 亀岡122 京都91	花背229 亀岡122 京都91	住宅半壊1戸、床上浸水3戸、床下浸水271戸。	京都府地域防災計画			
昭和	50	1975	9 18		大雨											
昭和	51	1976	4 23		大雨											
昭和	51	1976	6 8	6 11	大雨	梅雨前線。死者1名、床上浸水42棟、床下浸水2009棟、がけ崩れ9ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年									
昭和	51	1976	7 7		大雨	国鉄・地下鉄一時不通。大東市で停電2600戸、床下浸水770棟。	大阪の気象百年									
昭和	51	1976	7 19		台風9号						三和189	床上浸水8。				
昭和	51	1976	7 21		大雨	停電700戸。床上浸水9棟、床下浸水500棟。	大阪の気象百年									

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県				
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
昭和	51	1976	7	26	7	28	大雨			停電で、国・私鉄及び地下鉄一時不通。大阪府北東部で降雹。死者1名、負傷者1名、床上浸水5棟、床上浸水1150棟。	大阪の気象百年				西吉野村、下市町、五條市等で強雨と突風を伴い大豆大の雹が降った。県内の主な被害は、家屋全壊(落雷)2棟、床上浸水109棟、床上浸水2265棟、道路71ヶ所、山・崖崩れ1ヶ所、堤防決壊1ヶ所、農業被害1億9769万円(294ha)、電力障害409件等に及んだ。	奈良県の気象百年		
昭和	51	1976	9	8	9	17	台風17号			死者1名、建物全壊1棟、半壊1棟、床上浸水22棟、床上浸水3893棟、建物一部破損5棟、がけ崩れ31ヶ所、鉄軌道被害3ヶ所。	大阪の気象百年				全域で長期間大雨が降った。県内の主な被害は、家屋一部損壊5棟、床上浸水96棟、田流出・埋没7ha、田冠水368ha、畑流失・埋没4ha、山・崖崩れ11ヶ所、道路損壊42所等となった。	奈良県の気象百年		
昭和	52	1977	7	4	7	5	大雨			床上浸水6棟、床上浸水171棟。	大阪の気象百年				舞鶴65.5	家屋半壊1・負傷者1。	京都気象100年	
昭和	52	1977	7	17														
昭和	52	1977	7	18						梅雨前線。行方不明1名、負傷者23名、床上浸水1棟、床上浸水536棟、がけ崩れ7ヶ所。	大阪の気象百年					局地的な短時間強雨が降った。このため、特に桜井市を流れる寺川が各所で溢れ、2戸が床上浸水、329戸が床上浸水した。県内の主な被害は、負傷者1名、床上浸水3棟、床上浸水339棟、田冠水4ha、山・崖崩れ4ヶ所、道路損壊34ヶ所、河川損壊5ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年	
昭和	52	1977	11	16	11	17	大雨											
昭和	53	1978	6	22	6	23	大雨			梅雨前線。停電1万戸、私鉄ダイヤ乱れ、大阪空港49便欠航。死者1名、負傷者1名。	大阪の気象百年							
昭和	53	1978	7	10						国・私鉄のダイヤ乱れ、大阪の1時間降水量65mmは解説以来の記録。床上浸水827棟。	大阪の気象百年							
昭和	54	1979	5	7	5	8	豪雨			瀬戸内低気圧。床上浸水1688棟。	大阪の気象百年							
昭和	54	1979	5	26						日本海低気圧。停電1万戸、私鉄ダイヤ乱れ、大阪空港49便欠航。死者1名、負傷者1名。	大阪の気象百年							
昭和	54	1979	6	26	7	2	6月豪雨		497	梅雨前線による大雨。家屋全壊・流出3棟、半壊1棟、床上浸水1336棟、床上浸水22865棟。	大阪府地域防災計画 画 関連資料集							
昭和	54	1979	9	24	10	2	台風16号			前線。床上浸水7202棟。	大阪の気象百年							
昭和	54	1979	9	30	10	1	台風16号		149	死者1名、負傷者5名、家屋半壊19世帯、床上浸水5088棟、床上浸水41489棟。	大阪府地域防災計画 画 関連資料集							
昭和	54	1979	10	14	10	20	台風20号			陸海空の交通混乱。公立学校、幼稚園では19日臨時休校。	大阪の気象百年							
昭和	55	1980	2	1						冬型。泉大津市沖で砕石運搬船転覆して死者3名。	大阪の気象百年							
昭和	55	1980	6	1	6	3	豪雨			南海高野線一時不通、大阪市淀川区と堺市で降雹、大きなもの直径3cm。床上浸水27棟、床上浸水624棟、がけ崩れ1ヶ所。	大阪の気象百年							

開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県						
和暦	年	西暦	月	日	日	時	分	秒	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
昭和	55	1980	7	6	7	12			大雨											
昭和	55	1980	8	22	8	27			大雨											
昭和	55	1980	8	31					大雨											
昭和	55	1980	9	6	9	8			大雨											
昭和	56	1981	7	29	8	1			台風10号											
昭和	56	1981	10	7	10	9			大雨											
昭和	57	1982	8	1	8	3			台風10号	13.4	209		台風とその後の低気圧による大雨。死者8名、負傷者4名、家屋全壊・流出70世帯、半壊一部破損含み99世帯、床上浸水10610棟、床下浸水63460棟。	大阪府地域防災計画 大阪府資料集						
昭和	58	1983	6	20	6	21			大雨											
昭和	58	1983	9	24	9	30			台風10号											
昭和	59	1984	6	25	6	27			大雨											
昭和	59	1984	7	16					大雨											
昭和	60	1985	6	18	7	6			台風6号											

開始日			大阪府			京都府			奈良県							
和暦	年	西暦	月	日	気象概要	気象値		事象	出典	気象値		事象	出典			
						最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)			雨量 (mm)	最大風速 (m/s)			最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	
昭和 61	1986	7 20	7	23	大雨	-	-	宇治市322 長岡京市311 京都市194	梅雨前線による大雨。死者1人、負傷者2人、住宅全壊12戸、住宅半壊162戸、床上浸水162戸、床下浸水2471戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-		
昭和 62	1987	7 12	7	21	大雨	-	-	京都市242 (7/14-15) 京都市132 (7/19-20)	梅雨前線による大雨。住宅半壊1戸、床上浸水6戸、床下浸水515戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-		
昭和 62	1987	10 13	10	18	台風19号	丹後 町17	-	宮津市207 夜久野町195 福知山市170	負傷者1人、床上浸水42戸、床下浸水208戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-		
昭和 63	1988	8 24	8	25	豪雨	-	-	久美浜町211 宮津市186 網野町186	負傷者2人、住宅半壊1戸、床上浸水94戸、床下浸水1077戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-		
平成 1	1989	9 2	9	3	豪雨	-	-	周山202 亀岡158	秋雨前線による大雨。床上浸水12戸、床下浸水118戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-		
平成 2	1990	9 16	9	20	台風19号	-	-	美山町391 久美浜町356	負傷者5人、住宅全壊1戸、住宅半壊6戸、床上浸水52戸、床下浸水560戸。	京都府地域防災計画	奈良 13.6 29.3	日出岳 1043.0 上北山 838.0 山上ヶ岳 579.0 奈良286.0	県南東部を中心に大雨となった。このため、吉野川支流や十津川が増水して、家屋浸水等の被害が発生した。県内の主な被害は、家屋半壊・破損5棟、床上浸水46棟、床下浸水105棟、山・崖崩れ6ヶ所、堤防決壊2ヶ所等があった。	奈良県の気象百年		
平成 3	1991	7 27	7	27	大雨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	大宇陀町、菟田野町、榛原町等で落雷や大雨による被害が発生した。県内の主な被害は、負傷者1名、家屋半壊1棟、床上浸水4棟、床下浸水45棟、河川損壊71ヶ所、道路損壊63ヶ所等となっている。 日最大1時間降水量 大宇陀43.0mm (27日14時)、曾爾35.0mm (27日15時)、奈良10.0mm (27日00時40分)	奈良県の気象百年
平成 3	1991	9 24	10	1	台風19号	-	-	-	負傷者15人、住宅全壊1戸、住宅半壊2戸、床下浸水8戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-		
平成 4	1992	8 11	8	11	大雨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	県北部を中心に雷を伴い激しい雨が降った。このため、県北部、特に桜井市を中心に、床上浸水11棟、床下浸水97棟等の被害があった。また、桜井市で線路が冠水し、電車が一時不通となった。 日最大1時間降水量 田原本55.0mm (11日18時)、奈良20.0mm (11日18時20分)	奈良県の気象百年
平成 4	1992	8 17	8	20	台風11号	-	-	京都市332 京北町232	死者1人、住宅全壊1戸。	京都府地域防災計画	-	-	-	-	-	
平成 4	1992	8 24	8	24	大雨	-	-	-	-	-	-	-	-	-	県北部を中心に激しい雷雨となった。このため、特に、王寺町、平群町、榛原町等の県北部で、床上浸水5棟、床下浸水282棟、道路損壊1ヶ所等の被害があった。また、落雷により、斑鳩町、王寺町、奈良市で約1900戸が停電した。 日最大1時間降水量 曾爾63.0mm (24日15時)、奈良31.5mm (24日16時10分)	奈良県の気象百年



開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県			
和暦	年	西暦	月	日	日	気象概要	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	
平成 5	1993	6	28	7	8	大雨				向日市155 八幡市144	京都府地域防災計画			玉置山 428.0 風量414.0 奈良282.0	県全域で大雨が降った。県内の主な被害は、家屋半壊1棟、床上浸水61棟、道路損壊3ヶ所、山・崖崩れ10ヶ所等となっている。	奈良県の気象百年	
平成 6	1994	9	6	9	7	9月豪雨				負傷者3名、家屋半壊1世帯、床上浸水1428棟、床下浸水4375棟。	大阪府地域防災計画 画関連資料集			日出岳 887.0 高尾352.0 曾爾322.0 奈良44.0	大雨と強風により県全域で、負傷者1名、家屋全壊2棟、破損31棟、床上浸水18棟、床下浸水95棟、橋梁流失1ヶ所、道路損壊161ヶ所、山・崖崩れ9ヶ所等の被害があった。	奈良県の気象百年	
平成 6	1994	9	28	9	30	台風26号				低気圧と梅雨前線により、大気の状態が不安定となり降雨。大阪府域では堺市や河内長野市で内水に よって浸水被害が発生。大和川流域全体で、家屋全・半壊1棟、床上浸水216棟、床下浸水2296棟。大阪府のみでは床上浸水5棟、床下浸水117棟。	河川整備基本方針 (大和川水系)			風量336.0 奈良267.0 五條251.0 針239.0	特に、8日から4日にかけて県全域で短時間に激しい雨が降った。県内の主な被害は、家屋の半壊2棟、一部損壊4棟、床上浸水229棟、床下浸水1650棟、道路損壊7ヶ所、山・崖崩れ22ヶ所、橋梁流失1ヶ所等に上った。	奈良県の気象百年	
平成 10	1998	9	22			台風7号				舞鶴市198 美山町186 京都市180 30.2	京都府地域防災計画	大宇陀 16.0 奈良 37.6 13.1 五條 13.0	死者2人、負傷者87人、非住家被害1803棟、住家全壊2棟、住家一部損壊979棟、床上浸水1棟、床下浸水36棟、道路損壊68ヶ所、橋梁流失3ヶ所、山・崖崩れ77ヶ所。	奈良県地域防災計画			
平成 11	1999	6	23	7	3	大雨				花背 256(6/23-27) 京都 211(6/29-30)	京都府地域防災計画				梅雨前線による大雨。負傷者2人、住家全壊3戸、床上浸水135戸、床下浸水1792戸。		
平成 11	1999	8	9	8	11	豪雨			133	熱帯性低気圧。堺市や松原市で内水によって浸水被害が発生。大和川流域全体での被害は、家屋全・半壊2棟、床上浸水33棟、床下浸水400棟。大阪府のみでは床上浸水10棟、床下浸水189棟。	河川整備基本方針 (大和川水系)			奈良149.5 針134 大宇陀123	県北部を中心に雷を伴う短時間強雨となった。県北部で、床上浸水12棟、床下浸水52棟、山がけ崩れ2ヶ所、鉄軌道被害1ヶ所、通行止め1路線13区間等の被害があった。	奈良県地域防災計画	
平成 12	2000	7	4			集中豪雨				奈良県北部を中心に雷・ひょうを伴う短時間強雨となり、奈良県北部で日最大1時間降水量37mmを観測した。奈良県北部で、床上浸水188棟、床下浸水1212棟、道路損壊29ヶ所、河川損壊20ヶ所、山がけ崩れ3ヶ所、鉄道不通1ヶ所、電話不通2900世帯、建物被害2ヶ所、橋梁損壊1ヶ所、田冠水6.5ha、畑冠水2haの被害があった。	大和川の洪水・過去の水害			針180 上北山43 奈良42.5	県北部を中心に雷・ひょうを伴う短時間強雨となり、奈良県北部で日最大1時間降水量37mmを観測した。奈良県北部で、床上浸水188棟、床下浸水1212棟、道路損壊29ヶ所、河川損壊20ヶ所、山がけ崩れ3ヶ所、鉄道不通1ヶ所、電話不通2900世帯、建物被害2ヶ所、橋梁損壊1ヶ所、田冠水6.5ha、畑冠水2haの被害があった。	奈良県地域防災計画	
平成 12	2000	9	11	9	12	東海豪雨				滝畑雨量観測所において累加雨量206mmを記録、藤井水位観測所(王寺町)で警戒水位(6m)を超える6.0mを記録、その他7つの観測所で指定水位を超えた。	大和川の洪水・過去の水害						
平成 13	2001	8	18	8	24	台風11号				綾部市171 園部154	京都府地域防災計画				府内の降水量30~150mm。負傷者1人、床下浸水98戸。		
平成 14	2002	7	8	7	12	台風6号				福知山市 182 大江町149	京都府地域防災計画				府内各地の降水量20~60mm。床下浸水9戸。		
平成 14	2002	9	6	9	8	大雨				伊根町254 綾部市103	京都府地域防災計画				床下浸水38戸。		



開始日			終了日			大阪府				京都府				奈良県								
和暦	年	西暦	月	日	日	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典	最大風速 (m/s)	最大瞬間風速 (m/s)	雨量 (mm)	事象	出典		
平成	15	2003	7	11	7																	
			14	14	14				府内各地の降水量30～50mm。床下浸水0戸。	京都府地域防災計画												
平成	15	2003	8	14	8																	
			15	15	15				府内各地の降水量30～60mm。	京都府地域防災計画												
平成	16	2004	8	7	7																	
									床上浸水44戸、床下浸水205戸。	京都府地域防災計画												
平成	16	2004	9	24	9																	
			30	30	30				府内各地の降水量70～150mm。床上浸水13戸、床下浸水224戸。	京都府地域防災計画												
平成	16	2004	10	17	10																	
			21	21	21				死者15人、負傷者202人、住宅全壊26戸、住宅半壊328戸、床上浸水2726戸、床下浸水4376戸。	京都府地域防災計画												
平成	19	2007	7	16	7			90	大阪府南部から奈良県北部を中心に、低気圧と梅雨前線による局地的な大雨。大和川の藤井観測所で計画高水位を超えた。大和川流域では、床上浸水99棟、床下浸水1017棟の被害。大阪府の床上浸水2棟、床下浸水50棟。	河川整備基本方針(大和川水系)												

①中央気象台(1900-2002)「気象要覧」

②国立天文台編(2011)「理科年表 平成24年」丸善出版

※期間、気象値などは①、②の資料も参照した。

土地分類基本調査（土地履歴調査）  
説明書  
奈良

平成25年3月

国土交通省国土政策局国土情報課

土地分類基本調査（土地履歴調査）の成果は、国土交通省  
ホームページからご利用いただけます。